THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年　第六號

第二百三十一號

本美の前空・著大の前空

小栗風葉氏
德田秋聲氏柳川春葉氏合著

小說 三人叢書

紙數大判八百頁
總洋布最上製
價壹圓五拾錢
小包料拾六錢

風葉・秋聲・春葉の三氏は現時文壇の誇りとすべき最も大なる作家也。三氏の傑作數十篇を輯めたる本叢書は小說界空前の偉觀を以て目すべき者ならむ。

發行所 東京神田駿河臺（電話本局三千四番）東京國民書院

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

思想界の大彗星出現す

自覺哲學 大覺譜 完

總クロース金文字入紙數四百廿五頁
定價壹圓貳拾五錢　小包料金八錢

文科大學講師 内藤湖南先生序　文學博士 松本文三郎先生序
文學博士 前田慧雲先生題　舞鶴仙史講演

暗黑を解脱して光明界に出でんことを求むる人は此書を讀め

社會未だ舞鶴仙史の何人なるやを知るもの少し蓋し市井に隠れたる哲人也年少より苦學修養し眞理を自知せる士也而して本書納むる處宇宙人生靈界の三者に向つて自覺の上より解脱したるもの、説の可否は後世に定評あらんも我國に於て現時獨創の旗幟を建てたるは最も偉とすべし。

學者と軍人と實業家と書生と女學生とを不撰

發行所 自覺會
發賣兼發行所 寶文館
東京日本橋本石町（振替口座二八〇）
大阪東區備後町四（振替口座六九一一）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新世紀講話叢書

東京帝國大學文科大學助敎授 文學博士 藤岡作太郎著

國文學史講話

〔製本既成〕

菊版美装全壹册
紙數五百餘頁
正價金貳圓
内地小包料拾貳錢

文學は一國文明の精華なり、政事、軍事の變遷を知るのみにして、以て歷史を修めたりといふべからず、社會の精神的事業の進歩を究めて、而して後國民が盛衰の跡を覗ふべし、文學史はこゝに於てか高尙なる社會文明史なり。わが國、從來、文學史の編述なきにあらずと雖も、或は輕便に失するか、或は一時代に局するかにして、未だ一部の完全なるものあるを聞かず、讀書界をして久しく荒凉の觀あらしめしは弊館が江湖と共に遺憾とせし所なりき。今や幸にして本書發行の運に合せり。本書は國文學の大家藤岡博士が精年苦心の餘に成り、上神代より下明治に及ぶまで、文學の變遷を敍すること精到にして調密なり。說く所、單に些々たる事件の年表に止まらず又文學者文人の履歷や圖書の解題を臚列したるものにあらず、時代の思潮を論じ、文學者の性格を評し、一代々々の社會の情態、民衆の思想歷々として眼前に躍動す。此書一たび出てて江湖は始めて無比の文學史に接するのみならず、又稀有の社會文明史を得たるを喜ぶべく、以て文學の研鑽に資すべく、以て一般歷史の考究に便すべし。世の學問に志す者、文藝に遊ぶ者が必要の書たるは固より、何人と雖もこれを繙いて、學問以外に趣味あり、小說以外の利益あるを感ぜざるを得ざるべし。これ弊館の固く信じて疑はざる所なり。

東京帝國大學文科大學助敎授 文學博士藤岡作太郎著

國文學全史 平安朝篇

〔既刊〕

菊版美装全一册
紙數七百五十頁
正價金貳圓五拾錢
内地小包料拾貳錢

東京高等師範學校敎授 理學博士丘淺次郎著

進化論講話 (改修七版)

〔既刊〕

菊版美装全一册
紙數六百五十頁
正價金貳圓
内地小包料拾六錢

發行所 東京市小石川區小日向水道町 大阪市心齋橋通北久寶寺町角 開成館

取次所 全國各地著名書店

中央公論第二十三年第六號目次

"THE TEMPTATION OF SIR PERCIVAL"



BY ARTHUR HACKER.



第二十三年
第六號
（第二百卅一號）

政友會大同派併合論

（一）

吾人は前月の本誌に於て、政友會と大同倶樂部との提携し合同するの當然なるを提議したりき、今總選擧の結果を看るに及んで、更らに之を繰返すの要あるを感ず。

（二）

總選擧の結果は、最も大同倶樂部に不利なりき、政黨としての地盤を有せざる彼等が、總選擧に於て著るしく議員數を減ずべきとは、天下の擧げて豫期せる所なりき、彼等が民間黨の一部としては大なる政友會の壓迫を蒙むり、增稅贊成黨としては民間各派より痛烈なる攻擊を受くべきとは、何人も之を豫想せざるは莫かりき、然るも總選擧の後、其の過半を減じて三十人未滿の少數黨と爲らんとは、恐らく

ば世の驚駭を禁ぜざる所なるべし。

彼等の首領は今に至るも、尙ほ非政黨論の陳套說に責任を感ずるか、政黨の勢力を政局打算の外に措くを得ず、局に當るに於て到底政黨に由らざるを得ざる事實を看取しながら、進んでは公然政黨首領として立つことを爲さず、退いては威力又は金力を以て彼等の競爭を助くることをせず、單に自から心を苦め氣を悶ゆるのみ、然かも官民兩黨より挾擊せられて彼等防禦の術なきに於て、如何ぞ大敗を免がれんや。

然かも吾人は彼等の首領に望む所あらざる能はず、他なし、區々の私黨を立つるの畢竟無要なるを省悟し、同主義同政見なるの故を以て斷然現內閣の人々と握手し、以て一の大なる積極黨を作らんことを。

旣に政友會なる積極黨あり、同じ積極主義を以て增稅に贊成し、膨大なる豫算に協贊したりし大同俱樂部なるもの何ぞ存立の理由ある可けんや、然り、彼等は或る私情よりして政友會に對抗すといふの外殆んど存立の理由あらざる也、然かも是れ公黨として存立すべき理由とは爲すに足らず。

（三）

政友會出身の閣臣等が、其の去るべき時に去らず、增稅の惡名を甘んじ、四面包圍の間に立つて尙ほ隱忍して以て今に至れるは他なし、其の政府者たる手を以て總選擧を行はんがためのみ、之に由て以て衆議院に絕對の多數を制せんが爲めのみ。

然れども總選擧の結果は如何ぞや、政友會の議員通じて百八十九人（或は百八十七人ともいふ）のみ、

未だ過半數を制するには至らず。

素より無所屬議員の内、政友會に投すべきもの十數人は之あらん、殊に政府が極力之を誘引せば、竟に二百餘人の過半數を占めんと易々たるべし。然れども思へ、此の多數者は果して永く堅實なる一致を保ち得るや否や、政友會の策士等は、前内閣派(若くは其の他のもの)が强襲を以て無理に内閣を乘取らば、此の衆議院の過半數を提げて其の敵たるべきを暗示して、以て彼等を威嚇せんとを期するなるべし然れども内閣を取れるもの更らに一種の高手を政友會に加へば、少くも其の三分の一は政友會のものならじ、即ち今の政友會なるもの竟に百四十人内外の少數となるべき也。

勿論百四十人の一黨となるも、尙ほ衆議院の最大黨として多く爲すあるに足る、然れども之を以て意の如く天下を取り得るとは斷言す可らず。

思へ、政友會をして永く逆境に立つと、猶ほ進歩黨の如くならしめば、果して現在の進歩黨と同一の員數と勢力とを有し得べきや否や、自由黨以來山縣公と結托し、伊藤公の衣囊に投じ、桂侯と提携し、引續き西園寺内閣の組織に出て、多年政權と結合し、始終順風に帆を擧げ得たるがために、即ち今の如き大多數を有するに至りしのみ、進歩黨の如く二十年來雪に惱まされ嵐に撲たれなば、彼れや到底堅忍して其の存立を確保し難からん、自由黨以來主公を替ゆると幾回、其の中心點が林有造氏、星亨氏、松田正久氏、原敬氏の間に轉輾したりしに看よ、自由黨の創設者たりし林氏去り、星氏斃れて、今や官海より出でたる一吏僚の原氏に左右せらるゝを看よ、斯の如き性質の政友會にして多年逆境に立たば、如

何ぞ進歩黨たらんと欲するも得べけんや、吾人は常に此の事情を懷ふ毎に、轉た進歩黨の堅實忍耐に多くの同情を拂ふと共に、また政友會の前途に危惧なき能はざる也。

少くも聰明にして前途の打算に長ずる原氏は、此の間の消息を察するに人後に落ちざるべし、寧ろ如かんや、彼の前内閣派なるものと握手し、大同倶樂部を擧げて政友會に合同せしめ、以て一の積極黨を製作するには、是れ豈政界の分野を明白ならしめ、政黨の進退を正大ならしむる所以にあらざらんや。

但し握手を求むるものは、今失意の前内閣派、少數黨たる大同派よりせずして、得意の頂上に立つ現内閣と政友會とよりすべし、是れ禮なり、而して又義なり。

（四）

政友會と大同倶樂部と結合して、積極黨とならば、進歩黨はまた猶興會（革新派を含む）と結合して消極黨と爲るべし、而して無所屬中の實業派は、中間黨となつて此の兩黨を或は打ち或は助けて、以て中正を支持すべし、吾人は斯く勸告す。

大同倶樂部の人々動もすれば、中正黨たらんとし、常に口に政界三分説を唱ふ、然れども其の主張政友會と差違なきに於て、到底中間黨たる資格あらず、中間黨の任は寧ろ實業派に一任するを可とす。

吾人は素より小黨分立の世界の大勢なることを知らざるにあらず、然かも是れ主義政見に由て漸く分るゝのみ、其の主張政見の差違なく、單に成立の歴史と感情のみにて分立するが如きは理に於て甚だ好ましからず、況んや其の歴史より視るも、政友會の幹部には大同派の前身者あり、大同派の幹部にも亦前

政友會員多きをや。

進歩黨は屢々其の說を變更したりき、動もすれば時勢に順應せざる議論を唱へたるとも多かりき、然るも其の歷史及び主張に於て、明白なる消極主義者たるとは爭ふ可らず、吾人の見を以てすれば、我が政治は當分の間積極消極、換言すれば國權擴張、內治整理の兩主張の爭ひなるべし、吾人は今輕々しく兩主張の可否を斷言せざるも、國民の胸臆中には、確かに此の兩主張を包藏す、政黨眞に國民の意思を代表すると共に、兼て國民を指導するものとせば、此の兩主張に由て正々堂々相爭ふべきのみ、所謂立憲政治の本色なるもの茲に存せずや。

（五）

熟々今の政局を看るに、現內閣は明治四十二年度の豫算編成に於て至大の困難を感ずべし、否、七千萬圓の公債を募集するの殆んど不可能なるに於て、四十一年度の豫算を實行するにも、尙ほ至大なる困難を感ずべし。

此の困難あるがために、閣外の元老屢々容喙を試み、天下また往々にして內閣の存立を危惧するものあるにあらずや。

吾人は素より神にあらず、又豫言者にあらず、隨つて內閣の運命を斷言する勇氣を有せずと雖も、假に政黨の分野をして現在のまゝならしめて、而して西園寺侯の內閣倒れたりとせよ、之に代るべきものは、桂侯たると山本伯たると寺內子たるとを問はず、兎も角大同派を旗本とし、進歩黨を外樣とするも

のならざる可らず、然かも此の兩派のみにては未だ多數を制するに足らざるが故に、更らに政友會の一角を崩壞して、少くも其の三分の一を羅致せざる可らず、然れども思へ、斯くするも尚ほ過半數を占むる難きにあらずや、幸ひに一時過半數を占め得るも、本來積極黨たる大同派と、消極主義なる進歩黨と連合せしむるの非化學的、非自然的なるがために、內常に紛擾を絕たず、內閣をして始終精力の大半を政黨操縱に消耗せしめざるを得ざるべし、夫れ政黨操縱に精力の過半を費すの不利にして且つ痛苦なるは前數代の執權者が既に飽喫したりし經驗ならずや、而して是れ國家の利に非ず、殊に戰後經營の大事業を遂行して國家重大の任務を盡すに利ならざるに於て、斷じて之を避くべきと、至誠國のために計るもの丶任ならずや。

寧ろ如かんや、吾人主張の如く、一大積極黨を作り、所謂前內閣派と現內閣と一致して、其の智勇辯力を擧げて以て國家のため大に積極的施設に出て、前途幾多の難局を解決せんには、重要の爭ひのために、無意味なる內閣更迭を行ふが如きは、決して淳良なる國民の希はざる所也。

若し夫れ積極主義の大施設にして、國民多數の意向と背馳せんか、宜しく消極主義者を局に立たしめて以て其の經綸を行はしむべし、玆に至て我が立憲代議政治は、略々今の政黨々人等の理想とする所に副ふべし、是れ以上は今の政事家及び黨人の領會し得べき問題にあらずや、古今を究め東西に通じて遠く大勢を達觀する哲人のとのみ、再び政友會大同派併合論を掲げて以て天下に問ふ。

首都の總選擧

（一）

東京市は帝國の首都なり、人材の淵叢なり、智勇辯力の悉く集中する所なり、市民の政治思想に饒かにして、政治界の情僞を識るに聰明なる言を俟たず、素より絶對に然りといふにあらざるも、市民の呼んで田舍者と爲す地方人に比較して然るや論なかるべし、隨つて今回の總選擧に於ても市民は其の代表者を定むるに取捨選定を謬まらざりしなるべし、少くも一般の模範として視るの價値は十分に之れあらん、果して然らば吾人が玆に觀察を試みて一二の評言を下すもまた必らずしも無要ならざらん。

（二）

地方に由りては黨派の分界極めて明白にして、各町村のもの恰かも國民たる戶籍の外更に黨員たる戶籍をも有するが如きあり、其の黨派の主義政見の適否も、其の黨の政治上の功過も、到底其の地方に於ける勢力を消長するに足らず、少しく具體的にいへば、其の黨派が非增税論なるも、增税主義なるも、全國に於て人望を失ふも失はざるも、其の地方に於ける勢力は寸毫も影響を受けず、黨員名簿と稱する一種の戶籍簿に登錄せられたる丈けの黨員數と有權者數とは、依然として之を所有す、例せば熊本の大同派に於ける、鹿兒島の政友派に於ける、將た福岡、佐賀、大分、香川、福井、新潟、秋田、巖手に於ける政友進步兩派の如き是れ也

東京市には素より斯の如きものなし、市に寄留する地方人にして黨員名簿に錄せらるゝものは少しく之あらん、市民として、殊に有權者として、籍を政黨々派に置き、然も忠實に其の黨事に盡す者の如きは、幾んど絶無なるべし、否、寥々として晨星の如きのみ、故に市民の代表者に投票するや、黨派に累せらるゝが如きとは寸分も之あらず、自由に其の好む所欲する所の人に投票し得、是れ市に於て殊に地方と異なる所とす。

果して然らば、東京市民は自由に其の欲する代表者を選定し得たりしや否や、然り、自由に投票したり、他に强ひられ、自個の意思を枉げて投票したりしものゝ如きは、所謂『弱いもの商賣』の吉原遊廓を除きて幾んど全く之れなかるべき也。

然れども市民の自由投票なるもの、嚴正なる意味に於て政治上の聰明なる投票にはあらず、或る點よりいへば頗ぶる稱揚すべきものあるも、亦大に嗤ふべき點なきにも非ず。

（三）

大體より之をいへば、東京市民は非增税派なりと看做されざるに非ず、江間俊一、稲茂登三郎の兩氏が公然增税黨たりし政友會を脫して然る後候補者となり、靑木庄太郎氏が政友會員たる態度を極めて曖昧ならしめたるは其の一證也、高木益太郎、中野武營、三輪信次郎、藏原惟廓、關直彦の四氏が始めより非增税を呼號して、多數の投票を吸集したるは其の二證也、非增税を標榜せる高木、藏原、中野、江間、稲茂、三輪、關の七氏が收め得たりし投票數は、實に一萬五千七百七百一票にして、落選したる大

石熊吉氏の得票を合すれば一萬六千六百三十二票となるに反して、公然增稅黨として當選せる鳩山和夫渡邊勘十郎兩氏の得票は、僅かに三千四百九十票に過ぎず、非增稅派の高木氏一人の得票にすら及ばざる也、之に落選したる磯部四郞、高梨哲四郞兩氏の得票を加算するも、尙ほ五千四百十六票のみ、更に增稅に贊成したりし山根正次氏の得票を加ふるも、六千九百九票に過ぎず、若し夫れ松下軍治氏に至ては片言隻句たりとも增稅を口にせず寧ろ非增稅の如き態度を示したりき、落選したる栫山氏また然りとす、增稅論が市民に氣受け宜からざりしと蔽ふ可らざる也。

然れども有體にいへば、東京市民は今回の增稅を非とするが如き狹量者にはあらず、實は重もなる實業家の主張するが如く政府の財政計畫を非とするのみ、財政上の施設其の宜きに適せざるがため、今の如き不景氣を現出したりとして之を非とするのみ、此の點よりして今の內閣は頗ぶる市民の信用を減じたりしと蔽ふ可らず、政府の財政調節を非とするもの十一人中の九人(山根氏と雖も然り)にして、之を可とするものは僅かに鳩山、渡邊の兩氏のみなるにあらずや、此の事實は政府及び一般國民の宜しく牢記すべき所のもの也。

(四)

別に候補者の側より視るに、其の競ふて執れる唯一の方法は叩頭主義なり、叩頭主義とは讀んで字の如く、有權者の前に首を垂れ頭を叩きて、只管己れに投票せんことを懇願し哀請するを謂ふ。

但し叩頭主義にも幾様の別あり、政見發表の演說會と唱へて、他の辯士論客を雇ひ來りて己れを褒め

立てしめ、己れは幾分の說を演ぶるも、主として有權者の歡心を收むるがため、與行師然として幻燈を會衆の覺に供するあり、又盛んに自家の貧なるを吹聽し、傳家の刀と珍藏の書とを估却して辛ふじて競爭を開始したりといひ、熱涙を揮つて投票を求むるあり、是れ叩頭主義の聊か別樣の外皮を裝へるのみ、或は歡を買ひ、或は憐みを求めて以て叩頭するや一のみ、また自己の地位に顧みて之を爲す能はず、又爲すを潔しとせずして、別に多くの黃金を散布し夫妻手を盡して有權者を歷訪し、手土產と唱へて物品を贈り、以て有權者に媚ぶるあり。

更らに義人然として多數不幸者のため大に力を盡すと稱し、懸命に之がため骨折るあり、或は癈疾の男女を使役して、識る所の有權者を訪ひ、哀請に次ぐに流涕を以てして、以て投票を求むるあり、自身に有權者の家を歷訪して、其の主人公に懇願するに止まらず、腰を卑くし辭を低ふして其の妻妾子女に媚ぶるもあり、前者は稍々巧妙なる叩頭主義にして、後者は最も露骨なる叩頭主義なり。

總ての候補者は皆叩頭主義の競爭を爲せり。此の主義を以て互ひに投票の多きを爭ひ、また自黨自派のものゝ當落を顧念する遑あらず、若し聊かにても叩頭主義を振廻さゞるものありとせば、幵は恐らくは中野武營氏一人ならん、然かも中野氏又は其の運動員も全然叩頭主義を廢したりしにはあらず。

（五）

此の叩頭主義のために動く東京市民の義氣は、吾人之を明白に看取せざる能はず、世人意料の外に出でたりし藏原氏の大多數を得たると、松下氏の當選とは、殊に著明なる一證也。

藏原氏の人格は吾人姑らく直言することを避くべし、此の人誠に赤貧にして競爭し得ずんば、何ぞ候補者たるを斷念せざるや、泣て自から窮乏を訴ふるが如きは、寧ろ饒舌なる痴女の態なり、然るも義に勇みて、殊に俠者の名を博するを好む市民の或るものは、深く人間の眞人格を究むる能はず、僅かに新聞紙に義俠者と稱せらるゝを悦びて、相競ふて藏原氏に投票を集中し、爲めに意外なる落選者（大石熊吉氏の如き）を出すに至れる也。

松下氏落選すべしとは、其の背後の前内閣者と雖も之を確言したりしと聞く、市内の新聞紙は殆んど萬口一齊の狀態を以て其の落選を豫報し、警視廳また始終然か報告したりき、思ふに今の警察は從來の方針を一轉して、政治の偵察に重きを置かざるが故に、其の報告の杜選なりしと勿論ならんも、新聞記者等之を察せず、此の報告を基礎として皮相の觀測を加味せるが故に、開票の後却つて番狂せなる名目の下に自家の違算を蔽へるのみ、抑も此の人の意外にも當選せしは、彼の宮城屋銀行問題を提げて起ちしが故のみ、吾人の聞く所によれば、同銀行の預金は二百二十餘萬圓にして、預金者の總數二萬を超ゆ、其の十圓以下の過半を拂戾したるも、尙ほ預金は二百萬圓、預金者は一萬人を下らず、而して預金者又は預金者の家族にして有權者たるもの實に三百人に餘るといふ、果して然らば此の問題が實際社會上人道上放置す可らざるものにして、現に澁澤榮一氏すら起て整理の任に當らんことを聲言せし程なるに於て、之に懸命の盡力を爲すの意氣を明示したる松下氏は、一種の俠者として頗ぶる東京市民の感興を惹けるは勿論、預金者中の有權者が、進んで氏の當選を助くべきこと必然のみ、平生此の種の問題を捉へて

以て一代の人氣を博せんとする萬朝報、二六新聞の如き、何ぞ始終緘默を守りて之を松下氏の獨占と爲し、竟に竪子をして名を成さしむるの迂に出てたるや、否、各新聞紙は何故に彼の勢力を觀測する時、此の重要なる問題を閑却したりしぞ。

遮莫、此の二個の事實も、また東京市民が義俠を好むの傾向著るしき明證と爲すべし、後の選擧に志あるもの以て敎訓と做すべき也。



旅店國となる勿れ

鎌田榮吉

遊覽外人の爲めに諸般の設備を整頓せねばならぬ、國費を以て旅館を建てよとか何とか云ふ説は隨分盛に聞へますが、それは成程外國人が澤山にやつて來るのは宜い、又ホテルのみならず總て旅行者の爲めに設備の整ふと云ふことは至極結構なることである、吾々も成るべく外國人の內地に入るとは喜ぶのであります、且凡て內地の名所古蹟其他景勝の地は勉めて保存するのみならず、益々改良して行きたいと思つて居る、併しながらそれを目的にすることは甚だ嫌である、日本を外國人の遊覽地にしてそれを以て國を立てゝ行かふなどゝ云ふことは以ての外の事である、殊に政府が宿屋の亭主になつて客引商賣を國是とするやうなことに至つては大反對である。

第一國民の氣風を惡くするは確である、今外國で之を言ひますと云ふと、伊太利の如きは全くそれを以て國の重なる商賣にして居る、佛蘭西の巴里を始めとしてさうなつて居る、所がさう云ふ土地の人民の氣風に至つては實に驚くべき者であつて、甚だ見るに忍びない、と云ふのは偏に漫遊客を喜ばせて、財布をはたかせやうと云ふばかりに心を用ゐて居る者である、即ち巴里の如きは見世物とか寄席とか、或はカッフィー店とか云ふやうなものは言語同斷の醜猥な事までもやつて客を惹く、又如何にも甚しい猥褻な繪とか又寫眞とか、或は小説のやうなものを販賣する、伊太利も無論甚しいのであつて、猥褻な繪書や寫眞を神聖な御寺の入口

賣つて居ると云ふやうなことは幾らもある、それと同時に國民の氣風が下品になつて、只外國人から錢を取る、縱令卑劣な商賣でも、兎に角商賣をして金を取るのはまだしもであるが、甚だしい事には唯金を貰ふと云ふ乞食根性が盛んである、ナープル邊では旅客の後ろは澤山の乞丐でない只の人民が澤山尾いて來て、さうしてマカロニーを呉れ、マカロニーを呉れと云ふ、マカロニーとは饂飩である、饂飩は伊太利人の常食物であるから丁度日本人の飯を呉れと云ふのと同じとである、段々歩けば歩く程澤山附隨いて來るのである、さうして何の仕事もせずにそれを職業として居る、まだそれ等は下等の人民であるが隨分上等らしい人間でも外國人と見ると、唯手を出して錢を貰はうとするやうなことが往々ある、現に私が羅馬の或寺院に行つて、寺を見物して居ると、黒い服を着て奇麗にして居る所の老婆が佛壇の前に神妙に祈を上げて居る、其側へ行つて見ると、老婆は直ぐに手を出して錢を呉れと云ふ、驚いたけれども是はモウ珍しくない話で、男子でも立派なシルクハットを冠り、フロックコートを着て居る人が、人通りのないやうな横道などで外國人でも見ると錢を呉れとねだる、先づそれを以ても一般を推測することが出來る、それから商店では旅客と見ると勝手次第な懸値を云ふ、實際買つた物は後で見ると直ぐに剝げたり壞れたりするやうな物が多い、其上荷造りが粗末で途中で破損を生ずる。懸値は旅客には勿論常住して居る人にでも一割位はある、是は上等の國には少ないことである、少しも自分の見識と云ふことはなくて、如何なる卑屈なる事でも、錢の爲には外國人の喜ぶことをして甘んじて居る、現に羅馬に昔のコロジウムと云ふ劇場の壞れがありますが、一哩以上の長さがあると云ふやうな建物の壞れ、それは先づ古代の遺物として大切にしてある、其中では如何なる遊び事も許されないのであります、然るに英國の大富豪たるチボジヤ公爵夫人がコロジウムに於て、月夜の晩に大勢の人を招いて夜會を催したと云ふ事がある、こんな傍若無人の振舞をされても懸値を云ふて高く賣れば宜い、これ

は畢竟旅客の遊覧所となると、どうしてもさう云ふ風になることは、到底免かれぬことであつて、實業の方面に向つて勉强はせずにアブク錢を儲けやうと云ふことになつて來る。日本でもです、先づ京都の如き奈良の如き其他海水浴場、温泉場、神社佛閣の參詣地の如きは客を歡迎するには上手になつて居るが、併し其輕薄なる事に至つては實に驚く、又貰ふ事ならば、何んの理由のない金でも呉れさへすれば取る、是は旅館とかお茶屋とかいふものは普通の事でありませうが、極く確實なる高尙な商賣をする家でも矢張り最う旅館や茶屋と同じやうな心持になつて、自分の座敷を貸すとか蒲團や蚊帳を貸して仕舞ふ、殊に甚しいものは坐敷を貸し夜具を貸し蚊帳を貸して而して自分は汚い土藏の中に蚊帳も吊らずに寢て、一ヶ月か二ヶ月の間に法外の金を客から取らふと云ふやうなことをして居るものがある、成程、自分の物を他人に貸して、自分は不自由な思をしても金になれば宜い、それは自分の勝手な樣なものですが、併しながら人として是は如何にも不見識な話である大體金錢は自己の快樂に生活し得る爲に必要なものである。然るに其れ迄も犧牲にするに至つては自家の妻子までも客の翫弄物にすると五十歩百歩の違ひである、全國滔々として此の風を爲すに至つては實に容易ならぬ事であります、諺にも伊勢乞食と云ひますが、畢竟するに昔から伊勢に參宮の客を相手に商賣するといふ事からして、土地の人氣が益々浮薄に流れ墮落の淵に沈んで居るのを評したのであらふ、即ち此日本を擧げて日本乞食たらしめやうと云ふは驚き入つた次第である此客引の爲めに落す金などは如何に多くとも決して眞の國富を增すものではない、矢張一種の重金的誤謬論に外ならぬ。

伊太利の如きは亞米利加の旅客が年々落す金が二億フラン以上に登つて居ると云ふことでありますが、其金の爲めに國が富むかといふと決して富みはしない、矢張り金の落ちる伊太利は益々貧乏にして、落す方の亞米利加人や英吉利人は益々富むと言ふ樣な譯になつて居る、さうして見れば遊覽場にして他人の金を取つ

て儲けるよりも遊觀場に行つて此方が使ふといふ人間にならなければならぬ。

伊太利が此節になつて大分其國の富を增して良くなつて來たと云ふは、決して遊覽場としての繁昌から起つたのではないので、近來起つた水力電氣の爲めてある、伊太利の土地柄上水力を使ふといふことが大變盛になり種々の電氣事業が起つた爲め、近來國の貧窮が餘程恢復の形勢になつて來たのてある、而してこれは名所古蹟の多くて氣候の溫暖な天水の如しと言はれて居る南部伊太利てはなくて、アルプス山麓の北部伊太利てあります、先づ此地方の河水から得らるべき電氣の計算は、二百五十萬馬力から五百萬馬力まてはあるといふ即ち石炭の價格に換算すれば二億五千圓から五億萬圓に相當すると云ふ、今現に各所に水力電氣の供給を得て諸種の工業に利用し又交通機關に應用しつゝあることは人の知る所だが、之が爲め伊太利も追々世界の市場に乘り出して有力な競爭者となりつゝある、其品物は紡績、織布、電氣機械、モートルインヂン、ボイラー、藥品、家具類てある、丁度伊國の河川は英國の石炭と匹敵する大活動を爲す見込があると云ふ。其上伊太利は職工は器用てあるし灣は良港て、航海は上手てある上に、スエズ運河には近く、南亞米利加に居る同國人を顧客とする見込があるから將來餘程有望てあると言はれて居る、此上は政府が租稅を引下げ外資を吸收し鐵道運賃を下げて改良を加ふる必要があるのみだと申す事てす、して見ると永い間國を遊覽所としたが爲めに衰微こそすれ人民が腐敗こそすれ、之が爲めに富む事はなかつたが、水力を實業に使用する道が開けてから外資も追々吸收されつゝ富力が大に進み將來頗る有望になつて來た、殊に之が遊覽すべき古蹟と風光に乏しい北部から起つて來たとして見れば論者の說の謬つて居る事は明かてはないか。

日本にした處が、外國人が金を持つて遊びに來るとしても、其外國人の使用するものは何てあるかと云ふと大抵輸入品てある、外國の品物を此方の場所を貸して消費させる丈けの話て、それが爲めに幾らかの利益

がありませう、只土産物位は賣れませうが、決して國の富力を生ずる譯には行かぬ、國に多くの外國人の入るは喜ぶべき事であるが、其入るのは遊覽の爲でなくて眞のビジネスの爲め、商賣の爲めに入るのでなくてはならぬ、そして又此方も商賣の爲めに澤山外國に出ると云ふ事になりたいものである、如何にも内外の往來の頻繁になることは非常に喜ぶべきことであるが、其頻繁たる事や全く實業の繁昌の爲めに頻繁になつたといふことになつて貰いたい、さうして之れと同時に外國人の我國に遊びに來るもあり、又此方からも外國に遊びに行くと云ふ事も無論なければならぬ、さういふ風にしてさうなるは宜いが、併し私は決して伊太利の如く巴里やニイスの如く外國人に別莊を貸し、或は外國人を泊めるホテルや、土産品を以て國を繁昌させやうと云ふことは喜ばない、又それでは決して本當に繁昌するものでない、唯個人に就いて言へば、それは外國の宿をしたが爲めに、又案内をしたが爲に儲けると云ふ人もありませうが、眞の實業を營んで富を爲すは啻に其人が儲けるのみならず、國が富むのでありますからして、どうか其方の保護に向はなければならぬ、斯くの如く實際に國の富源を涵養せずして、人心を墮落せしめ、社會の風儀を壞亂させると云ふ樣な客引商賣の國にしてしまうは私は大不贊成である、殊に國の經費を以て全國のホテルを經營すると云ふに至つては愚論と言はなければならぬ。

藝術の眞

田中喜一

近來我國の文壇に於て自然主義の盛に唱導せらるゝに從ひ、文藝の最後の目的は、人生及び經驗に含まるゝ眞を發揮するにありといふ見解、頗る勢力あるものゝ如し。現に自然主義の主張によれば、過去のクラシズム或はローマンチシズムに對して、自然主義の異なるところを求むれば、クラシズム或はローマンチシズ

ムが、人生及び經驗に含まるゝ美を完成するを目的とし居るに對し、自然主義は人生及び經驗に含まるゝ眞を發揮するにありといひ居れり。去れど予の考ふるところによれば、假令在來の在り觸れたる文明史家、及び藝術批評家が何といふとも、眞を人生及び經驗の中に發揮するといふ事は、凡ての時代凡ての文明の中に現れたる文藝の有し居る、又有せざるべからざる唯一の目的なりしなり。されば自然主義が人生及び經驗に含まるゝ眞を發揮するを目的とすといひて、それを最近に於て自然主義が始めて發見したる新しき標準の如くにいふは、自然主義者の無學と無識とを表白するものといはざるべからず。

勿論從來の文明史家及び藝術批評家が、藝術の目的は人生及び經驗に含まるゝ美を完成するにありといひしは事實なり。されど、此等の人々は全く藝術なるものを以て人生を批判し、統一し、理想化する多くの方便の一と見ずして、多くは人生より孤立して完結せる意味を有するものと見たる、極めて淺薄にして不合理なる見解の擒となり居れる結果なり。勿論クラシズム及びローマンチシズムが藝術の一の樣式たる以上、美を完成するといふことは固よりその職分たるに相違なきも、されど今日一部の藝術家によつて唱導せらるゝ自然主義も亦藝術たる以上は、人生及び經驗に含まるゝ美の完成を以て、その職分とせざるべからざることは、今更予が此處に力說する迄もなきことなり。

啻に自然主義のみならず、今後社會の活動と理想との變遷に從ひ、如何なる藝術の樣式が現はるゝかは、何人も今より容易に逆睹すること能はざれど、如何なる樣式の現るゝにせよ、それが藝術の繼續にして又發展なる限りは、人生及び經驗に含まるゝ美の完成を職分とするなるべく、又せざるべからざることは、予が茲に斷言し置くところなり。されど藝術に在つては、決して美を完成すといふことゝ、眞を發揮するといふことゝは、啻に相矛盾する二つの標準にあらざるのみならず、却つて互に相塡補する標準なりとす。世人が動もすれば美を完成するのみを勉めて、眞を發揮する

を全く忘れたりと考ふるところの、クラシズム或はローマンチシズムの如きも、それが起りし當時の社會狀態及び個人の活動に照し見る時は、慥に眞を發揮するといふをその目的の一とはなせしなり。

予が此處に採り居る解釋は、勿論過去の哲學や、美學や、文明史や、藝術評論に因て養はれし、學者、史家、及び評論家の未だ曾て言はざりしところなる故、只傳習的に他人の書きたる哲學や、美學や、文明史や、藝術評論やの媒介を通じて、獨り思考し、議論する如き人々は、予の所說を以て、全然事實に根底を有せざる架空のものと思はんも知れねど、予は多年心理的に、社會的に、乃至歷史的に、藝術の起源と發展と意義とを觀察し、考覈したる上にて、斯の如く說述するに至れるものなり。

世人が動もすれば、美を完成する爲に最も眞を閑却し、或は無視したりとまで見るところの、クラシズム及びローマンチシズムが、如何なる樣に眞を發揮するを勉めたるかは茲に細論する能はず。されど此等のものは皆その自己が養成せられたる社會に於て、それぞれ當時の生活を統一し、欲求を滿足したる道具たりしことは爭ふべからざる一大事實なり。已に然りとすればそれが當時の生活の狀態及び人間の欲求より見て、一面に於て眞を發揮し居らざるべからざりしを言ふのみにても、苟も多少眞正なる哲學と歷史との修養を積み、根本的に人生を觀察し、徹底的に人生を理解し得る程のものには、クラシズム及びローマンチシズムの目的も、一面眞を發揮するに在りきといふの意味は分り居らざるべからざる筈なり、勿論クラシズムの榮えたる希臘の生活、ローマンチシズムの行はれたる中世の理想は、今日吾人の棲息し居る二十世紀の生活及び理想とは大にその性質の異なるものある故、彼等の眞としたりしものは必ずしも吾人の眞にはあらず、亦吾人の眞とするところのものは、必ずしも彼等の眞とするところにあらざるは言ふまでもなけれど、さればとて旣に何時の藝術にも遍在し共通する目的を認めながら、偶ま今日の藝術の目的とする眞が、過去の藝術の

目的とする眞と異なるところあるが爲に、今日の藝術は眞を目的とするも過去の藝術は眞を目的とし居らずといふは、極めて淺薄なる意見とせざるべからず。されば予は飽くまで眞の發揮を藝術の目的とすることをば、今日に至つて自然主義者が獨り發明したる標準とすることに反對するものなり、既に藝術に在りては美の完成と眞の發揮とは全然相矛盾する二個の標準たらずして、互に相塡補する二重の標準なりと見る以上は、自然主義が眞を發揮するをその目的とすることは尠しも清新にして奇峭なる主張にあらずして、其實は腐爛にして平凡なる主張たるのみ。言はゞ眞を發揮することは、美を完成することゝ共にその樣式、方法こそ、時代文明の異なるに從ひ異なりたれ、古來藝術と名けられ得べき有らゆる藝術の、一として實踐し來らざるはあらず、今更事珍しく騷ぐ程のものならずと予は信ずるなり、されば自然主義者の主張にして唯此處に止まらんには、予は彼等が、哲學の思想と歷史の智識との一切を缺き、その學殖の極めて淺く、その見識の極めて低きを笑ふのみに止めんも、兎に角彼等は自然主義の主張としては、眞を發揮すといふ事に特別の意味を與へ居れり、此特別なる意味こそ此處に予の此一段の議論を惹起するに至りし要點なれ。

自然主義者の藝術の目的は眞を發揮するに在りと呼號するや彼等は如何なる意義をその眞なる一語に付するぞと吟味せんか、恰も科學者がそれに與ふる如き意味に過ぎざるのみ。畢竟するに彼等は人生を批判し、統一し、理想化する方便として、藝術と科學との間に性質上及び目的上大なる相違あるを悟らず、科學の眞は直に之を移して藝術の眞となすを得と誤解するものなり。斯かる淺薄にして狹隘なる標準による上は、クラシズム及びローマンチシズムの立する標準が、眞を發揮するにあらずと論ずること極めて至當の事なり。斯樣の標準を以て藝術の目的は眞を發揮するにありと誤解し居る間は、凡ての眞成なる藝術は、即ち藝術として人生に於けるその職分を充たし居る藝術は、彼等によつて皆眞を發揮し居らずと見らるべきは分明な

り。何となればクラシズムにせよ、ローマンチシズムにせよ藝術らしき藝術は盡く彼等の意味する眞の發揮といふよりも、更に以外の事をなし、更に又以上の事をなし居ればなり。

科學の目的とし居るといふ眞にせよ、哲學的に即ち徹底的にその事實を點檢する時は、科學者が發見し又想像するよりも、一層深き且つ廣き意味を含蓄するものなれど、科學者は彼等の平生用ふる方法と彼等の企て居る目的とに含まるゝ十分の意味を知らざるに拘らず、彼等は幸ひにして、直接には系統的に發展し來れる方法と、間接には有機的に交渉する社會とによりて支配せらるゝ故、彼等は頗る器械的に、又分子的にその從事し居る活動を觀察し、理解し居るとはいへ、實際吾人が思料するほど大なる誤謬には陷らざるなり。されど科學者とても、彼等が通常發見するよりも、一層有機的の性質をその方法に發見し、一層理想的の要素をその目的に發見する方、科學者としても一層大なる効果を來たすの道なりとす。現に他人の光彩ある事業を傳習的に記誦し、沒批判的に繼承する平凡なる科學者は措く、苟も科學の歷史に於て大膽なる假定を立て、或は偉大なる發見をなし、優に一新時期を劃せし程の大家に在つては、知らず々々自家の方法に一層有機的なる性質を發見し、自家の目的に一層理想的なる要素を發見したりしなり。近頃に於ては英國のチンダル、クリツフォード、及びハックスレー、獨逸のジユーボーアレモン、ヘルムホルツ、ロスタンスキー等は之なり。

既に科學にして概括の範圍を擴め、反省の程度を增すに從ひて、その方法に一層有機的性質の認められ、その目的に一層理想的性質の發見せらるゝならば、換言すれば、一層藝術の方法と目的とに接近し來るものならば、本來その方法に於て科學よりも一層有機的にして、その目的に於ては科學よりも一層理想的ならざるべからざる藝術が、科學に取りても、甚だ不滿足にして又不合理なる目的を踏襲せんとすること、斯ばかり事理を顛倒したることの世にあるべしとは信ぜられ

ず。

科學と道德と藝術とは、共に相塡補して、人生を支持し、發展する道具にはあれど、此等三者の特質を仔細に吟味するに、その前後の關係に從つて多少の相違を見出すを得、予は曾て此三ヶの活動を說いて次の如くに述べたることありき。

　生活を持續して滿足を獲得するといふ事は、單一なる目的ではあるが、その經過は自ら三つの段階をつくつて居ります、目的より看れば始めより終りに至るまで、絕えず周圍を同化して步一步に之を自家の欲求と理想とを達する方便とする一途のほかに出ないのでありますが、經過より見れば第一の段階に方りては、周圍の排列を整齊して居るのであつて、私は之を點化と呼ぶのであります、第二の段階に至りては周圍の配合を改造して居るのであつて、私は之を靈化と呼ぶのであります、第三の段階に至りては、更に進んで周圍の組織を精錬して居るのであつて、私は之を醇化と呼ぶのであります、初の事業は認識の制御するところのものであつて、その系統は科學となつて居ります、中ごろの事業は實行の管領するところのものであつて、その系統は道德となつて居ります、終りの事業は審美の司裁するところのものであつて、その系統は藝術となつて居ります。

と之なり、

此處には道德の司る事業は暫く置き、科學の司る事業と藝術の司る事業とを比較するに、周圍を同化して自己の欲求と理想とを實現する方便とする點は同じきも、藝術は科學より後に起り、科學の着手したるものをば更に洗練すといふ一點のみにても、科學とは自らその方法と目的とを異にせざるべからざる理なり、然らば藝術と科學とはその方法と目的とに於て如何に異なるかといふに、科學に於て觀察が比較的に素朴的なるに反して、藝術に於ては比較的に反省的なり科學に於ては描寫が比較的に沒意的なるに反して、藝術に於ては比較的に選擇的なりといふを得。約言すれば科學

も藝術も理想によりて始められ、理想によりて動かさるるもの、唯科學にあつては此理想が事實を整頓しながら事實の一部となりて潛み居るに對し、藝術にあつては事實を整頓しながら事實より離れて勢力となりて現れ來るの差あるなり。されど自然主義者は理想といふが如き語を蛇蝎の如くに嫌ふものなり、事實の眞を發揮するに理想の如きものは些の必要なしと絶叫する論者なり。此の如きは全く眞なるものが如何にして成立するかを知らざる、無識の致せる結果なる故、予は茲に少しく眞の成立並に眞相を彼等に對して講述するの要ありとするなり。

眞を發見し或は構成するは通常認識と呼ばるゝ作用なるを以て眞に關する正當なる見解を得んとするには先づ認識に就ての正當なる見解を有せざるべからず。而して予は眞に對する誤解の多くの認識に對する誤解より來り居るを信ずるもの故、此處に先づ眞の性質を講ずるに先つて、認識の性質の一般を語り置くの要を見るなり。言ふ迄もなく認識の起源、性質、作用及び制限を如何に理解すべきぞといふことは、現時の哲學研究に於ては尤も興味あり、又尤も効果ある問題にして、哲學革新の學は常に此問題を中軸として回轉すといふも可なる程なれば、これに關する予の意見を十分讀者の胸に訴へんには、多くの言語の要せらるゝは勿論なれど、予は茲に敢て認識論又は經驗論を講ずるに非るが故、唯藝術上の眞の意義を明晰ならしむるに必要なる範圍に於て、認識の性質をば、極めて簡單に唯暗示する位の程度に說き置かんと欲す。

認識の性質に關して今日世に行はれ居る說をば大要二つの種類に分つを得、その一は認識を靜的に見る方にて、その他の一は認識を動的に見る方なり、認識を靜的に見る方は、動もすれば認識をそれ自身にて完結し、生活の他の部分とは交涉することなくとも意味あるものと見るものにて、その結果は自然に形式的となり、器械的となる。之に反して認識を動的のものと見る方は、飽くまで認識を生活全體の機關として、其處に始めて意味ありと見るもの故、此見方は常に有機的

にして且つ作用的なり。勿論予は予の平生奉ずる哲學體系より、此等二つの見解中に於てはその後者を取るものなり。

予の意見を以てすれば認識は、人間の生活の特質より來る、即ちそれが生存を繼續するに從つて、自然に內に矛盾を生ず。舊習慣と新理想、乃至舊方針と新要求といふが如く、その儘にては矛盾するところの二つの要素生ず。認識なるものは此の如く人間の生活がその固有の性質を以て進行する時に、必然回期的に生じ來る此兩要素の矛盾を調和する爲に、兩要素中より自然に發現する調和的意義、又は協同的勢力なり。されば認識はその根底に於ては常に志向（Intent）なり、爾く認識を志向と見ることは、凡て認識を媒介として生ずる一切の經驗、一切の活動、一切の事物を理解する秘訣なり。吾人の生活は過去に於て如何程努力を用ひ、當時の必要に應ずるやうに、その時の習慣をその時の理想によりて改造したるものにても、生活の方法と境遇の狀態との變化に從ひ、自然にその生活には改造の必要を生ず、此處に於て、新境遇より來る要求と舊習慣に含まるゝ形式との間に矛盾を生じて生活に分裂を來す。此分裂を調和するところのものは、生活の繼續と發展とを圖らん爲に、表面上には調和すべからざる習慣理想の新舊二要素の下に、自ら發見せらるべき深く潛める一致の根底それのみ。而して此一致の根底を發見するは、決して靜的、器械的、形式的の認識にあらずして、動的、作用的、有機的の認識なり。換言すれば生活の繼續と發展とを求むる意志の機關たる認識之なり。認識にして既に斯るものなる以上は、認識の活くところ、常にそれが斷定の形を取るといふは極めて自然の事なり。

斷定なるものは主位と賓位との分解にして、又同時にその調和なり。斷定は主位と賓位との調和を圖らんが爲に、その分裂を認むる處のものなり。而して言ふまでもなく斷定に於ける主位と賓位とは、生活に於ける舊習慣と新理想とを代表し居るものなり。而して如何にして一たび分裂したる新舊兩要素が二たび調和せ

らる丶かといふに、舊要素は新要素の方便となると同時に、新要素は舊要素の特質樣式を承くるによりて得らる丶ものなり。これは孰れも變化の中に一致を立し、多の中に一を求むる努力によりて實現せらる丶ものにして、決して形式的なる同一性を求むることによりて得らる丶ものにあらず。言ふ迄もなく靜的に生活の進行を見れば、唯時々刻々に移り行く變化のみなる故、其處に最小なるものと雖も一致の要素の發見せられん樣なし。變化を通觀して一致を發見し、若くは構造すといふことは、全く認識なるものが、生活を繼續し、發展する機關としての思考なるが故のみ。認識は時々に分裂を生じ、予盾を釀す生活を、時々に調和し時々に改整し行く努力なり。

旣に認識にして上述の如きものなりとせば、認識によりて發見せられ、或は構造せらる丶眞なるものは、如何に理解せられざるべからざるか。

眞の性質に關しても、世には大體三種の見解行はる、その第一は、眞は事物と觀念とが一致する時に發見せらるといふ說にして、例せば此處に繩なる事實ありとせよ、之に蛇なる觀念を付して、繩を蛇と誤認せば誤なるも、繩なる觀念を付して直に繩と呼ばゞ眞なりといふもの之なり、之は常識の人によりて最も廣く信ぜらる丶思想なるも、少しく批判的に考へんには直に破綻を示す思想なり。如何なる場合にも、吾人は觀念と事物とを兩立せしめて比較することは到底能ふところにあらず。故に前の引例の場合にても、一種の觀念と他種の觀念とを比較し居るに過ぎざるなり。究竟新しき知覺と過去に蓄積せられたる觀念の系統とを比較して、その關係によりて僞と眞とを判別するに過ぎざる事となるなり。されば歸する處、或る事實が繩なるか將た蛇なるかといふを判斷する唯一の標準は過去に蓄積せられたる觀念の系統に照して之を判斷する以外に道なかるべし。これその第二の見解なり、この第二の批判主義は、勿論第一の常識主義に比して、その立脚地の理屈に近きは明白なり。とはいへ、批判主義も觀念の系統の如何にして組織せられしかを、十分に考察

せざる結果、單に之を靈智的にのみ解釋し、更に進んて實行的に解釋せざる點に於て尙ほ一種の誤謬に陷るものといはざるべからず、斯くて別に第三の見解を生ず。

即ち予の奉ずる學說によれば、或る經驗又は認識が眞なるか將た僞なるかを批判すべき唯一の標準は、先づその孰れを採らば、一層能く生活が組織せられ發展せらるゝかと顧みるの一事に限らるゝなり。前述せる如く旣に認識なるものが、生活を統一し發展するを以て唯一の職分とし、さて人生に出現するものなる以上は眞僞判別の標準も、亦自ら生活を統一し發展するの優劣によりて定められざるべからず。故に若し人間に過去の經驗によりて、蓄積せられし、眞僞の標準たるべき觀念あらば、そは永き生活に亘りて、大體生活に害あるものは僞として斥けられ、生活に利あるもののみは眞として取られたる結果に成れるものとせざるべからず。即ち利益ある生活の方針中に系統を求め、關係を發見して、玆に觀念の系統即ち眞の宇宙なるものは生じたるなり。此の如く觀じ來れば、理論上より眞を定義して、『眞とは或る目的を達する爲に適當なる方便を發見し、又は創設する知的方針なり』とするも可なり。

故に理論的に言へば、特殊の興味又は特殊の目的に從ひて、特殊の眞は有り得べきなり、或る場合に於ける興味又は目的を達するものが、その場合の眞なりとすれば、場合の異なるに從ひて眞の性質の如何に異なるも差支なき筈なり。勿論人間の生活は有機的に存在し、組織的に發展するもの故、或る場合の興味と他の場合の興味と、乃至或る場合の目的と他の場合の目的との間に自ら系統の生ずると等しく、或る場合の眞と他の場合の眞との間にも自ら系統は成り居る故、少くも高等なる文明の下に生活する人間に在りては、或る場合の眞と他の場合の眞との間に多くの矛盾の見出さるゝが如きは望ましき生活にあらずして及ぶべき丈調和するものとなり居らざるべからざる筈のものなり、此理を誤解して或る興味又は目的によりて立てられ

たる眞は、それと非常に性質を異にする他の興味又は目的によりて立てられたる眞と、其の性質と其の作用とに於て全然同一ならざる可からずといふに至らば、そは生活の存在と發展とを甚しく沮礙する謬見となるなり。眞に對して斯かる謬見を抱くに至るは、要するに人生なる立脚地より、廣く且つ深く眞の意義を考察せざる爲なり、眞の性質は、決して右の如く形式的に器械的に定めらるべきものにはあらず。事實として今日人間の生活は、頗る組織せられ統一せられ來れりといふも、その機關たる宗敎や、科學や、哲學や、將た道德や藝術やの間に、未だ完結せる系統の組織せられず、啻に此等の機關を統一する智的標準が各々相異なるのみならず、又此等の機關の一々に就いて調ぶるも、其の中に一貫せる組織を發見する能はざるなり。されば如何なる場合に如何なるものが最も眞なるかといふ事は、唯實驗的に定め得らるゝことなり。從つて科學に於ける眞の性質は獨り科學の目的より定め得らるるなり。藝術に於ける眞の性質は獨り藝術の目的より定め得らるゝなり。啻にそれのみならず、一層嚴密に事實を考察せんか、等しく科學といふものから、科學中にも亦目的を異にする特殊のものある以上は、それ等が各々獨立して眞を立するも咎めなきと同時に、彼等は又現に各々その眞を立しつゝあるなり。例へば物理學の眞は必ずしも化學の眞とはならず、化學の眞は又必ずしも生物學の眞とはならず、生物學の眞は更に又必ずしも心理學の眞にあらず、社會學將た心理學の認めざる眞を立しても差支なかるべきなり。要は此等幾多の科學が、各々その目的を達するに最も適當なるべき方便を以て眞と看做すの一點に存す。然らば又更に進んで一個の科學にせよ、その眞とするところが時代と國民性との異なるによりて、相異なることあるべき理由も自らにして知らるべく、茲に假說の要もなかるべし。之と同じく同一藝術の中にも、亦多くの特種のもの含まれ、その方便と目的とに各々多少異なるところありとせば、亦各々に特有の眞を立して支障なきのみかは、實に立せざるべからざるの數なり。決し

て個々の藝術も亦個々の科學に於けるが如く、初より凡てに共通の目的を定めて而して後協同的に發達し來るものにあらず、全く個々獨立的に人間の或る興味又は欲望を滿足する爲、生活の各所にその中心點を作りて出現したるものなり。既に特殊の科學の間にさへ眞の性質は爾く異なるべきものなると同時に、特殊の藝術の間にも眞の性質將た斯く異なるべきものなりとせば、等しく眞の名稱を帶ぶとも科學の眞と藝術の眞との間には、科學の目的と藝術の目的とが異なる如くその目的に於ても將たその性質に於ても異なるところあるべきは、極めて見易き道理ならずや。

此點より見れば、藝術家が眞を發揮するを藝術の目的とすといふに對し、予は全然贊意を表するに吝ならざるものなれど、斯くいふ藝術家は藝術の目的よりして直に眞の性質を獨立に規定するを爲さず、科學者の立脚地より科學に發見したりと號する眞、即ち科學の眞としてだに猶ほ已に不足にして且つ不當なる眞を取つて以て藝術の眞となし居るにあらずや。その無識と無學とは眞乎に憐まざるを得ざるなり。最初にも予の述べたる如く、藝術が眞を發揮するといふは決して近來の發明にあらず。如何なる古代に遡るとも苟も藝術の名を冒したる藝術は盡く眞の發揮を以てその目的となせしなり。如何なる時代の藝術と雖も當時の個人の要求社會の活動の特質に從て、其處に生活の統一と發展とを圖りたりしなり。之が當時の立脚地より見る眞に對し、それを發揮するを勉めずしては決して成り能ふところならざればなり。勿論その方法並に理想に至りては、今日吾人の採る方法並に理想と異なるは事實なれど、その等しく眞を目的とし居りしは爭はれざる事實なり。例へば希臘主義と象徵主義とが等しく眞の發揮を目的とするものから、希臘主義は特殊を溶解する普遍を現はさんとし、象徵主義は普遍を包含する特殊を現さんとすといふが如く、斯かる相違は有りとはいへ猶ほ孰れも人生の眞を捉へんとするに於て一致す。特殊と普遍とが人生の凡ての要素を搆成する二側面なる以上は、如何なる藝術にもあれ此二側面を認む

る事なくして、決して人生の眞相の窺はるゝことあるべからず。左れど如何に此兩者の關係を見るかによりて眞の性質は自らに異なり來る。藝術は此の如く孰れの時代を問はず、人生の眞の發揮を勉め、又勉めざるべからざるものにはあれど、藝術の目的が科學の目的と異なる如く、藝術の眞なるものが科學の眞なるものと異なるは上來既に述べたるが如し。即ち科學の理想は若し能ふべくんば人間の經驗の一切の關係を數量的に、分子的に飜釋し盡さんとするなり。勿論人間の經驗はそれが感覺的有機的なるところに根本性を有するもの故、科學の理想の達し得る範圍は極めて狹しとせざるべからず。數量的分子的に經驗を評價すといふことも、亦同じく實行上の必要より來れるものなれば、勿論散漫ながらも既に科學の體系を成す前より、人は經驗を統一するに當りて數量的分子的の思想を時々に用ひ來れるもの、現に今日常識の範圍に於ても、亦能く此等の標準を用ひ居れり。經驗を數量的分子的に測定すといふは、複雜極りなき生活の要素を單一なる要素に引下げること故、或る種の統一を經驗中に立つることゝなり、それが生活に利便を與ふるは言ふ迄もなし。さはいへ數量的標準の重に吾人に用だつものは、吾人の生活中比較的に下級の興味により支配せらるゝ部分のみ。吾人の生活中にても高級の興味により支配せらるゝ部分は、感覺的統一によりて支配せらるゝものなりとす、而して科學の理想とするところは人間の經驗を盡く數量的標準に引き直さんとするもの、此の如きは僅に人間の一部の欲求を滿足せしむるに止まり、決して人間全體の欲求を滿足せしむるものにはあらず。されば人間の性情が激變せざる限りは、直接的經驗は間接的經驗と併立し、感覺的評價は數量的評價と共同し行くべきものにて、間接的經驗や數量的評價は重要なる職分を充たすが如くに見ゆるは、その實それ等がそれ自身に價値を有するにあらず。直接的經驗感覺的評價を組織するに與つて力ある爲のみといふを得。吾人の眞乎に價値を置くところのものは、直接的經驗と感覺的評價となり、科學の取扱ふ間接的經驗と數量的

評價とは、唯直接的經驗と感覺的評價との意義を明斷にし、內容を豐富にする上にのみ價値を將來するなり。而かもそれすら吾人の生活の一小部分に限らるゝことは、既に玆に述べ終れるところの如し。

藝術は眞の發揮を目的とし居れり、或る意味に於ては科學よりは一層高等なる眞の發揮を目的とし居れり、とはいへその方法は科學の用ふるそれの如く、分析的にはあらずして總合的なるが故に、直接的經驗と感覺的評價との意義を明斷にし內容を豐富にするには科學の爲すが如く一度も之を間接的經驗と數量的評價とに飜譯せずして、何處迄も直接的經驗と感覺的評價とを在るが儘に取扱ひ、さてその意義を明斷にしその內容を豐富にするものなり。

科學は全體が有機的に與へらるゝや、それを統一するに分析し、單化(シンプリファイ)し、斯くてそれをば同質なる分子より成り立つと見るなり。藝術は一部が斷片的に與へらるゝや、それを統一するに、部分の元と付屬したる全體に反照して意味をその關係に認め、斯くてそれをばそれ自身に發見せらるゝよりも一層遠大に且つ複雜なる意味を有するものと見るなり。斯く有機的なる全體を器械的分子の集合と見ると、斷片的なる一部を關係的全體の支體と見るとは、等しく人生の眞を發見すといふものから、此處に科學と藝術との最も異なる點の存するなり。されば科學も藝術も等しく人間の要求を充たしながら、科學は藝術に先ち、藝術は科學に次ぐべきものなること、亦明かなるべし、即ち藝術は科學の創めたる業を完成し能ふも、科學は藝術の完成したる業を發展する能はず。

科學にせよ藝術にせよ、人生の統一と發展とを圖るには、獨り眞を發揮する以外に道なきものから、眞そのものの意義の藝術と科學とに於て非常に異なるを知らざるべからず、眞は前述せる如く獨り生活の繼續と發展とを圖る意志、即ち理想の創設なるが、此意志及び理想は藝術に於ては科學に於けるよりも一層强烈に、且明確に働き居るなり、予は曩に藝術に於て眞を發揮すると美を完成するとは同一作用の二側面なりと

論じぬ。されば終りに臨みてこゝに尠しく眞と美との交渉を述ぶるも强ち無用の業にあらざるべきか。

抑も眞を發揮するといふ事と、美を完成すといふ事とは單一なる方法と努力とによりて達せらるべき單一なる事件なり。既に科學にせよ、藝術にせよ、共にその目的とする所は、人間を取り圍む境遇をその欲求と理想との實現の方便たらしむる如く、之を同化し行く以外に存せざる以上は、科學の目的は、眞を發揮するにあり、藝術の目的は美を完成するにありと稱し、科學の目的と藝術の目的とが、全然異なるが如くに說くは、全く人生に參照して科學と藝術との關係を考覈せしことなき過に座するのみ。科學も藝術も人生を點化し靈化し、醇化する經過の二段階に過ぎざる以上は、兩者ともその根抵に於て、性質を同うせざるべからざる迄は、極めて明瞭のことならずとせんや。科學が眞を發揮して智の滿足を求め、藝術が美を完成して情の滿足を求むといひ、兩者各々その目的を異にするが如く見るは、全く事實を無視したる愚論に過ぎず。兩者共に人生を點化し、靈化し、醇化する、單一なる方便の二段階にして、その經過は一方には客觀的條件の整齊となり、他方には主觀的價値の搆成となる。而して前者は眞の發揮となりて現はれ、後者は美の完成となりて現はる。されば眞の發揮をその職分とすといはるゝ科學も必然に又美の完成をその職分となし、美の完成をその職分とすといはるゝ藝術も、必然に又眞の發揮をその職分とはなすなり。唯兩者が偶ま同一經過の二時期に起るの故を以て、一方は比較的に眞の發揮を目的とするが如く見え、他方は比較的に美の完成を目的とするが如くに見ゆるのみ。

然るに從來行はれ來れる膚淺にして狹隘なる美學に於て、科學の目的は唯に眞の發揮の一事にありとし藝術の目的は唯に美の完成の一事にありとせしことを、事實の眞義に適合せず、事實の眞相に透徹せずと考へし自然主義者は一知半解、唯在來の美學の謬見を訂正せんが爲に、藝術の目的も眞を發揮するにありと呼號したるは可なれど、一面に眞を發揮することは、必然他

面に美を完成することゝなるを理解せず、藝術の目的も科學の目的と同じく、眞を發揮するにありとせし結果、藝術が美を完成する如く、科學も美を完成し科學が眞を發揮する如く藝術も眞を發揮すればとて、藝術における美と科學に於ける美との間に相違ある如く、科學における眞と、藝術に於ける眞との間にも亦相違あるを悟らず、眞といへば科學に於ける眞も藝術に於ける眞も同一なりと速了せしのみか、更に科學の目的は眞を發揮するに存して美を完成するにあらずとの、在來の俗學の俘虜となり居るより、既に藝術にして科學と等しくその目的は眞を發揮するに存せば、科學が眞の發揮を目的とするが爲に、美の完成をば目的とせざるが如く、藝術も眞の發揮をこそ目的とはなせ、美の完成はその目的とするところにあらずといふ歸結に達せしなり。されど眞の發揮と美の完成とは同一目的に支配せらるる同一活動の二重側面に過ぎざるものにて、眞の發揮と美の完成とは科學に於ても同時に行はるゝ事實なるが如く、藝術に在りても亦同時に行はるる事實なり。但し眞の發揮にしても、科學におけると藝術におけるとは、大にその性質を異にする如く、美の完成にしても藝術に於けると科學におけるとは大にその體容を異にす。藝術にしてそれが人生に占むる位置と職分とに鑑み、藝術に相當する眞の發揮を勉めんには、そは自ら藝術に相當する美の完成とはなるなり。

さればゾラやモーパッサンが（少くもその理論に於て）藝術の目的として美の完成を斥け、一向に眞の發揮を勉むと揚言し、科學の眞を發揮する方法を移して、直に之を藝術の眞を發揮する方法となさんとせしは、彼等が(一)眞と美との相關を知らず、(二)科學の眞と藝術の眞との相違を知らざる二大過失より來れるものなり。

我國財政の現狀

田中穗積

今日の財政に就いては世に樂觀悲觀の兩論あるも、予はその論の孰れにも與せず、何となれば、日本の財政の近年著しき膨脹をなせるは爭ふべからざる事實にして、當路者は唯彌縫を事とし、或は剩餘金の繰入、或は一時借入金等、唯一時の糊塗をのみ勉め來りたるも、百計全く盡きて今年の議會には二千五百萬圓の增税を强え、遂にそれを通過せしめたり、斯かる眼前の事實を目擊するに於ては義理にも樂觀し居らるべきに非ず、然らば日本の財政は紊亂せること既に此の如きが故に、その前途は大に悲觀すべきかといふに、否な、日本は過去十年間に於て、日清、日露の大役二回を經て、今や東洋の治亂は一に收めてその手中に存するを見ても、六億の財政に堪え切れずして、次第に衰頽の悲運に臨まんことも亦有り得べからざるの事に屬す。故に予は我國財政の前途に對しては、樂悲兩觀の孰れにも贊同し能はざるなり。

されど之を事實に見るに、我國の財政は過去に於て過大の膨脹を爲し、而して將來又益々膨脹せんとする傾あり、故に此を今日の儘に放任するに於ては國力增進の上に多大の妨害を免れざるべし。即ち十年にして期し得べき國運の發展に二十年を要し、二十年にして期し得べき國運の發展に四十年五十年を要するに至るべきは明かにして、試に我邦の財政が過去に於て如何なる膨脹をなせるかを見よ、日露戰役の前年、即ち明治三十六年には國費總額二億六千萬圓なりしもの、今日に在つては六億一千萬圓の巨額に上れり、即ち日露戰役前に比すれば一倍四割の增加に當るものにして、此の如きは列國の財政史を通じて見ざるところなり、又此を公債に就て見るに日露戰役前即ち三十六年には公債總額五億八千萬圓なりしもの、現時にあつては二十二億五千萬圓となり四倍の增加を爲せるものにして此れ又列國の財政史を通じて見るを得ざる所なりとす。

而しては何によりて來れるか、言ふ迄もなく日露戰爭の結果なり、即ち日露戰爭の爲に我邦は二十億圓の戰費を投じたり、此二十億圓は或は國の運命を償ふ代價としては比較的廉なりきと言ひ得るも知れず、されど兩三年間に此の如きの巨資を費し、而して平和克復の曉に於ても尙ほ且つ戰時の惡税を依然として廢止する能はざるに至ては如何に辭を設くとも戰後經營方針の誤れるに職由するは明かなり、即ち所謂戰時税なるもの丶中には各國認めて以て惡税中の最惡税となすものを含む、例へば鹽税、織物税、行通税の如き、將た輸入米に課する租税の如き、此種の租税は啻に負擔の不公平なるのみならず、國力の發展に少からざる弊害を及ぼすものにして、何れの國に於ても之が廢止に努めざるはなし、勿論我邦が戰時中斯かる惡税を起したるは必しも非難すべきにあらず事一國の運命に關する場合には砂を嘗め草を嚙むとも敢て此を忍ばざるべからず、然れども戰爭既に終れる今日猶ほ斯る惡税を永久に繼續し、之を國民に强えんとするが如きは如何にするも戰後の經營を誤れるものにして凡そ戰時中堪ゆべからざる惡税を課し幸に平和の克復を見たる曉に於ては政府の最大急務は先づ民力の休養にありて財政を整理し、負擔を輕減し、產業の發達を計るを以て最大急務となさゞるべからず即ち戰後經營の大方針といふもの豈此の外に出づべけんや、然るに我邦に於ける戰後經營の方針は果して如何、曩に三十七年及び三十八年の兩度に於て、增徵せる一億六千萬圓の戰時税を毫も輕減することなきのみならず、更に今年に於て又二千五百萬圓の增税を斷行せり、斯の如き亂暴なる戰後經營は孰れの國孰れの時代に行はれたることありや。

增税の辯護論者はいふ、凡そ兵力によりて贏ち得たる位地を維持せんには、亦兵力に依らざるべからざることは古今の道理なり、日本が戰勝によりて贏ち得たる光榮ある帝國の位置を維持せんとするに當りては軍備の擴張は遂に避くべからずとせば、財政の膨脹亦已むべからざるの勢ならずや、避くべからざる軍備を擴

張して、而かも財政は緊縮すべし、租税は輕減すべし、而して一等國の位置は維持せよと注文するは、恰も是れ無錢遊興のそれに似たりと、彼等の增税を辯護する毎に此の如きの語を以てす、予は之に酬えて試みに問はん、世界孰れの國か果して戰勝つて內憂外患を一掃せる曉、尙ほ汲々として軍備の擴張に熱中する我邦の如き例あるか、有らばそは何れの國何れの時代なるかを答へよ、

試に予をして拿翁戰爭後の英國に就いて談らしめよ、英國は武力によつて大英國の位置を安全にし、武力によりて覇を世界に唱ふるに至りたるなり、而かも平和克復の曉に於て、果して軍備を擴張し財政を膨脹したりやといふに決して然らず、彼は軍備を縮少し、財政を緊縮し、著しく國民の負擔を輕減したり、即ち千八百十五年に於ては、その歲入總額八億萬圓なりしものを、所得税、麥麴税(モルトタックス)其他種々の戰時税を輕減し、千八百十九年に於てはその歲入總額頓に五億五千萬圓に降れり、こは餘りに急激なる財政の緊縮にして、今日より考ふれば稍々極端に走りたる嫌はあれ、兎に角此く迄思ひ切りたる財政の緊縮を斷行し、軍備の縮少を敢行せり、而して其結果英國は果して武力にて贏ち得たる位置を支ふる能はざりしかと言ふに決して然らず、當時商務長官たりしハスキスソン氏の如きは、內國商業の發達を計るが爲めに更に原料品に賦課する輸入税を輕くし、同時に又內國の交通を盛にするが爲め鐵道の敷設若くは運河の開鑿に多大の力を用ひ、更に又當時有名なりしカンニングは外務大臣の椅子に倚り、前述の如く軍備を縮少せるにも拘らず目醒しき辣腕を振ひ、ウヲターロー戰後歐洲諸國の諸君主が維那に會して締結せる神聖同盟の專制主義に反對し、飽く迄自由民權主義を唱へて已まざりき、即ち葡萄牙を佛蘭西の干涉より救ひ、希臘が土耳其の抑壓に反抗して獨立の旗を揚げたるに對し大なる聲援を與へ、或は南米に於ける西班牙領土の獨立を他國に率先して承認したるが如き、無能の外交家は動もすれば武力の後援なくして到底立派なる手腕の振はるべき道理なしとい

に拘はらず、カンニングは此の如きの竦腕を振ひ、神聖同盟の諸君主をして肝膽を寒からしめたり、即ち內に賢明なる大臣ありて產業の發達を圖り、外に敏腕の外交家ありて國威の宣揚を勉む、軍備を縮少し財政を緊縮したる英國が、國運發展の上に於て贏ち得たるところは正に此の如し、

然るに我國に於ては、何故に百年以前の英國が採れる戰後經營の跡を追うて、軍備の縮少、財政の緊縮を斷行する能はざるか、增稅を辯護する論者は、又動もすれば普佛戰後に於ける獨逸の採りたる經營方針を引證して軍備の擴張避くべからずとなせども、予を以てすれば此の如きは甚しく引例の倫を失するものなり、何となれば、普佛戰後の獨逸は佛に勝ちたるも未だ決して內憂外患を一掃したるにあらず、即ちオーストリアは、サドワの一敗已むなく節を屈して和議を媾じたりとはいへ、何時かは一たび會稽の恥を雪がんとの復讐心燃ゆるが如く、佛蘭西は又巴里が重圍の中に陷りて已むなく五十億フランの償金を負擔して降服したりとはいへ、ビスマークの豫想に反して、佛蘭西は此巨額の償金の爲に一蹶復た起つ能はずといふ迄には疲弊せず、僅々兩三年にして、此巨額の償金を完濟し盡し、世界列國をして佛蘭西の富の無盡藏なるに驚嘆せしめたる程にて、何時捲土重來の復讐軍を起すやも知るべからず、而して北方の露西亞、これ又虎視眈々常に獨逸の罅隙を窺ふ、外に列國關係の危急なるそれ此の如きものあり、更に內を顧れば獨逸聯邦の統一は僅に成りて其團結尙ほ極めて弱く、獨逸の軍隊が巴里に進擊し、千八百七十一年の二月普王ウエルヘルムはウイルサイユの宮殿に於て獨逸皇帝の帝冠を戴き、始めて帝國の統一を實現せるも其紐帶甚だ弱く南獨逸の諸邦は依然として普魯西に對し惡感情を抱き暫らく強者の前に屈したるも若し普魯西にして一朝他國の强大なる打擊に會はんか、帝國は再び分裂を免れざりしなり、千八百七十年代の獨逸は實に此の如く、戰勝つて而かも內憂外患の慮より遠かること能はざりき、即ち此の如き事情の下に在りては、獨逸が軍備の擴張に力を盡せ

して毫も怪むに足らず、

然るに飜つて我邦の今日は如何、露國と戰ひ勝つて兎にも角にも外患を一掃し得たり、最も恐れたりし露國を滿洲より擊退せし今日に於ては、少くとも今後十五年若くは二十年極東の平和の維持し得らるゝこと、何人も疑を容るゝの餘地なく、一方には日英同盟あり、他方には日佛協商日露協商ありて此等の諸國とは極めて親善なる國際關係を保持しつゝあるのみならず、其他孰れの國に於ても我邦に對して敵意を挾むものなし斯かる狀態は百年以前拿翁戰後の英國よりも、寧ろ遙かに安全なりといはざるべからず、何となれば英國は當時孤立の位置に立ちて、神聖同盟に反對の旗幟を飜したるのみならず、內に於ては拿翁戰爭以後一時商工業の沈衰の爲めに、不平の徒全國に充ち、甚しきに至りてはケトー、ストリートの陰謀の如き、一擧にして當局大臣の鏖殺をすら企つるに至れり、然るに我邦の今日此の如き陰謀等は夢想すらすること能はず、而して外諸强と親善なる既に前述せるが如く今や我邦は極東の治亂を收めてその掌中に握れり、然るに何を苦んで軍備の擴張に汲々たるか、百年以前の英國は、內外の事情今日の我邦よりも遙かに多端なるの時に際し、能く軍備を縮小し、財政を緊縮して而かも武力によりて贏ち得たる光榮ある位地を完全に保持し得たるに對し我邦は武力に依らざれば此を保全する能はずとせば西園寺內閣の當局者は自らその無能を告白するものにあらずして何ぞ、英國當年の當局者たるハスキスソン、ピール、若くはカンニング等の諸氏に對し果して如何の面目かある、

財政が今日の如く過大の膨脹をなせるもの、素より之を軍備の擴張にのみ歸すべからず、左れど軍備擴張がその重なる原因たるは爭ふべからず、試みに數字を取りて點檢せよ、明治三十六年に於ける日本の陸海軍備費總額は八千萬圓なりき、然るに今日に於ては實に一億九千萬圓に上れり、此の如き大膨脹を爲したるが爲に、戰時中に起したる所の一億六千萬圓の增稅を繼續して猶ほ足らず、今年更に二千五百萬圓の增徵を

行し、殆んど有りと有らゆる財源を竭して軍備の擴張に全力を傾注しつゝある有樣なり、されど元來一國の國防なるものは獨り强大なる艦隊、精銳なる軍隊のみによりて完備せりと云ふこと能はず、此れと同時に此の强大なる艦隊精銳なる兵士を活動せしむべき戰費の豊富なるにあらざれば軍隊は唯國の裝飾たるのみ今や我邦は平和の際に於て倘ほ且つ有らゆる財源をあさりて一意軍備に投じつゝありと雖も、若し不幸にして一朝平和の破るゝことあらんか、戰費に充てん爲にはそも如何なる租稅を徵收せんとするか、又如何にして公債を募集せんとするか、內國に於て五分利付の公債は、平和の今日猶ほ八十圓以下にあり、外國市場に於ては戰勝國たる我邦の公債が却つて戰敗國たる露國の公債よりも低廉なる有樣なり、此の如き事情の下に於て若し不幸にして平和の破れたりとせよ、我邦は果して五十萬噸の艦隊、百萬人の陸軍を動かすに足るべき戰費を容易に調達し得る望みありや否や、智者を俟て後知るべきにあらず

而して戰費の調達が既に困難なりとせば、此大艦隊、大軍隊なるものは、唯一種の裝飾に過ぎざるべく、而かも裝飾としては極めて贅澤なる、極めて浪費的なる無用の長物たらんのみ、即ち此の如き軍備の擴張は此を無謀の輕擧と云はずして何ぞや、軍備擴張論者或は言はん、亞米利加は今や海軍の擴張に熱心しつゝあり、パナマの運河も近き將來に開鑿せらるべし、又露西亞も戰爭の敎訓によりて陸軍の改革海軍の復興に力を注ぎつゝあり、西比利亞鐵道も必ず近き將來に於て複線工事を完成せん、列國の狀勢此の如き際に處しては、我邦も亦軍備の擴張遂に免るべからずと、然り、米露共に如何にも軍備の擴張に相當の努力を惜まず、されど此を我邦の極端なる陸海軍備の擴張に比すれば、殆んど言ふに足らず、彼我若し地を換へて、假りに米露の立脚地より我邦の狂氣じみたる軍備擴張を觀察せば果して如何、極東の平和を亂すものは日本なり、日本に對抗して萬一の變に備ふる爲には相當の軍備擴張亦已むなき次第なりと考ふべし、即ち米國又は露國をし

て軍備を擴張せしむるものは我邦之を挑發するによると云ふべく、又若し近き將來不幸にして極東平和の亂るゝことありとせば、これ亦我邦の過大なる軍備の擴張が其基を爲せりと看做さゞるべからず。故に予は徹頭徹尾過大なる軍備の擴張に反對するものなり、極東平和の保全より見るも、我邦の財政上より見るも、而して又實力ある國防の上より見るも、今日の軍備擴張には全然反對せざるを得ず、

輕躁者流動もすれば辯じて曰はく、軍備の擴張或は過大なるべし、然れども當局者たる松田大藏大臣は、二十四議會に於て二千五百萬圓の增稅に對して承認を求むるに當り、幸にして此增稅案通過するを得ば政府は近き將來に於て重ねて增稅を要求することなしと言明せり、故に暫らく忍んで此難局を經過せば將來國民の負擔は國力の增進と共に次第に輕減して財政も自から整理せらるゝに至るべしと樂觀するものあり、されど當局者の言質の如きは幾度繰返さるゝも此を信用すること能はず、即ち若し漫然之を信用せば他日必ず噬臍の悔あるを覺悟せざるべからず、何となれば一昨年即ち、二十二議會の委員會に於て現內閣の前大藏大臣たる阪谷氏は西園寺內閣の財政方針は非增稅非募債なりと、繰返して言明せるに拘らず、その舌根未だ乾くに遑あらず、今年更に二千五百萬圓の增稅を斷行せるにあらずや、政府の言責を重んぜざることそれ此の如し、施政方針の動搖每に此の如きに徵するも、當局者の明言の如き固より賴むべからず、加之先きに政府の發表せる繼續費年度割なるものによれば新事業新計畫なるものは實に明治五十四年まで繼續すべきものなり、即ち一方に此の如く、事業の永年に亘りて繼續するもの存する限り、此れに必要なる經費は增稅若くは募債によるの外なき火を睹るよりも明なるにあらずや、以上の理由によりて予は財政整理は實に今日最大最要の急務たるを絕叫せざるを得ず、

然るに猶ほ樂天家はいふ、我邦が過去に於ける進步の勢は誠に驚くべく僅かに五十年にして、極東の重鎭となり、世界一等國の伍伴に列するに至れり、即ち過

去を以て將來を推測せば今後十年又は二十年、國力は愈よ偉大なる發展を爲す指を屈して期待するを得べしと、然れども予はこれに對して又其謬見たるを警告せざるを得ず何となれば過去に於て我邦の國力發達の著しかりしことは說者の言の如く、爭ひ得べからざる事實にして此を貿易表に就て見るも、明治十六年の輸出入總額六千四百萬圓より昨年に於ては實に九億二千萬圓に達せり、即ち此の如き長足の進步は他國に比類なき所なれどもその原因は果して何處にか存する此を探究するに其原因は種々ありと雖も重もなる一原因は過去に於ける我邦財政の規模比較的小にして、換言すれば國民が國費の負擔比較的輕かりしが爲め幸にその餘れる精力を産業の發達國力の增進に注ぐを得たるによれり、然るに今日に於ては形勢全く一變して日本國民は實に列國比類なき重稅の負擔に苦むとゝなれり、試に數字によつて此れを見んに、歐洲の一等國中最も重稅の負擔に苦むものは佛蘭西にして國費の分擔額は凡そ一年の所得の一割二分に當り、之に次ぐものは英國にして所得の九分に當り、更に之に次ぐものは獨逸にして所得の八分に當れり然るに我邦國民の國費分擔額は所得に對して實に二割一分の高率に當り歐洲一等國中の最も重稅を負擔する佛蘭西に比し殆んど二倍に達すと云ふに至りては負擔の重きに驚かざるを得ず、而して此の如き計數は素より絕對に信憑すること能はずと雖も、大體の傾向は能く此れによつて窺ふとを得べきが故に、以上の數字に徵し如何に日本國民が重稅の負擔に泣きつゝあるかは此れを知るに難しとせず、

蓋し國民の負擔力に自ら制限あるは論を俟たざる所にして獨逸のユスチー氏は、所得に對する一割六分の課稅は普通なりとしフックは一割五分の課稅を以て最高點と見做し佛蘭西のルロア、ボリユーの如きは一割二分までは堪へ難きことなきも此れに過ぐれば重きに失し設令人民此を納むるも國力の增進は大に阻礙せらるゝを免れずと論ぜり思ふに此種の算當は、今日の學理的見地よりすれば殆んど價値なき如くなれども、兎もあれ一割二分乃至一割五分までの負擔は國民此れに

堪ゆるを得べきも此れに超過するに於ては勢ひ國力の增進を妨ぐる虞あるは略ぼ此を推知するを得べし、然るに今日我が國民の負擔が遙に此れに超ゆるに至りては、國運發展の大に阻礙せらるゝは避くべからざる勢にして、殊に今後尙ほ財政整理の行はれざる限り增稅重ねて行はれ募債重ねて行はるゝに於ては國運の前途に對し誠に杞憂に堪へざるものなきを得ず、

然るに此紊亂せる財政の現狀に對して、國民の多數の極めて平氣なること、如何に權利思想の幼稚なる國民とはいへ餘りに奇怪千萬ならずや、斯かる財政の現狀にして繼續せば國力發展の上に非常なる障害を招き其結果列國競爭の激甚なる今日、日本の位置に大なる打擊の來るべきは避くべからざるの數なるに拘はらず。殆んど國民は此を雲烟過眼に付するに至つては果して何の心ぞ、

顧れば拿翁戰後の英國は前述せるが如く、カンニングその他賢明なる當局者の力により、戰後の經營着々として步武を進めたるも惜ひ哉中途カンニングの逝去の爲に一頓挫を來しウエリントン公の起つて內閣を繼承するや公は素と武將として偉人なるも政治家としての雄にあらず、頑固守舊の主義を奉じたるが爲め前內閣によりて着手せられたる政治の改革全く望なきに至れり、玆に於て英國國民は忽ちウエリントン內閣に對して大反抗を起し、國論殆んど鼎沸の觀を呈しトーリーパーテーはピット以來殆んど四十年間繼續して英國の政權を握りたるも遂に輿論の反抗に敵する能はずして崩壞し、ロードグレーの組織せるホイッグパーテーの內閣を見るに至れり、而してロードグレイは施政の改善は先づ第一に選擧法を改正し、憲法政治の基礎よりして確立せざるべからずとなし、選擧法改正案を議會に提出したるに、下院にては大多數を以て通過したるにも拘らず、上院の頑冥なる者の爲に拒まれ、議案は遂に否決の運命に逢遇せり、玆に於てロードグレーは議會を解散して國論の向背を問ふに及び、當時英國全土の有樣は如何といふに、集會に次ぐに集會を以てし、示威運動に次ぐに示威運動を以てし、國事を憂ふる

志家は大擧して倫敦に推し寄せ、上院に對して偉大なる壓迫を加へんとし、殆んど英國は內亂の淵に臨み國王は再びウエリントン公を起して政權を握らしめんと諮りたるも、當時若しウエリントン公をして局に當らしめんには國內の形勢は到底內亂の禍より救ふべからず、軍隊の間に於ては鬼神の如く尊敬せられたるウエリントン公の力を以てするも、國民に同情を表する軍隊を驅て銃口を國民に擬せしむるが如きは到底行ふべからざる狀態なりしが故にウエリントン公は飽くまで內閣を引受くるとを固辭し、國王に勸めてロードグレーの改革案の成効を計り强大なる輿論の勢力は遂に選擧法を議會に通過せしめて立憲政治の基礎を確立し、斯くて施政の改善は着々として其の緖に就くに至れり、當時英國々民が如何に自己の權利を主張するに熱心にして、又弊政を革新するに鋭意なりしか今日此を回想して尙ほ且血湧き肉躍る感なきを得ず、然るに我邦に於ては誤れる戰後經營の結果は過大なる租稅の負擔は國民を苦しめ國政日に非なるものあるに拘らず、國民の最大多數は此を對岸の火災視し漠然たる樂天觀を抱きて平然たるに至りては國家の前途に對し誠に深憂に堪えざるなり、國民にして自覺し、蹶起して此頽瀾を旣倒に廻すの堅實なる思慮熱烈なる勇氣なくんば他日必ず嚙臍の悔あらん予は切に國民の覺醒を望まざるを得ず。（談話を筆記し氏の校閲を經たるものなり）

豫告

次號の本欄に寄稿を諾せられたる諸名士は左の如し

上田萬年氏
金子筑水氏
安部磯雄氏
池邊吉太郎氏
荒川已次氏



現在における海外一切の状勢殊に我國と緊密の關係ある清米露等の消息をば最近の新聞雜誌により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し江湖の参考に供す

職工の見たる米國人

東京府工藝學校長　今　景　彦

凡そ物は見たる人に依つて色々に解釋さるゝと云ふことは勿論である、丁度富士山を見るのに、詩人の見た富士山と地質學者の見た富士山と强力の見た富士山と參詣の見た富士山と違ふ如くに、亞米利加を見るにも學者の見た亞米利加、所謂旅行家の見た亞米利加、政治家の見た亞米利加等で色々變りなければならぬと思ふ、で私は職工としての亞米利加觀を一つ話して見やうと考へる、其觀た結果を先づ一言で云ふて見ると、

亞米利加人は偉大なる職工だ

と云ふことである、それはどう云ふ譯かと云ふと、

第一彼は勞働を愛す、殖民に依つて其國を建てた彼の米國は今尙ほ殖民狀態の生活を繼續して居るのだから、どうしても勞働自活と云ふことを本則として往かねばならぬ、即ち働けば得、働らかねば缺乏すと云ふ因果が極めて正確に且つ覿面に現はれて居るのだ、何人でも彼の國に一旦往つて見たならば働らかずに居ることは到底出來ないのだ、老たる國の或る階級の人のやうに、自から働らくことなしに裕かに生活して往くことは出來ない國柄であるから、男も働らき女も働きて老ひたるも若きも働き富るも貧しきもそれ〴〵働らかなければならぬ國柄である、左れば先づ最も見易きとから言ふて見ると、彼等の多數は多くの場合に短かき背廣服細きズボンを纏ひ底皮の厚き巻上げの靴を穿いて身輕に、勞働的なる裝ひをして極めて忙がはしげに駈廻つて居る、職工は勿論大統領でも多くの場合は皆それである、他の國の人のやうにステッキなど携へ、悠長なる態度をして市街を漫歩すると云ふやうなことは、日常に於ては到底見ることが出來ないのである、日

曜に教會の歸り途か或は公園の散歩より外には、その様な呑氣な装ひを見ることが出來ない、即ちビヂネスの爲に外出する人が、ステッキを振回して歩くと云ふやうなことは亞米利加の國では見受くることが殆んと無いので、日本の様に官吏銀行、會社員、商人、學生に至るまで、而も己れの家より其目的地に到るまでの間、殆んと電車に依つて往復し得べき、場所であるにも拘らず、尙ほ且ステッキを携へて歩くと云ふやうな光景を彼れ米國人のそれに比べて見たなら其意氣込に於てはや大なる相違があると云はねばならぬ、是は男子に付ての話ですが婦人の装ひに付て見ても彼の束髮なるものは既にはや勞働的のものである(之は米國人のみには限りませぬが)其歩行其擧動の又極めて活潑てあるために他の國民から亞米利加の婦人は御轉婆てあると云はれるまでに活動的てある、是等の男女朝早く各々の家を立出て、其職業の目的地に向つて往く光景と云ふものは、實に素晴らしい勢ひてある、紐育とブルックリンとの間に

ブルックブリッチ

なる橋があるが無數の男女が此橋を朝夕ビヂネスの爲に往復する光景と云ふ者は、實に平和の戰爭をまのあたり見る如き思ひをするので、之に比べて見ると東京市内の往來などは餘程呑氣な感じをするので、米國の國民は斯様にして一分時を爭ひて働らきの目的場所に出掛けて往くのてすが、先方へ往けば多くの場所にタイムレジスターが備へ付けてあつて、自己の有つて居る所の番號を押すと其出勤時間は此タイムレジスターに依て記入されるのです、斯様にして彼等が階上に登るのにはエレベーターを用ひるのですが、大きな會社工場になると其内には急行のエレベターを特別に使用して居るのもある位、此エレベーターに依つて彼等が働らきのテーブルに向ふと、直ちに上着を脱捨て身輕の装ひをして其仕事に取掛るのであるが或る者は立た儘に仕事をして居る、其事務の多忙なるものに至つては腰を掛けて晝飯を食する事ができないのてある、其爲には立つて食ふやうに出來たレストラントさへも設備してある、紐育の金融の中心とも云ふべきエキスチエンジプレースと云ふ所に此種のレストラントの有名なものが設備されて在る、故あつて私は毎日此所の其レストラントに往つて晝飯を食べたのですが、今序てに其

レストラントの狀況

を御話して見るならば組織が數百人の人が同時に這入りても極く自由に極く滿足に食事をすることが出來るやうに仕組れて居るのであるが、其有樣を述べて見れば食堂の周圍には無數の棚が出來て居る、其棚に食物が陳列されて居るそうして、其食物には一々値段書きが付けてある、そこで此食堂に這入つた人々は勝手に自分の好む料理を選取りして十分に食するのです、其價だけは自分が之を記憶して置いて、其食堂を出る時に自分の食べただけの代金を自分から言ふて拂ふやうになつて居るから、其組織は非常に簡單であると同時に客に向つて滿足を與へるやうに出來きて彼れ米國人が自負する信用制度なるものは斯る場所にも遺憾なく實現されて居るのです、忙がはしき國民に對して斯る設備の行はれるのは實に必要なことだらうと思ひます、顧みて日本の飮食店などを見れば數百人はおろか數十人の客が同時に入込んで飯を食ふと云ふやうなことはなかく\困難である、若しも突然に數十人の客が入込んだならば給仕人下女の混雜と云ふものは一と通りでない客は頻りに手を拍つて呼ぶが下女は容易に膳椀を運んで呉れぬと云ふやうな工合て、忙がはしい人には到底間に合はぬ飮食店、即ち悠長なる遊び客に對する料理店は設備されて居るがビヂネスマンに對する食堂の設備なる者は皆無である、日本の國民には其必要がないとしたならば一考すべき問題てはあるまいか、斯樣にして米國の社會の組織はビヂネスマンに向つて必要な設備をしてあると同時に一面には家庭の敎育及び國民敎育を以て益々此勞働を愛するの精神を養成し鼓舞して居るのです、富豪の子供が每日學校から家へ歸ると、自分の家庭の勞働に服務する如き、或は大學の學生が夏休みを利用して學費の一部を取る如き、彼の聖路易博覽會の際に大學生が夏休みを利用して場內の車押しをしたと云ふ話は能く人の知る所である、獨り學生のみならず大學の卒業生が喜こんで下級の勞働者と伍して働いて居る有樣は實に壯快に感じられる次第である、私はセラキユースの

フランク自働車製造工場

を見に行つたことがある、其歸りに同工場では自働車を以て私をホテルまで送つて呉れた、其時に一人の潑なる青年が、私の爲に自働車のドライブをしたの

あるが、車中で話を聞けば此一青年はコーネル大學の機械科を卒業した人だと云ふので、私は此人と話を交換したならば面白からうと思ひ、ホテルに着いた時に此青年を食堂に導びかうとしたのですが、彼が言ふには、私は貴下をホテルまで御送りする所の時間を與へられてあるけれど、其他に時間を與へられて居らぬから御好意は有難うございますが失禮をすると云つて歸つてしまつたので、之れを我邦などの樣に大學でも卒業すると直ぐ豪くなつた積りで、學士の肩書などを振回して愚人を驚ろかすやうな人の多いのに比べて見ると、雲泥の差であると云はねばならぬ、カクシテ米國は小學中學の敎育から此精神の養成に努めて居るので、手工科などゝ云ふ學科が小學校中學校に加へられて居るのは其一の方便であらう思ふ、

併ながら日本の學校の如くに唯敎科目のみに依賴して居らぬのであるから、各種の方法に依つて敎員自から或は校長自からが勞働模範を示して往くのである、今其一二の例を擧げて見るならば、私が

スプリンクフイールドの實業中學

に參つた時に晝飯を同校の食堂で食べたのですが、五六人の少年が白き前掛を掛けて絶えずウエーターをして居るのを見たのです、私は最初其の兒を見て食堂付きの給仕人であると思ふて居たが、嬉々として他の生徒と談笑する有樣を見て私は斯樣に考へたのである是は學校の生徒であつて順番に此勞働に從事して居るものであらうと、私は之を學校長に問ふと校長の云ふには、否是は生徒の希望に依つてさせるので、順番ではないと云ふ答である、私は更に、然らば是等の生徒は貧しき人の子供であるかと尋ねましたら、否唯生徒の希望であると云ふ答であつた、私は然らば是等の生徒は何の目的に依つて此仕事を希望するであるかと問ふた、之れに對する校長の答へが斯うである、ウエーターをすれば其日の晝飯は代金を拂ふことなしに食事し得るので、故に此勞働に服するものは親より與へられた晝飯の代金を貯蓄することが出來るのである、さうして此貯蓄された金は彼等が欲する目的に向つて使用し得るのだから、生徒中に此勞働を希望するものは決して貧しき人の子弟には限らない、立派な金持の子弟にも希望者がある、ツマリ貧富によるものでは全然ない、而して學校は之に依つて勞働を愛するの精神を生徒に付して、極めて明確に養成し得べきことを信じ

て居る、單に順番を作つて學校の命令に依り勞働に服さしむるが如きは此勞働を愛する所の精神を造る上に其効果は極めて乏しいものだと答へられたのです、私は此語を聞いて米國人の思想が飽までも此實際的だと云ふことに感服した次第である、又私は

セラキユースの職工學校

を見たのであるが、此學校の校長はスキートと云ふ人て前にコーネル大學のプロフェッサーをした人である、今はコーネル大學を出て自分からストレートラインエンジンウオークスなる工場を所有して、其社長として働き、一方には職工學校の校長であります、私は此スキート先生を工場の方に尋ねたのである、先生は粗服を纏へる白髮の老人であつたシカモ快濶な元氣の宜い人附の好き御爺いさんであつた、而して其教育上の意見などは確かに一個の大家であると思はれた、其經營してある學校も株式組織であると云ふ事などは頗る風の變つた學校でありませんか、それは別として先生が自から立つて工場及び學校を案内して呉れたので、其間に於ける先生の一擧一動は如何にも活働的で勞働的であつたことは次ぎの事に依つて明瞭であらうと思います、先づ先生は右の手にはストレートラインエンジンウオークスと云ふ大工場を控へて激務に當つて居ると同時に、左の手には直接學校の生徒を教育して居るのであるから並大抵の勉强では出來ないのである、現に先生の部屋に於て私が話をして居る間にも、二三の人が參つて先生と取引上の談話があつた、其間に先生は金を出したり取つたりして居るのである、之に依つて見れば先生は會計の實務をも自から執つて居ると云ふことが分かるのである、暫らくして一人の職工體の男が、二片のコークスを持ち來り先生に向つて、今之を鑄造に用ゆんとするのですが何れのコークスが適當であるかと問ふた、先生は暫らく其二つのコークスを熟視し其一の選んでやつた、之て見ると先生は技術上の實務をも執つて居ることが分つた、されば先生は實に事務家でエンヂニヤである、或は職工であつて營業者である、教育者であつて、而も交際家である、其勞働的にして奮闘的なる實に敬服に耐へぬ次第ではありませんか、私を伴ない工場を見終つて社長の室に歸つた時に先生の手は炭粉に依つて眞つ黒になつて居つたが、其手を洗ふ暇もなく私と談話をして居つたのである、私が別れむとして先生の名刺を貰はうとしたら先生は

机の抽斗から、名刺箱の儘取出して、私自身をして其内から一枚を取らしめ嬉々として笑つて居つた有様などは如何にも面白い、之を我邦の社長學校長などと云ふ人に比べて見ると著しく平民的であることが分かるのであらう、スキート先生の如きは職工の權化とも云ふことが出來やうと思ふ、（談話筆記校閲濟）

ルドヴヰク、アレヴヰ氏

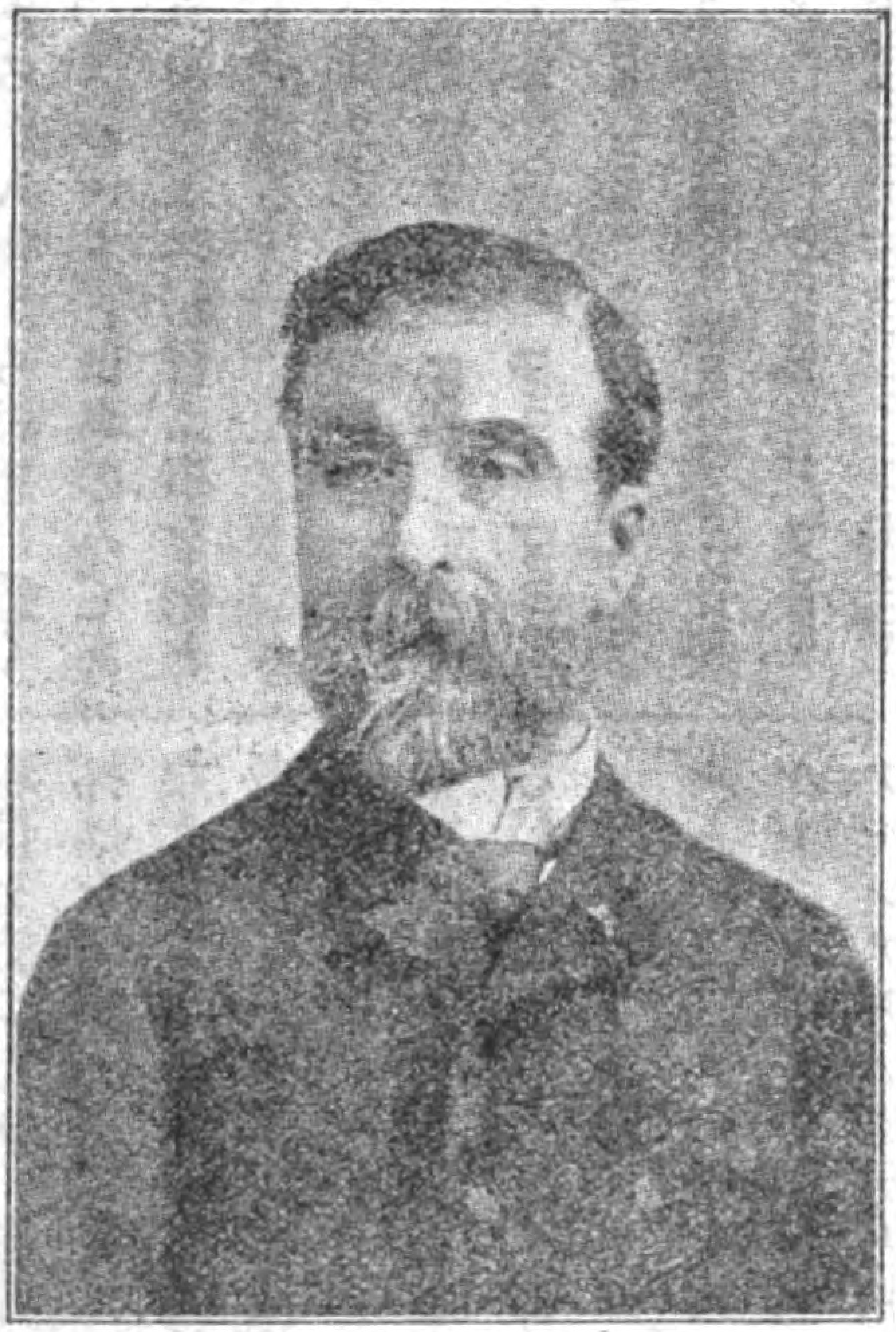
門外漢

十九世紀の戲曲家として小説家として、久しく歐洲に其名を知られた佛國學士會院會員アレヴヰ氏は去る五月に巴里に永眠した。氏は千八百三十四年七月一日巴里に生れたのであるから、今年は七十三歳であつたらう。氏の父はレオンと言つて作家として少し名を知れた人で、叔父のフロマンタルと云のは作曲家として一代の重きをした人であるから、ルドヴヰック氏の出たのも、蓋し家系からであらう。氏は猶太人であつた。例のレヴヰの一族で、其祖先は矢張レヴヰと呼んだが、千八百〇八年にナポレオンが戸籍登錄に關する規則を定めたので普通の名を附ける樣になり、家族名をアレヴヰーと稱するに至つたとの事である。

ルドヴヰク氏は巴里のルウヰ大帝學校(リセー)に學んで、幼少の時から學才頭角を現はした。文官にする積りで敎育されて千八百五十二年學校を出ると直ぐに官吏となつて十ケ年程諸種の職に居た、此間、時々ジユール、セルヴヰユールといふ名で戲曲を書いて居つた處が意外に成効したので、遂に官を辭して專門の作劇家となつた。頃は丁度拿翁三世の時代で、市人は娛樂を求めるに急で、中にもオペラ、ブーフが盛んであつたので氏も之に筆を染めた。スクリヴ、オージエ、サンドウ抔にもあるやうに、合作の風習が行はれたので、氏も他の諸家と合作したが、就中氏の合作者として博く名を知られたのは、ジユール、メリー氏、アンリー、メイヤック氏である。其作夥しい中にも「オルフエー、オー、ザンフエル」（一八六一）「美はしのヘレン」（一八六五メイヤック合作）青髯」（一八六八）「大公爵夫人」（一八六七）「レ、ブリガシ」（一八六九）等は最も有名なもので歐米の各劇場で演ぜられて、喝采を博したものである。以上揚げたのは皆ヴオドヴヰルであるが、純粹のオペラ劇では「カルマン」「小公爵」抔が名を知

られて居る。又メイヤック氏と共同にては別に三十程の喜劇(コメディ)及びハースがあるが此の中最も有名なのは千八百七十三年に出た「フルーフルー」や「巴里生活」抔である。前記ヴォードビル、及びオペラの作にはオッフエンバッフ氏の音樂が着いて巧妙な歌舞と相待つて大喝采を博したものである。千八百八十年以後は氏は全く劇を捨てた。其原因は種々あつたらうが、一は氏の作に大切てあつたオッフエンバック氏が同年に死んだからてもあらう。」

此後氏は小說及び散文の類に筆を染めたが氏が天賦の才は此方面にも亦非常な好評を博した。中ても千八百八十二年に出た「ラッペ、コンスタンタン」は最も有名なもので十年經た間に百五十版以上になつた。同八十四年十二月に學士會院院員に選擧せられたのも此作による多しとの事である。其の他の氏の小說て名を知られたのは、「クリケット」「兩結婚」「愛の結婚」「ブランセス」等てある。氏は其天性が已に作劇家であつたと見えて、其作に於ける場面の變化が何れにもよく整へられてあつて、よく劇場に上されるやうになつて居る。「敎父コンスタンタン」抔も此の配合が實によく出來て居て、今も尙劇に上される事があるのである。



LUDOV'LC HALÈVY

さて、作家として氏を批評して見るならば、氏は小說家といふよりも作劇家否滑稽劇作者である。合作になつたヴォードビル劇の中て、如何なる部分が氏の手になて、メイヤック氏は如何なる部分を擔當したかは、余輩の知らぬところてあるが、其性質からいふと、メイヤック氏は滑稽的喜劇に於て創作の才があり、アレヴヰ氏は諷刺嘲笑的の才に長じて、かねて創作の才に富み、文才に長けて居つたとの事であるから、其作に於ても其長所を受持つたと見て差支なからう。氏の作には別に高尙な理想とか、人生の大問題抔いふものは更にない。プロットは巧妙て、ダイアロッグは

佳く、會話は奇抜て美妙てあるけれど、作其ものには何の意味もない。唯歡樂を旨とし、主義はなく目的もなく、怠惰て、言はば快樂の爲に日を送つて居る生活を叙したものて、舞臺は皆巴里にとり、ヒロインは皆巴里婦人てある。前に言つた「美はしのヘレン」抔も材は無論古代希臘のヘレンてあるが人物から思想、悉く近世巴里に外ならぬものて、スパルトとは名のみてある。例へば爰に其開幕早々カルチャスが言ふ事を例として擧げて見ると、次の通りてある。

Cal. De piêtres affrandes, eu vérétée ..... deu tourterelles, une amphore de laitage, trois petils fromages, des fruits très-peu, et des fleurs beaucoup. Jontes les guirlandes nous eucombrent en pure perte. Il est passé le temps des troupeau de boeufs et de montons........quand ou pense que moi, Calchas, ai la semaine dernière pagè une note chez le boucher! Voilà où eu sont lessacrifices!.........Les dieu s'en vout! les dieu s'en vout!

Phil. ....

Cal. Elle lutto, Je ne dis pas les contraire, elle lutte.........J'oi lu dans le *Moniteur* de Cythère le chiffre exact des offraudes du mois dervier...... c'est euorme.

Phil. Il doit faire de bonnes affaires, le grand augure de Vénus.

諧謔、笑語口をついて出て、頤を解く事度々て、又現世を笑つたり、社會の根本主義や金錢、位地、權貴抔はをろか、別に笑ふべき事でない事までも嘲つて見たりして、時には諧謔骨にまで徹する事もあつて、觀者をして思はず、噴飯せしめるのである。所謂お道化的なのてある。

「フルーフルー」は巴里の遊惰社會を描いた喜劇てあるが、其筋の大略は如此てある。

巴里の金滿家ブリガールといふがルーイス、ジルベルといふ二人の娘を持つて居て、此のジルベルトはフルーフルーといふ綽名を持つて居る、ジルベルトはヴアルレアといふ男と相戀して居たが、サルトリーといふもジルベルトを愛して居た、併しサルトリーはルーイスとも仲が可いので他は皆二人を戀仲と思ひ、ルーイスも亦サルを愛して居た、處が、一日サルはルーイスの手を通してジルベルドに結婚を申込んだので姉は自分を犧牲にしてジルとサルを結婚させた。夫は妻を

愛して居た處が妻はフルーフルーの綽名丈に家の事や小供の事抔少しも介はず毎日〳〵娯樂の事のみに耽つて居るので、ルーイスが來て家の差配を助ける樣になる。間もなくジルベルトは昔の愛人ヴァルレアと又戀仲となり、自分の位地に氣が着いて居たゝまれぬ樣になり、姉には一伯爵と結婚せよと言つた處が、姉は已に妹の爲めに愛を犧牲に供して又結婚するの氣がないとて動かぬので、ジルベルトの位置は忽ち變じて、戀人と二人でベニスに駈落すると、後から夫か追駈けて來て決鬪となり、ジルベルトは此爲め病氣となつて死ぬといふのである。

ヴォードビルの作者として盛名を博したものには、彼の外はラビーシュがある。此兩人を作の上で比較して見ると、ラビーシュは非常に常識に發達して居つて、其諷刺、嘲笑、諧謔が觀客をして笑を禁ずる能はざらしむる間にも、自ら考へると諷刺する事件が日常の生活に現に行ひつゝある事なので、觀客をして皦然襟を正さしめ、冷汗を流さしめるといふ風である。アレヴヰーのは之と異つて、描く所は遊惰な「巴里生活」で主に女主人公が中心となつて他は之によつて動き、一言一擧皆諧謔となり、巧妙な音樂を更に之に加へて笑聲を絕えざらしめるにある。彼の長所は此點にあるのてある。彼の名が文學史上に永久に殘るやは疑問てあると多數の評家が疑ふのも以上の長所短所からてある。

最近列國狀勢史

▲英王エドワード陛下のスカンヂナヴイア訪問 陛下は四月二十五日を以てコーペンヘーゲンを發し二十六日ストックホルムに到着、瑞典皇室の最高貴賓として滿市熱狂するばかりの歡迎を受け此處に二日間滯在の後更に那威のクリスチアニアに到りしが、英王今日のスカンヂナヴア三首府訪問は、現在の事局と最も密接なる關係近來瑞典人が英國人の友情著しく減退せるを嘆き、一方に於て頻に獨逸と最も濃厚なる關係を結ばんとするものの如く、殊に甚しきに至つては露國政府までが、瑞典に於ける排露感情を和らげんとするやの風說さへ屢々倫敦に遞し、北海波羅的海問題に影響する事甚だ大なる者あるが如く思惟せらるゝのみならず、更に獨帝がスカンヂナヴイヤ三王國の歡心を得るに汲々たるは、必ず其裏面に排英的意味の含まるゝが如く思はるゝよりさては斯く三首都訪問の擧に出てられしなる由、それかあらぬか英王皇后兩陛下のストックホルムに到着せらるゝや、市民の熱

心なる歡迎と善盡し美盡せる市街の裝飾とには、流石の英王も眩惑するばかりなりしと云ふ。

▲米國大統領の海軍擴張案　四月中の外報中最も吾人の耳朶を衝擊したる者は、下院に於ける大統領海軍案の論戰なるべし、即ち其海軍案なる者は二隻の擴張を四隻とするの案にして、議場は珍らしく殺氣を帶びるまでに至りしが、結局否定論者勝を制し、大統領案は見事に敗れたり、されど輿論は一般に口氏の國防論を讃し下院は再び次回の議題として之を審議せざるべからずと云ふにありしが、最も大統領を好まざるニューヨークサンの如きすら、下院を以て近時の對外政策を解せざる者となし、米國は現在の國威を維持せんが爲には、海軍の擴張を急務とすと論じて口氏に同情を表したり。

▲瑞典と露國の侵入　過般露國がアラン群島に軍港を設定し、此處に砲臺を築かんとの計畫は瑞典に於て少なからず民心を激動せしめたり。アランは露瑞兩國の間に介在する、所謂政治的バルチク海の一局部にして、露國が之に據るは取りも直さず瑞典の安全を威嚇するものなるより、曩に英國の承諾を得ざれば露國は此處に築港せざるべしとの協約を結び置きたりしなり。瑞典は常に早晩露國の一地方となるべきを懼るゝよりストックホルムの新聞は一齊に恰も空中より舞下する大鷲を見し雛の如く騷ぎ立てたり、即ち露國のアラン築港は瑞典占領の第一着手にして、英國に取りても又北海方面に於ける致命傷たるを失はず、瑞典が地圖上に其國としての生命を斷つに至らば、英國は從來の露國人亞細亞人以外、最も熟練したる有力なる海兵に依りて操縱せらるゝ露國の艦隊と戰はざるべからず、彼等は正に露國勢力範圍の接近を覺悟して可なりとて、英國の此問題に於ける覺醒を促したり。

▲葡萄牙新政後の總選擧　久しく議會を召集せざりし葡萄牙に於ける新王政後の第一回の總選擧とて、到底無事に濟まざるべしとは豫て世人の期待せし處なるが案の如く選擧當日のリスボンは大混亂を極めたり、新政府は軍隊を繰り出して市民及び暴徒等を鎭壓せんとし、多數の死傷者を出したり、當選者の黨派別は、王黨側にては革新黨六十二進歩黨五十九、獨立黨十七にして、總員數百五十五人中百三十五人の大多數を占め、反對側にては國民黨二、共和黨五、及び其他所屬不詳十人あり、即ち王黨は未曾有の大多數を制したる譯なれば、今後の政局は比較的無事なるべしと云へり、唯憂ふる處は新議員今後の行動なり、葡萄牙は久しき以前より政治道德の最も腐敗せる處なるを以て、王黨中にも獅子身中の虫は少なからず、反て反對側に健全なる有力なる分子の伏在するを常とするが故に、黨員の多少を以ては其前途をトするに難しと雖も、若し是等の新議員が先帝改革の骨子たるディクテーターシップの眞意を解して、新政府の弊政革新に盡すに至らば、葡萄牙は猶ほ浮ぶ瀨あるべしと云ふ。

▲セルヴイアの新内閣　四月十三日を以て新任せられたる新大臣は、來る總選擧に於て其率ゆる舊革新黨を以て大多數を制し、前内閣と

稍々異なりたる施政方針を見るに至るべしとの點より、之に對し青年革新黨及び其他が　新大臣パシヲー氏を除かんとて激烈の運動中なり と云へば、セルヴイアは又一騒動を起すならんとのことなり。

▲佛國首相と社會主義者との論爭　首相クレマンソー氏は、四月八日を以て社會主義者の領袖たるジェール氏の質問書に答へたり、彼は之に於て政府の一般方針西部鐵道國有の件、勞働者年金法案所得税問題等に關する詳細の説明を試み、併せてジュール氏の激烈なる首相攻撃を駁撃して、國内の社會主義者革命急進派等に對する自己の態度を明白にせしが、之れ實に攻守其地位を轉ぜしめたる首相近來の大手柄なりき、ジュール氏は以上の諸問題に關する上院との交渉に於て、一擧に政府を覆さんとするの勢を以て首相に迫りしが、首相の熱烈なる逆撃に遭ふて殆ど自家の辯護に一時間餘を費すの苦境に陷りたり、首相の不信任案は四百四十二に對する八十の少數にて消滅し、更に首相信任案は一百に對する三百四十一の多數を以て可決せられたり。（蓬萊子）



德富蘇峯論

△蘇峯文を論ず

山路彌吉

（一）

貴社にて德富君の噂を書かるゝにつき我等にも一文を物せよとの御申付なれども、それだけは平に御免を蒙りたし。仔細は我等は明治二十五年以來今日に至るまで足掛け十七年間德富君の世話になり通しにて所謂其門生たるに過ぎず。斯樣に長き交には人物論の沙汰は無用の事にて諺に云ふあばたもえくぼに見ゆる類なるべければ、他人が聞けば隨分偏頗の批判と思はるゝもあるべし。酒のみに酒の善惡は分らず、熟友に友の人物は知れ難き道理もあり。たとへば自分は公平に批判する積にても他人は例の我佛尊しの類とすべし。是れ我等の蘇峯論に筆を着くるを好まざる所以なり。但

し文章の一事に至りてはたとひ友人のものなりとて之を論ずるも我心に疚しとする所もなく、世の君子にも尤められざるべき歟。因て折角の御申越に甘へ蘇峯文に付少しく卑見を述べんと存ずるなり。

(二)

文章は心の外に表はるゝものにて心を本とすれば畢竟末技と云ふべきものなり。さりながら人間は其末枝に制せられて思ふ様に心を表はし得ぬが常なり。少年の時、年始の口上を親より教へられ、その廻禮には教へられし通りきまり文句を並べて頭を下げ恭く時儀をせねばならぬことなりと仕込まるゝ時は、きつとそうせねば悪るき様に覺へ、口上の極り文句に縛れ折角口上を教へられしが爲めに却て眞の心を得言はず。小兒が大人の口眞似するとて老人などに笑はれしことは我等も覺あり。文章は末の事ながら文體既に立てば、自らそれに縛ばられて、心が筆に副はぬことも少からず。かゝる時に文體の壓制を破り、我流の新體を作り、我心を自由自在に現はす人は豪傑の士なり。福澤先生は則ち其一人にて漢學者の家に生れ、文章家の間に育ちて而も流行の文體を輕蔑し、自己流の新體を立てゝ世の中を推渡りたる其仕打は、後人より見れば何の苦も無き樣なれども、左樣の解脱は凡人にはなり難きことなり。德富君が德富一流の文體を立てゝ世に出てたるも、やはり同樣の事にて、文體の壓制を破り、德富蘇峯と云ふ一人の心を時文の籠より飛び去らしめたる手段に至りては、是れ實に自己の解脱にして併せて世間の時文に束縛せられしものに解脱を與へたるものなり。此段蘇峯君の大功にして戰場の一番槍にも比ぶべきものなり。

(三)

蘇峯君の文章が世に出でし頃は若き人の殊にもがきたる時代なり。たとへば日本學より世界學に移る過渡時代ともすべき時節にて世界學の素養もあり、新しき空氣を吸ひたる若き人は時の文體を迷惑に思ふもの少からず、さりとて思切つて我流を立つる勇氣も無く、どうして善いやら分らず其所へ、九州の片田舎より德

富猪一郎と云ふ男現はれ出て、我等の様に書きたらば君等の心も自由に世に現はし得べしとて大膽に例を示したれば成程是は面白し左様あるべき筈なりとて天下始めてつまりたる鼻に空氣の通ひたる様に覺えたれば蘇峯君の名は忽ち高くなりたり。それ程の事は誰れにても出來るとは云ふべからず。文體の壓制を破るは少くとも壓制政治家と戰ふほどの苦勞が入ることなり。

（四）

さりながら蘇峯君の文章が此大成功を爲したる其裏面の情を窺へば君の長所も此に在り、君の短所も亦此に在りと云ふべし。蘇峯君は文章の古體を破壞したれども、君の長所は破壞に在らず。却て造形に在り。少くとも君と一日談話したる人は君の非凡なる造形力に驚くべし。此に造形力と云ふはたとへば漫然人氣と云ふが如き一種の空氣に目鼻を付け、他人に在りては中々言現はし難き感情を一句の中に鑄るを云ふものにして、風も君には捕ふべきものなり。雲も君には捉むべきものなり。抽象的のものを化して具體的のものとし、廣がりたるものを縮め、流るゝ物を凝らし、物に形を賦し、事に儀を與ふるは君の非凡なる長技にして我等の常に敬服する所なり。されば君の談話には殆んど生硬の語なし、必ず心中の鍛錬を歷來るものなり。思ふに君をして時文の體裁を破壞せしめたるものは、此造形力に在り。君は單に時文の壓制に苦み、時文の圈内に蟄伏し難き覇氣を以て時文を破壞したるものにあらず。君は自己の非凡なる造形力に依りて時文よりも更に高く、更に廣く、更に美しき雛形を示し、一の新しき形を以て舊き形に易へたるものなり。其有様を物に譬ふれば時文は裃をつけたる昔の殿樣なり。君の文體は洋行歸の紳士なり。均しく一の形式なり。而して君は一旦自ら作りたる此形式には中々愛着強く容易に再び之を破壞するを好まず。君の造形力の非凡なるだけ、それだけ執着力も尋常ならざるが如し、是れ君の長所却て短所たるものなり。

（五）

蘇峯君の文體も二十年來大に變化したり。さりなが

ら其變化は急激の變化に非ず。君は一旦作りたる文章の形を容易に變ずるが如き人に非ず。其變化も自然の生長にして故意に出てしには非ず。君は自己の一旦作りたる城郭を容易に破壞するを肯んせず。此點に於ては君は寧ろ保守黨なり。

(六)

今日の所にて蘇峰文の世間に眞似のならぬ點を云へば第一に意義の明白に在り。蘇峯の文を讀むものは何人も其意を誤解するが如きことは無かるべし。世に云ふ痒ゆき所に手の屆くものなり。新聞記者は根善く同じ事を繰返さねばならぬもの。讀む人に誤解されてはならぬものとは君の恒言なり。君の用意此に在り。其文章は其期する所に背かずと謂つべし。さりながら斯樣に意義を明白ならしめんと骨折るは文章の技術より云へば第一義なるべきやと云ふに、其決して然らざるは君と雖も亦認むる所ならん。若し讀む人の善く合點して意義を過らざるを名文と云はゞ辯護士の書く訴狀などが一番名文ならん。仔細は辯護士は道理の筋の分るやうに申立るを第一の能事とすればなり。されど筋が立ちても、道理が分りても讀む人が興味を持ちて讀まねば文人の文に非ず。讀む人に興味を持たせんとならば、省筆も、餘韻も無くてならぬことならん歟。されば文章も親切に過ぎては平板に流るゝ弊なきにしも非ず。蘇峯文近時些く濟世の工夫に過ぎて氣韻の保存に注意せざるものあるに似たり。蘇峯君に在りては新聞記者の文は勢此の如くならざるべからずとの持論あり致方なきことならん。されど我等は猶ほ君が新聞記者たる職分の爲めに其天才を犧牲にするものあるを殘念に存ずるものなり。

(七)

蘇東坡の文は所謂長篇大作多けれ共其他人の及ばざる妙味は却て小品に在と覺へたり。蘇峰文已亦東坡文に似たり。我等は君の長篇大作に感心するよりも寧ろ多く其小品に感心したり。是は例の造形力の働きは最も多く短ものに現るゝが故なり。然るに近頃はとんと左様のものを見る折を得ず。我等の遺恨とする所なり。

（八）

蘇峰文の世に出てしより既に二十年、天下の論文家、敵は尤めて之に倣ひ、味方は喜んで之を摸し、文章の形式を一變したり。蘇峯は眞に英雄と謂つべし。さりながら時世は更に百尺竿頭一歩を轉じたれば文體も今の儘にては已むべからず。豪傑の士は文王なしと雖も興る。我等は更に第二の蘇峯君が今の年少文士より出て來らんとを希望せざるを得ず。斯様の事は豪傑を待たねばならぬことなれば必ず出るを期しかたけれども實は出てくれねば困るなり。

德富蘇峯氏

戸川秋骨

德富蘇峯氏に就てはかねてから思想家として觀察して見たいと思つて居た、併しその前に一度同氏に會つて或る問題に就てその意見を聞てからに仕たいと思つて居り、また余の考も今はまだ纒つては居ないので、後日の事に仕たいと思つて居たのである。然るに此の度中央公論で蘇峯論を出すから何か書けと言はれたので、一寸その氣になつて此處に筆を執る事にした。但し今余の書くのは蘇峯論ではない。たゞ氏に關する私事と思ひ附た斷片とを記するのみのである。それは今述べた通り考が適當に纒つて居ないからである。

「將來の日本」「新日本の青年」乃至は「國民の友」發刊當時の德富氏は青年の友として平民主義の皷吹者として吾々青年者流が渇仰の標的であつた事は能く人の知つて居る處であるが、余は實に明治二十四年を以て氏に親接する事を得たのである。場所は大磯であつた。余は其年の夏叔母に伴はれて從弟の大野洒竹と共に大磯に遊びに行つたのである。スルト德富氏も一家を擧げて其處に來て居られたので、始めて親しく接し親しく語る事を得た次第である。當時余はホンの小僧で德富氏に接したからと言つて何も議論を討はしたり、意見を聞たりする資格はなかつたのである、併し何しろ「國民の友」で敬服して居た先生に直接に面談する事を得たのであるから只何となく難有く感じた事は非常であ

つた。尤も氏は余等を相手にして面白い話を盛んにやつて余等を誘導してくれた事は慥かてあつた。その話はまことに面白かつたがそれよりは余等の面白くて今日なほ忘れられない事は先生の指揮の下に余等が大磯の町外れの池のやうな處で掻掘をやつた事である。魚は何が捕れたか記憶して居ない、慥か何にも捕れなかつたとも思ふが、何しろ當時高名なそして青年の憧憬して居る先生が頭の天邊から足の先きまで泥だらけになつて余等と一處に泥水をかきまはされた一事は深き印象を余等に與へられたのである。なるほど斯樣いふのが青年の友といふのであらう平民主義といふのであらうなどゝ感服して仕舞つた理由である。當時氏の話された書は一二記憶して居るが、特にテエンの文學史に就ての説は能く覺えて居る。それは別に面白い意見てはないが、テエンの文學史は一家の主觀主張をのべるために書いたものであるといふのであつた。今てこそそれ位の事は誰れても知つて居るが當時は珍らしい説として余等は拜聽した。大體余の如きが當時テエンの文學史を兎に角一と渡り通讀して居たのが不思議なので、また頗る進歩して居たのである。尤も今でも余はテエンの文學史を以て有益な面白い書物であると考へて居るのである。

それからなほ一とつ氏に感服した事がある。それは從姉の結婚披露の時であつた列坐の人々は何れも當代知名の人てみな盛裝して並んで居た。其處へ余は只一人書生ボウの見すぼらしい風體で這入つて行き、あまり憶面がないでもなかつたが、先づない樣な顏をして席に即いたが、見まはした處豪らさうな人ばかりて甚だ極りが惡く手持無沙汰てあつた。スルト忽ち正面の方から一人の紳士が立つて余の前まで歩いて來て恭しく禮をしてくれた。紳士は即ち德富氏てあつた。余は德富氏の此の好意て少なからず安心しまた嬉しく感じた、そして此れが青年の友たり、平民主義の鼓吹者たる所以てあるかと再び感心した。

德富氏の斯樣いふ態度が即ち青年の友なりまた平民主義の鼓吹者たる所以てあるか如何か知らぬが、余の當

時感じた通り世間も亦さう思つて居たのであらう、それてあるから德富氏が松隈內閣の時勅任參事官となり、爾來所謂薩派といふものに轉籍し、今日桂黨の有力者たるを見て、變節者とし浮薄漢として居るのであらう。併しこれは甚だ所謂のない非難である。余を以てすればこれは一面には氏の持論と一面には氏の慧眼とから來た事であると思ふ。グラッドストーン氏と終始進退を共にし、常に自由黨中の自由黨であつたジョン、モーレー氏はこんど伯爵になつたさうだ。これを聞いた時には何にもかけかまひのない吾々すら少し變に思つた、併し良く考へれば何も不思議はないので、モーレー氏が伯爵になつたと云つてそれは決して變節でもなく輕薄な事でもないのである。德富氏の場合も丁度このモーレー氏の伯爵拜受と同じ樣な事であらうと思ふ、大體初めから德富氏を以て書生の見て居たやうな青年の友たり平民主義の皷吹者たりと考へて居たのが間違てある。余は政治の事には門外漢であるが、「國民の友」の初號時代からすでに氏は權勢に近附いて居たと察する、慥か鐵道問題かで井上侯の意見らしいものを社說に連載したのは「國民の友」の初めの時代であつたと記憶する。

併し初めから權勢を求めて居たとしても余等を相手にして高談した事や、衆人の中で書生ッポウに恭禮を仕たのは僞善であるとは決して言へない、これは氏の本心から仕た事である。かゝる態度と權勢に近附くといふ事とは兩立しない事ではないのである、只世人はかれをのみ見てこれを察しなかつたので怪んだのである、世人が馬鹿なのである。

尤も少し了解しかねる事は、氏が今日なほグラドストーン氏一流の政治家を敬慕して居るやうに思はれる事である。德富氏の性格から言ふも、主義から言ふも、またその今日の立場から言ふも、氏はグラッドストーン流の人ではない。むしろチェムバレーン氏流の帝國主義者國權論者でなければならぬ。氏がグラッドストーン氏等を稱揚するのは、その人物に推服するのだと言はれるかも知れぬが、それなれば余は、人物と主義政策と

は區別して考へるべきものでなく、また區別されるものでないと言ひたいのである。グ氏の人格あつて而してグ氏の主義があり政策があるのだと思ふ。余は何も知らぬが、グ氏のやうな人は果して推服すべき人であるか疑はしく思ふのである。實を言へば余はグ氏のやうな人を好まない。實際英國にも氏を好まぬ人は澤山にあるらしい。余の知己の英人にも現にグ氏嫌ひがある。英國人のうちには南阿戰爭に反對した人が澤山にあつたさうであるが、同時にグ氏を以て惡漢だなどゝ極言するものが無いでもないさうである。まさかグ氏は惡漢ではあるまいが、本國では吾が邦人の考へて居るやうにのみ考へられて居ないのは事實らしい。話が枝葉に亘つたが、それで余はその人物に推服するの一事を以てでは、蘇峯氏がグ氏を敬慕する所以を了解する事が出來ぬ。夫れ故若しグ氏流の主義政策を蘇峯氏が持つて居ながら、現在のやうな立場に居るとすれば、世の氏に對する批難も多少意味のある事になるが、この點は如何あらうか。余は蘇峯氏を以てグ氏に同情すべき人ではないと思ふ。

なほこの點に就ては横井小楠氏から傳へられた、所謂肥後の實學なるものゝ氏に於ける勢力を考へ、これを明治の思想史の上から論じて見たならば、頗る興味ある事であらうと思ふが、今はその時でもなくまたその準備もないため、こゝにはそれに説き及ぼさぬ。

余は柄にない政治論などをやる積りはない、今翻つて私事を物語る事に仕やう。大磯で始めてその謦咳に接し後東京に歸つても屢々氷川町のその寓居を訪れて教を受けた、少なからず文學上の高見を聞いた。ハットンの批評文や。ジョン、モーレーの文集などを借用して解らぬながら拾ひ讀みをした。氏は余の文學的の思想を開發するに非常に有力な人であつた。余一人のみではない、明治の文壇は外國文學殊に英文學に就て氏の指導を被つて居る事は實に尠なからぬ事と信ずる。「國民の友」は世間の未だ全く注意して居なかつた時に早くカーライルに關する事實を報じ、アーノルドの消息を傳へたのである。消息を傳へた計りではない實際英國

思想を吾が文壇に傳へたものは實に蘇峯氏である、この點に就て氏は明治年代無双であらうと思ふ。余の考から言へば大學は英文學を敎授する處であるが、實際に英國思想を傳布した點は極めて僅かである、坪内氏の早稻田に於ける其勢力は大したものであらうが、英文學若しくは英國思想の一點に就ては或は皆無ではないかと疑ふ人さへある。德富氏に至りてはその實際の行爲にはた文筆の上に英國思想を體現して、その勢力を流布さして居る事非常である。氏の英文學に關する智識は該博ではない。その讀書には一定の主義がある、所謂經世經國的の文書に限られて居る、マシユー、アーノルドの如きマコーレーの如きジヨン、モーレーの如きはそれである、小說に就ても氏の好む處はワード夫人の作の如きである、併し好む處のこれ等諸家の作に至つては精讀實に驚くべきほどである。

　余は書生時代以後氏に近接しなかつた。不思議な事に明治三十五年再び會談したのは逗子の濱であつた。この時もまた海水に浴しながら氏の面白い談を聞いたが、この時氏は特にハリソンを余にすゝめられた。ハリソンは雜誌に掲載されて居たものは每時も讀んで居たのであるが、それから後余はその著書を特に精讀するやうになつたのである、此の時氏は余のまだアンナ、カレニナを讀まなかつたのを聞いて、是非一讀せよとすゝめられた、アンナ、カレニナのトルストイは全然アーチストであると言はれたが、此の種の書も氏の常に注意を拂つて居られる處である、

氏はその時、英國の書物をのみ讀んで居ると思想が英國思想になると言はれた、余は英語の先生を仕て居たので—今でも仕て居るが—英吉利の書物をのみ多く讀むので趣味が英國流になる。大陸の文學が流行する以上大陸ものを讀まなくては行かぬと注意されるから、骨折つて大陸のものも注意はして居るが、動もすると英吉利ものに手を出したくなる。この點に於て考がやゝ德富氏の考に近くなつて來たかと思ふ。德富氏は政論に於ても私行に於てもまた文藝上の意見に於ても全然英國式である。世間では氏を以てマコーレーに比し、

氏の文を以てマコーレーの文から來たと言つて居た、如何にも氏の文はマコーレーの文に似て居るかも知れぬ、氏が持つて居られたマコーレーの英國史は注意線やら割註で穢されて居り如何にも精讀した名殘があつたと記憶する。併しながら氏には英國史の大著述はない。また出來ない。余はむしろ氏を以てジョン、モーレー氏に比したならば如何であらうかと思ふのである。モット書き度と思ふが、こんな事は幾何書いても只紙面をうづめるに過ぎぬから此處で筆を收めて置く。これては徹頭徹尾蘇峯氏に贊辭を呈したやうなわけになつたが、德富氏に關しての詳細の事は知らぬから、知らぬ事は知らぬとして、先づその長所をのみ記述して置たら、無事であらうと思つたからである。

△蘇峰氏に就いて

大町桂月

嘗て聞く、或る小學校にて、『楠公』といふ題を出して、文を作らしめしに、『楠公は、人を以て作り、忠義の爲めに用ゐるものなり』といふ文を作りたる一生徒ありきとかや。この筆法を以て、『德富蘇峯』を評すれば、『蘇峯は才子を以て作り、新聞の爲めに用ゐるものなり』とでも云はむ乎。

學、漢洋を兼ね、識、內外に亘り、政治、宗教、哲學、教育、文學、歷史、美術、何でも一通りは知り、趣味ひろく、學才もあれば、世才もあり、文章も達者、口も達者、社交もひろきやう也。而して勤勉にして、壯健にして、新聞を經營し、筆を新聞に執ること、十年一日の如し。洵に新聞記者として、至極調法なる人也。

斯く云へば、蘇峯は、新聞記者として、えらきやうに聞ゆれども、すべて、調法なるものは、決して、えらからざる也。何でも出來るといふ人に、たいした人なし。分業の世の中、一事に精通するを尊ぶ。田舍の店屋の如く、何でも間に合ふは、調法は調法なれども、良品は求むべからざる也。博士の學位は、何でも知つて居るといふことを意味するにあらずして、一事に精

通することを意味する也。新聞記者とても、必ずしも、何でも知るを要せず。經濟なら經濟、外交なら外交、軍事なら軍事と、専門的に深き知識あるが肝腎也。その方が新聞記者として價値あるもの也。知らず、蘇峯に専門的知識ありや、否や。

余は、蘇峯に面晤したることなし。其文とても、絕えず、讀んで居るといふ譯でも無し。蘇峯に就いて知れる所、多くは、世上の噂なれば、或は誤解なきを保せず。元來、批評、殊に人物評は、人を評するにあらずして、己れを評する也。今の余の主觀に映ずる蘇峯は至極調法なる新聞記者たるに過ぎざる也。

余は、前後二回、蘇峯の演說を聞けり。その言ふ所は、氣が利きたり。音聲は、どうも快感を與へざる、一種のしやがれ聲也。其聲にて其人となりを想像するに、常人以上に感心すべき人とは思れず。鳥にたとふれば、鴉也。鴉は、好んで、腐れたる腸などを食ふ。よき聲の出づべき筈なし。知らず、鴉の腹中、何ものかある。天下の名士、蘇峯ともあるべき人を、鴉に比するは、大にお氣の毒なれども、實際余が蘇峯の聲を聞いて感ぜし所を直言すれば、鴉以上には思はれざる也。

聞く、蘇峯は、日曜毎に、必ず逗子の別莊に赴くと。この一事を以て察するに、蘇峯は、規則正しく、よく己れに克ち得るの人也。即ち意志のつよき人也。世の事務を執るに、必要なる性格也。かくて、活きたる新聞器械たるを得べし。聞く、蘇峯が當年御用新聞記者たりしや、每朝、雨が降らうが、火がふらうが、御用があらうが、あるまいが、必ず元老の玄關に伺候せりと。これ日曜毎に逗子に赴くものは、さもあるべきと也。三太夫たるものは、必ずこの通りならざるべからざる也。御用記者は、三太夫には非ず。苟くも、我政見、時の政府と合する所あれば、筆を執つて、政府を助け、反對派を壓し、以て我政見を貫き、政府をして、我經綸を行はしむれば、名は、御用記者といふとも、實は依然として布衣の宰相也。よしや、實際の宰相の上にあらずとも、其外にあり、其下にはあらざる也。

之に反して、唯政府の意を迎へ、政府の申譯のみをなさば、それこそ眞の御用記者。布衣の宰相は、下つて三太夫となる。殿樣の仰せらるゝことは、何事も御無理御尤、謹んで承れと、忠義顔するが、所謂三太夫根性、一片氣骨ある男子の忍びざる所也。われ、蘇峯が御用記者としての態度は、前者なりしか、後者なりしかを知らず。又、蘇峯に、布衣の宰相たるだけの器量ありや、無しやをも知らざる也。さき頃、萬朝報にて、清浦家の諸子の無頼荒淫なることを記せしが、五月十六日の同新聞に記して曰く「清浦家に關する當社の記事に就き、清浦氏と同郷の關係ある德富蘇峯が當社に來りて語りたる所によれば、清浦家の家庭に、紊亂といふ語に相當する如き事實は認むるに由なし。清浦氏は同情に富む、品行方正也、夫人と琴瑟相和す。夫人は賢良の聞あり。人並よりも子を愛する方にて、夜分歸りの遲き時などは、深更までも端坐して待つ程也。されば、子に甘過ぐるとは、或は、云ふを得べけんも、最も圓滿なる家庭なることは、十分に認らる」と。もし之を事實なりとすれば、蘇峯は、清浦家を辯護せむとして、清浦家の非をあばきたるもの也。人並よりも子を愛す、否、子に甘過ぐ。このやうな女は、決して賢良といふべからず。道樂息子は、必ずこのやうな母を有する也。萬朝報に記したる如き清浦家の諸子の無頼荒淫なるは、全くこの夫人の致す所ならずんばあらざる也。要するに、この蘇峯の辯護をして事實ならしむれば、蘇峯は、萬朝報の記事に證明を與へたるに外ならざる也。このやうな人に、御用記者となられては、政府は難有迷惑の思をなすこと、なほ清浦家の如くなるべき也。

一面より云へば、蘇峯は、文章家也。當年、一個無名の靑年にして「將來の日本」を著はし、「國民之友」を發行し、その淸新なる文章は、實に天下を風靡し、明治の時文に、一紀元を劃せり。余の如きは、蘇峯の文章に感化せられる一人也。この點は、われ飽くまでも、感謝せざるを得ず。その後、凡そ二十年、蘇峯は、一日も筆を絶たず。思想豐富、文章暢達也。一代の

文章家と云ふべき哉。

文章上の恩は、恩として、玆に蘇峯の文章に就いて、余の感ずる所を申さば、蘇峯が調法なる新聞記者なるが如く、其文章もやはり調法なる文章也。篇を終るまでも、すら〳〵面白く讀めるが、さて、讀み終りては、何も殘り居らず。人を感應するの强みもなければ、人をひきつけるの温みも無し。文章家は文章家なれども、文章の大家とは云ふべからざる也。

世には、蘇峯見たやうな型の人も少なからず。事務を執りて、世に生活するに、至極調法也。間違ひ無し。俗に所謂喰ひはぐれ無し。之を官吏にあてはむれば、判任官以上也。勅任官の貫目なし。まづ奏任官として、恰當の人材也。其弟、蘆花は、蘇峯ほどの俗才なし。勅任、奏任、判任以外に逸出す。蘇峯は、奏任官的の處より逸出せざるべし。思ふに、蘇峯は、才の人也。才の爲めに累せられて、大きくもなれず、高くもなれず。今のやうな具合にて行けば、一生の間、如何ばかり多く書を讀むも、如何ばかり多く文をつくるも、所謂垢拔けのせざる人也。其人や、唯間に合ふ人也、常人以上にあらず。其文や、勸工場物也、床の間におくべき品柄にはあらざる也。

△德富蘇峯氏

宮崎湖處子

德富蘇峯氏に就いて余の見る所は、氏恒に自ら言へるごとく、自個の天分を識れることに候。自個を識るは、同時に社會を識ることに候。孫子の謂はゆる彼を知り己を知れは百戰して百勝すとある如く、由來蘇峯氏の規畫したる事業に失敗なきは、此の自他を見るの明に基くものと存候。而して又同時に其の意志の强靭と、精力の無盡藏とが其の計畫を推行する動機に御座候。

然し如上は蘇峯氏の天分に屬して、他の學んで似るへからざるものなり。余が氏の品性として敬服に堪へざるもの、後進青年の模範として玆に稱道せんと欲す

るものは、第一、氏が固く其の獨自一己を保持せる事に候、蘇峯氏は未だ曾て他の秘書官となりたることなく、自個の意志に反して議論したる事なし。寧ろ他に聽くが如くして他を聽かしめ、自ら助くるが如くして他をして自個の意見を實行せしむる的の稍狡猾手段に出づる特技を有せる人なり。氏が多智毎々傍觀者の嫉視を受くるは、此の邊にあるかと存ぜられ候。彼又社會の矯激なる輿論に反對して穩健なる常識の見を主張して、往々不慮の禍を買ひ候へども、社會が表面己を憎んで、內心己の言を慶幸とせる情實を、十二分に看破したる彼は、微笑しつゝ其の禍を受け候一事、好個政治界の殉教者の模型、此の如きは彼以前に多く發見せられざるものなるべく候。余は此の如き殉教的政論家政治家の、吾が政海の救濟者として將來絕ゆるなからんことを希望して已まず候。彼が自個を放下して選擧界に鹿を逐ふを許さゞるも、自個を愛惜して衆愚と伍せざる覺悟なるべく候。其の他故友に厚きが如き、又個人的慈善を行ふことを好まざるも組織的慈善を賛成して石井十次氏の岡山孤兒院に年々寄附を怠らざるが如き、皆以て其人の特色を見るに足り候。社會が彼を嘲罵する時代は既に過ぎ去り候、彼が質實なる眞相は是より大に顯はるべく候。

△蘇峯先生の三特質

國民新聞の正直なる一社員

最近年に於ける國民新聞の變化は、實に非常急激と謂はねばならぬ。或人は改良したと云ひ、或人は改惡したとも云ふであらう。併し何れにしても進步と云ふ二字に歸着する。此の進步は誰に由りて指導せらるゝか、言ふ迄もなく社長にして且主筆たる蘇峰先生の力に依るのだ。蘇峰先生は社員の誰彼が發案に基つき、始めて左樣かと覺るが如き沒眼鈍根に非ず。何時にても大體の方針はチャンと自から極めて、衆社員を其處に導かるゝのである。併し自らは只大綱を持して一切の事は其の尤も挺んでたる鑑識力に由りて各擔當者に

一任せらるゝのである。故に各擔當者は皆乘氣になつて熱心其業に從ふのである。近來國民新聞に現はるゝ種々突飛な遣り方も、社長が示したる進一轉の方針に基つき、各擔當者の集合たる幹部が腦漿を絞りての仕事である。遣り過もあらう、餘りに世の風潮に媚る所もあらう。或人は蘇峰現今の位置は西郷南洲其儘だ、全く部下に擁せられて仕舞つた、と呟いて居る。併し吾々に言はせると其處が誠に慕はしい處だ。部下が相一致して奉承すると云ふのは現時の社會に得易からざる光景では無いか。己が本領の沒却せられざる限り、枝葉の事は、虫を殺して部下の爲すがまゝに一任するとは、亦餘程の鍛練を要する次第では無いか。併し如何に部下に擁せられても、南洲自らは些も其の忠臣たる赤誠を失はず、如何に風潮に乘じても、國民新聞は決して世の所謂惡德新聞たらず、是れ一に唯我が蘇峰先生の在る有るを以て也と。吾々の信仰は實に右の通りてある。

蘇峰先生に就ては、吾々は諸種の方面よりして仔細に觀察もし論評もして見たいが、併し今は其時で無い。木偶の聖人で無い限り、先生の短所も一や二は何時にても擧げ得らるゝが、併し今は其時で無い。吾々が今語らんと欲する所は、單に編輯局内に於て、日夕相接近しつゝ感得したる、先生の三特質に就てゞある。

一、吾々が先生に感服するのは、先生の氣餒へざる事也。氣の餒へるとか餒へぬとか何でも無いやうなれども、此は非常に活動に關係する。一寸文章を書いても、氣の餒へない人のは、活々して居る、道を步行いても活々して居るが、氣の餒へた人は之に反する。況や險複雜なる社會に處して、誤解やら嫉忌やら攻撃やら若くは追從やらで圍繞せらるゝに於ては、忽ち氣が餒へて仕舞ふ。竟には神經衰弱とまで成つて仕舞ふ。處が蘇峰先生に於ては永の年月間、神經衰弱抔は藥にしたくも無く、其原因たるべき氣餒ゆる抔いふ容子は見た事が無い。此れ先生が紛糾せる諸種の問題に對し、每に直截明快なる解決を與へて、毫も疚しき所なく、綽々然として心地に餘裕の存する所以である。孟子に

も「以」直養」とか有つて、此はドーも一朝一夕の故で無く、全く嚴家庭に於けりし素養に基くものと謂はねばならぬ。

二、先生は最も世界の大勢に通ぜり。先生が經世的新聞記者として一頭地を抽く所以、全く之に在りと謂はねばならぬ。英國の政界を審かにすると、猶ほ吾日本の政界に於けると異ならず。例へばキャメルバンナーマンの死去に際して、其經歴を記するに、宛かも發に物を探るが如く、唯だ自己の記憶を基礎として、遂に廿八回の長きに及べるが如き、單に內國を以て天地と做し、若くは一時利いた風なとを言ふものゝ迚も夢想する所では無い。其他、米國の事、獨逸、佛蘭西の事、若くは露西亞の事、皆然りて。殊に感ず可きは、其の國交的、若くは國家的問題に對して、如何に論じ如何に言ふ可きか、決して其の正僞を誤らず、又必ず其の時と場合とを間違へざるに在り。是蓋し先生が心常に天下の大に存ずる所以てあらう。

三、辭令に富める事。辭令に富むとて、必ずしも文章の巧なるを意味せず、又必ずしも巧言令色を意味せず。則ち其言ふところ、時と場合と事柄とに最も能く當嵌るもの、其一也。一句にして數十言の意味を包ね平實にして而も深博なるもの、其二也。反語の能く人を聳動するもの、其三也。激語尙ほ其渾厚の氣を失はざるもの、其四也。文章は誰ても書く、演說は誰でもする、應對は毎日の事である。併し以上の件々を具へて識者を首肯せしむるは、迚も五年や十年の修業ては可かぬ。吾々は此點に於ても著るしく蘇峰先生に感服する。先生は最も論語を愛好せらるゝ、輓近に及んで益々甚しい。此には餘程面白き默契があると思ふ。吾々でさへ、世間に論語ほど言葉に富んだ本は無いと思ふ、讀めば讀む程、其妙を感得するのである。言葉に富んだ蘇峰先生が論語を愛好し、論語を愛好する蘇峰先生が彌益々辭令の妙を極めらるゝは偶然で有るまい。併し吾々は單に先生の言語文字の上にのみ之を認めては居ない。

△德富蘇峯

黑頭巾

其一

●蘇峯は、新聞經營者としては、一種侮る可らざる營業の才を有す。最近國民新聞の躍起運動に徵しても明らか也。

●現時の青年は「國民之友」の名を記憶する者は多からざべし、蘇峯が平民主義は既に舊夢となりぬ。彼は御用新聞の味を覺えしより、又た此外に理想あること無し。

●彼は桂內閣の御用新聞として、內閣の斃るゝと共に、讀者の暴減するといふ苦るしき經驗を嘗めたれば、輓近は則ち、前內閣派の復活に先だち、豫め御用新聞の發展を計畫し以て他日の暴減に備へつゝあるなり。

●國民新聞が頗る多數の三面記者を增聘し、頗る多數の無代紙を散じて、紙面の發展、讀者の吸收を計りつゝも、其の多額の計費の爲めに、新聞は毫も利益無きに係らず、蘇峯は依然として蓄財の歩を進めつゝあるは、彼が經營の妙手腕の存する處也。

●國民新聞が、下宿屋征伐以後、著るしく、猥雜なる三面記事を多く載するに至れるは、世人の一般に認むる所也。蓋し蘇峯は市井の人氣に投ぜん爲めに、此の陋手段に出づるなるべし。

●當年國民新聞は學生教員の好伴侶たりき。今は下宿屋、斬髮屋、湯屋の店頭を飾るといふ。蓋し日比谷事件の惡夢は、蘇峯の忘るゝ能はざる所なる乎。

●既に機關新聞として、坐して利益を收めながら、尙ほ一面に、成るべく紙數を增して自己の嚢中を肥やさんとす、是れ蘇峯の慾張りたる所以ならずんばならず。

●此點に於ては、蘇峯と加藤高明とは全然其の人格を異にせり。加藤は東京日々の社主也。彼は、岩崎なる大外戚を有しながら、多く御無心を言ふを屑しとせず。紙數の增加を望まざるに非らず、然れども思切つて新聞を卑俗にするを得ず。主義の楯に據つて、品格

の殘壘を保ちつゝあり。

◉蘇峰は則ち殆んど爲さゞる所無し。尤も素破抜きを以て目されたる、當年の萬朝、二六等よりも、輓近の「國民」は更に卑猥を極むるものなり。

◉彼は、他新聞の好處をば無遠慮に模倣す、其の手段露骨を極む。彼が人格の利に急なるを見るに難からず。

◉去夏八月、高等學校受驗及第者の官報紙上に發表さるゝや、即日、彼は、東京市内の湯屋床屋に廣告して曰く、及第者の名簿は國民新聞獨り之を掲載すと。

◉彼は廣告に趣味を有し、去年の如きは懸賞意匠を募集するなど、此の方面にも一機軸を出さんとするものゝ如し。蓋し新聞家中の廣告家、大阪毎日の本山彥一は蘇峯の心頭に、つねに往來する名なるべし。而して、如上の拙速廣告は、本山を學んで、失敗せるものならずんばあらず。

◉數年前、國民新聞の廣告料は、都下の新聞中、殆んど最低位にあり。東京日々に代りて御用新聞となるの後ち、廣告料頓に二倍以上に暴騰す。彼が廣告の趣味は此時に急進せり。

◉吾輩が、國民新聞の成敗を以て、一に彼を責むるは、彼が一身は、國民新聞の、すべてを總管し、關係すればなり。

◉彼は社主、主筆、事務長より、飜譯係書記の微に至るまで、殆んど一身を以て之を兼ぬるといふも可也。彼の所在は、則ち國民新聞社の所在也。

◉蘇峯が國民新聞社にあるは、恰も、古の佛書を見るの感無くんばあらず。彼は實に彌陀如來也。ひとり高大にして、其の他の衆人は極めて小さく、彼を巡りて羅拜す。

◉國民新聞には寄書家あり、記者無し。記者ありと雖も、器械的に働くのみ。國民新聞の記者は蘇峯一人にして、其他は悉く助手也といふを妨げず。

◉佛書的なるに於て、蘇峰は、島田沼南の東京毎日に於けると好一對也。然れども「毎日」の紙數増さずして、「國民」の増加するは、二人者の人格の相違に本づ

く。

◉沼南は苦境に立ちて、一貫せる主義を保持し、蘇峯は、然らず。沼南の頭腦は蘇峯よりも遙かに明晰にして論理的也、然れども方便苟合の才を缺き、七重の膝を八重に折ることを能くせず。

◉加藤高明も亦一騎打の大選手として、前二人者と髣髴たるところあり。然れども加藤、島田の二人者は、新聞經營者としては餘りに無性也。

◉蘇峰は其經營に於ける、實に精悍にして勤勉なりといふを妨げず。彼は、あらゆる方面に交際し活動し。新聞の材料を拾集し、新聞の批評を聞き、其間には原稿を書き、早朝より夜に至る迄、寸時も油斷無く、自己の新聞の爲に盡す。蓋し又た尋常人の及ばざるところ也。

其二

◉蘇峯が成功の要素は、其の勤勉と及び趣味の廣博なるにあり。彼の頭腦は精深ならず、然れども一種奇警なる觀察力を有す。

◉彼の文章が青年學生に歡迎されたるは、其の趣味にあり。彼の文章は、政治經濟を記するに至るまで、人に面白く讀まる。

◉彼は人情を寫し、山水を寫すに至つては、其の弟、蘆花に及ばず。然れども彼、特地に妙處あり。彼は元老大官の前に、骨董を品隲し、清新なる浮世噺を試むるの趣味を有す。

◉彼の才は八面玲瓏といふも亦妨げず。彼は青年を捕捉すると共に、老人を籠絡す。多數者の會合に、元氣能く、寄らず障らずの面白ろき話を續發して席上を賑はし上客を挑發して口を開かしめ、其間に自ら新聞種を探るは彼蘇峰の得意の舞臺ならずんばあらず。

◉蘇峯は、口を極めて其の亡叔横井小楠を大識見家也と吹聽す。小楠は文章の士也。其の雄渾莊重の氣象あるは、蘇峯の遠く及ばざる處、然れども其の才は蘇峯に若かず。

◉彼は阿蘇山下の人なるを以て蘇峯と號す。然れども阿蘇山下の文章家は、故井上梧陰を推さゞるを得ず。

●梧陰の文章、品格あり識量あり。若し其の自筆の書簡或は原稿に至つては、其の筆、見事にして品高く、自ら人をして、尊敬の念を起さしむ。

●蓋し梧陰は自ら臺閣の氣象あり。而して忠誠廉直。眞に吾國の陸宜公也。蘇峯を以て、彼に比すれば、地下人たるを免れず、其の文も亦然り。

●蘇峯は近代の肥後に於ける一人材たるを失はず、然れども故郷青年の崇拜の中心とはなるを得ず。近時肥後青年の崇拜する人物は、彼の梧陰也。

●聞說、先年政黨內閣の當時、蘇峯が拔擢されて、勅任參與官となるや、恭謙以て屬官に下り、稍人心を得たりと。彼や翩々たる勅參の適材なり。

●黑岩淚香の文は磨き上げたる匕首の如く、辛辣の氣を見る。蘇峯の甘口なると好箇の對照たり。

●吾曹は、未だ池邊鐵崑崙を識らず、然れども、其の文を讀みて思ふに、其人宏寛にして人を容るゝの雅懷あるが如し。

●鐵崑崙と蘇峯とは、今や肥後出身の二大記者にして共に東都に馳聘す。而して朝日の紙上は何と無く餘裕あり、國民には何と無く切迫の氣あり。二人者の人格の反映也。

●海老名彈正は熱烈に、蘇峯は穩健に、二者其曲を異にすれども、共に青年の弱處を衝くことに妙を得る。松村介石に至つては則ち粗放に失す。

●蘇峯の配下より出でゝ名あるの記者、竹越三叉あり、山路愛山あり。一種の讀書眼を有し、立言の奇矯なるは、蘇峯は愛山に若かず。三叉は則ち蘇峯に似て淺薄也。

●別に古谷久綱あり、好箇の秘書官也。公伊藤に寵用されて統監府にあり。蘇峯は之が爲に便宜を得ること尠からず。

●蘇峯の文章にありて、尤も見るべきは、「東京だより」にあり。然れども近來彼過度繁忙の結果、漸く粗放に流るゝの傾あり。惜まざる可んや。

其　三

●若し蘇峯をして嘗て御用記者たらざらしめば、彼

が蓋棺の定論は或は頗る好評なりしならん。

●吾輩を以て見れば、文士としての蘇峯は明治の文學史に一箇不朽の位置を有するなるべし。御用記者としては、殆んど何等出色あるを認めず。

●御用記者たらん者は、内閣全權委員として、樽俎に折衝するの覺悟あるを要す。

●此點に於て、蘇峯の政治的論説は頗る平凡なるを免れず。彼が政府の爲に辯護するの口調は、徹頭徹尾申開き的也。

●蘇峯は才子也。而して守るは攻る也の理法を解せざるは何ぞ乎。彼は文章の才ありと雖も御用記者の適材に非る也。

●氣魄敵手を壓倒するに足らずば。聲容の以て同情を贏ち得るもの無かる可らず。彼や此二者共に缺く。而して徒らに辭令の末に苦心す。其の千百言を連ねて、遂に何等の効果無き所以ならずんばあらず。

●彼が辯護の文は、恰も生意氣なる手代が主家の爲に使するが如き乎。其の怜悧にして流暢なる辭令、空しく叩頭して一場を胡塗するに過ぎず。

●彼は、國家老が堂々として一國を代表するの確然たる態度を有せず。終始、敵の氣息を窺つて守勢に立つが故に、萬一彼をして國際談判に參加せしめんか、彼が大屈辱を得來らんことを疑はず。

●御用記者としての政治的論説に現はれたる蘇峯は蓋し此の如し。彼は才餘ありて氣足らず、辭巧にして誠少し。

●蘇峯を以て試みに彼以前の御用記者と比較せよ。之を櫻痴居士に對すれば、滑脱の才遙かに及ばず。櫻痴は垢拔けし、蘇峯は田臭を帶ぶ。

●朝比奈知泉は術數あり、光燄あり、御用記者としての文章、蓋し明治第一也。此一點を以てすれば蘇峯は知泉の脚下に伏すべきものたり。

●吾輩敢て言を誇大にするに非ず。東京日々に於ける當年苦戰の内閣御用論説と、國民紙上に於ける桂内閣の御用論説とを對照し來らば、則ち事實明白也。

●然れども、櫻痴、知泉の二人者の横着なるに比較

すれば蘇峯は頗る正直なりといふを妨げず。

◉櫻痴の幕府衰亡論或は幕末政治家を著はすや、筆路暢達、痒ゆき處に手の屆くの感あり。而して、然かあり度しと思はるゝ箇所に、恰好の文書を挿入す。

◉故に櫻痴の著書は、一讀釋然として情を得る。其の實、彼の幕末史談は、頗る眉に唾して聽くべきもの無くんばあらざる也。

◉博士三上參次、當時、衰亡論を讀み、特に、櫻痴を日報社に訪ひて、某文書の出處を問ふ、櫻痴極めて不得要領の答を爲すを以て、彼の揑造に係ること殆んど掩ふ可らず。蘇峯や則ち未だ這般の老猾手段を爲さず。

◉其の餘、盛んに內閣の爲に辯護の筆を執りし者、末松靑萍、井上梧陰、金子溪水、伊東巳代治、穗積八束の如きあり。梧陰は暫らく措き、穗積の如きは、堂々たる大手筆。其の莊重にして雄健なる文章は恰も彼の帝國憲法の講義と同調にして、彼が筆を御用紙上に絕つの後、また此の如き有力なる御用記者を見出さず。

◉蘇峯は如上の數人者に伍して、御用記者としては、更に一箇の妙處あるを見ず。前內閣の一難件たる旭川師團事件に對する辯明は、之を證して餘ある也。

◉先般、國民紙上に、政友會の內幕を暴露する一頁に亘るの長文の記事を揭げて、大岡育造の私行を彈劾し、大岡對長谷場純孝の惡感を刺激して、以て政友會幹部の離間を試みたるの一事は、前內閣派の機關紙として、稍權略あるの事に屬す。

◉長谷場と大岡とは、大猿も啻ならざる仲也。されば如上の消息は、蘇峰が海東侯を通じて長谷場より探知せるものなるべく、近來の上出來なるべし。

◉蘇峯は此種の小刀細工は中々巧み也、先年、東京日々の近時片々の一句を抉出して、井上、松方二老を刺戟し、以て伊東巳代治を排斥し得たるは、世人の知る所也。

◉現內閣派の機關としては、先きに東京日々ありて、蘇峯の從兄、橫井時雄主筆たり、彼や無事平穩の好人物也。

◉現下、東京には大岡育造の中央新聞と、大阪に原敬の黒幕たる大阪新報とあり。後者は、朝日毎日二大新聞の間に介在して、未だ言ふに足るものあらず。

◉大阪新報の主幹たる山田敬德は領事の出身にして、學才あり。原敬と姻戚の關係を有す。主筆高橋光威は既に官任して原の秘書官たり。

◉原敬は、嘗て大阪毎日の社長たりし關係あれども、彼の後任社長たりし小松原英太郎今は同社に顧問たるを以て之を原敬の繩張に引込むを得ず。

◉されば現下唯一の政友會機關紙は中央也。中央は一時は振ひしこともあれど、近年兎角捗々しからず。現在主筆原田秋水はつねに内閣に出入して、御用論説を鼓吹しつゝあり。

◉秋水は蒲柳の質、而して稜々氣骨を以て自ら許し、頗る圭角多かりしが、近來稍圓熟して忠實に御用記者を力めつゝあり。將來造詣あらん。

◉秋水は日々、社説を起草するの外、飜譯を手傳ひ且つ編輯の監督を爲す。職務頗る多端を極む。

◉蓋し御用記者は、重要なる機關也。此の如く、之を驅使す可らず、宜しく修養の閑日月を與へ、其頭腦を練らしむべし。

◉蘇峰は自ら好んで八人藝を演ずるをつねとす。前内閣のとき、彼は毎朝、春畝公の官邸に伺候し、而して油斷無く各元老を歴訪するの外、社説を草し東京だよりを書き、其外、時々記事をも書き、編輯の監督をも爲す。胸中忙殺されて寸暇無し、其の大文章の出來ざるも故無きにあらず。

◉公伊藤は、つねに栢陰知泉を思出して、晩近御用記者の適材無きを嘆ず。蘇峰は頗る親近すと雖も、公の明、よく蘇峰の伎倆を洞看し、更に敬意を拂はず。而して蘇峰は厚重なる公山縣に接近するには、其の人格餘りに闘々たる也。

◉吾輩を以て見れば、蘇峰が松方桂二侯を選びて、捕捉し得たるは、流石に自ら識るの明なるものと謂ふ可き也。

其四

◉國民新聞社の玄關より應接室に至るまで、伊藤山縣始め諸元老名家の筆蹟を陳列せるは、新聞社中の一異觀にして、又以て蘇峰の立脚地を示すものといふべし。

◉聞說、蘇峯は社員に對して、勤勉と貯蓄の二條を以て、嚴に督勵しつゝありと。此一事も亦た、彼自ら其の成功の歷史を語るものといふべし。

◉文士にして新聞經營に成功せる者は、蘇峰と淚香とあるのみ。而して淚香は術あり略あり、萬朝の當れるも、頗る華々しきものあり、蘇峰は寧ろ勤勉と貯蓄とに依て贏ち得たるもの也。

◉蘇峰は存外に能辯にして、殊に食卓の談話を得意とするに似たり。蓋し食卓は才人の壇場也。

◉慾を言へば、彼の談ずるや左顧右眄、餘りに忙がはしく、而して自己を發揮するに過ぐ。若し、一歩下りて、恭遜溫藉の態度を執らば、則ち彼の德を養ひ福を積む所以ならん。

◉蘇峰が快活にして精悍、頭髮すでに半白にして、氣分頗る若々しく、更に疲倦を知らざるは、彼の慈親の健在なるに由るならん。

●風樹の憾、古來、人の子を泣かしむ。近來春畝公あり。身は匹夫より起つて首相たるの時、雙堂猶ほ健在、實に古來稀有の幸福人也。

◉文壇に在つては則ち蘇峰あり。彼や、「將來の日本」「新日本の青年」を懷ろにして飄然帝都に來りしより、今日の成功に至るまで、慈親猶ほ健在。蓋し文壇容易に見る可らざるの福事也。蘇峰は明治の果報者たる也。

◉然れども、蘇峰の慈親八十の高齡に及びて猶ほ健在なるは、年來彼が孝養能く其心を安んずるの致す所、亦た尠しとせざるべし。吾輩は此點に於て、蘇峰を推賞するを惜まざる也。

（完結）

江戸文藝の滑稽

醒雪

近世の眞面目な文藝は、主として元祿期の上方の所

産である、江戸のもので見るに足るものは、先は滑稽てあると云つてよからう。

蜀山人が初めて大阪へ上つた時に、江戸の宅へ送つた手紙に左の文句がある。

旅館へ歸り候へば、門庭閑として雜賓なし、茗を烹、梧に據り、或は書を抄し、或は詩を賦し、仙境に入候心地いたし候、第一水土甚だ美、人物驕奢、都下の如き、せはしき風に無御座候。……市中の人日傭取まで古雅に御座候。皆々朝寢、午時より未時までは、市人といへども一度づゝ居寢なり。夜談を好み、米價は一升五十六文より九十文位まで故、市人暮しよく、女の風俗重ねて可申上候、餘程面白き事に候、被衣(かつぎ)を着候形など、小原女の體など金屛風の如し。二千年來の化には感じ入候。匆々。

町人いづれも人柄よく候、此方體の家來、御普請役などの家來どもの其樣賤しく、氣の毒なる位なり。憮々(江戸者は)わるぜはしく下卑たることゝさげすみ居り可申と恥入候。

江戸と上方との交通は頗る頻繁で、三度飛脚が月に六度とまで進んで來ても、この風俗は未だなか〳〵一致しない。これは享和のことであるが、さらに溯つて貞享元祿といへば、江戸は更に殺風景な土地であつたに相違ない。暮し易い上方に比しては氣が早い、しんみりとした長閑な優美なものを味ふだけの餘裕がないから、自然殺伐な、荒々しいものが歡ばれる、錫杖を振り廻して、操人形の首を打ち壞すといふ樣な荒々しい櫻井丹波の淨瑠璃、公平の化物退治といふ風のものが、最も歡迎せられる。その時には、上方では既に井上播磨や宇治加賀の頗る優艶な調子が行はれてゐたのである。さらに芝居から見ても、上方では傾城買の寫實が流行して、歌舞伎の異名を島原と唱へてゐた程である、從つて名優には和事に於て古今獨歩といふ坂田藤十郎が出る、續いては女方の芳川あやめ、水市辰之助などが輩出する。然るに、江戸では、金平人形から思ひついて、奇怪千萬な隈取をした團十郎の荒事、傳九郎の鎌髭奴といふ種類のものが、最も人氣に適つた。上方

はどうかするとセンチメンタルになる、江戸は常にセンセイショナルに流れる。

ところがセンセイショナルなものは誇張的な粗大な調子であるから、自然滑稽的の分子を含ませることが容易く出來る。實際上、市川家の荒事といふものは、殺伐粗大な調子と、殆んど無意味な駄洒落とを混じたものである。

一體引つかけ詞や地口輕口の類を歡ぶのは、日本人の天性で、上方に發達した所謂る歌道の修辭は、總てこれで出來てゐる。しかし、金屏風の樣な大原女の國では、その弄語をも優艶なものとして取り扱つたが、東夷と成り上り者とのお江戸では、その洒落が頗る卑俗な露骨なものでなくては通用しなかつた。朝比奈三郎が素襖大紋で例の關東べイのモサ詞、下らない駄洒落を並べる、その極めて不調和な千萬な滑稽が、看客の粗大な趣味に適したのである。賴家公が惡人どもに責められて讓り狀の判をしようとするところへ關東小六重安の團十郎が「暫く」て驅け附けて來ながら、先づ優々と見物へ顏見世の口上を述べる。惡人どもは、又「暫々」と止めて、「ハテ世話しない奴等だ、皆樣へ口上をいふうち、待てといふに」と白眼んだところが、日本一の役者といふ大評判であつた。二代目が眞田與市の役の時には、切落しの見物の中から、三升の手拭を被つた者が大勢、三升樣當りましたと手を打つと、中から淺黃帽子を被つた女が、團十樣當りましたと云つて舞臺へ上る。狂言の邪魔だと云つて留場の制するのも聞かないで、與市の側へ行つて、纒頭に出す物があると云ひつゝ指を切る。これが實は役者で、これから眞實の狂言になるのである。芝居を演じてゐるのか、茶番狂言か判らない樣な滑稽で、殆んど見物を馬鹿にしたものであるが、それで以つて大向ふは呻つてゐたのである。今日でも名題の披露に、こんな風の趣向が殘つてゐるが、甚だくだらないことだ。だがこれでなくては見物が面白がらない、だから、元祿頃から盛に行はれ來つた狂言の筋書や長唄には、皆この公私混合が、實

に盛に行はれてゐる。例へば「正札附根元草摺引」の文句にも、「髭が例しの力瘤落しやせぬかと撫で廻し」と謠ふのは、傳九郎といふ役者が、有名な附髭を落しやせぬかと駄洒落たので、「後代無二の評判は、東に並ぶ二見潟、移して茲に神風や、惠も深く若者と」といふ文句は、曾我五郎朝比奈十郎のことではなくて、團十郎と傳九郎との讃詞である。

更に甚しくなると、歌右衞門の「舌出し三番」の樣に、「ほんに鵜の眞似鴉飛び、とつぱひとへに有り難き、花のお江戸の御贔負を頭に重き立烏帽子、さつぱもおのが故郷へ、錦と着なすおとり立て、おこがましくも五年の、今日ぞ名殘に候ぞや」といふ風で、全く三番叟でも何でもない、唯の歌右衞門の御名殘口上である。武勇の神を表すとかいふ秘肯を稱へながら、「直にも歸りお目見えを、又こそ願ふ種蒔や」といふに至つては、甚しい滑稽だ。然しその滑稽が歡ばれたのである。

この公私混合は、黄表紙にも頗る多い。京傳は常に自分の商買物の廣告を、作中の人の口を借りて叙する、馬琴も京傳の爲に「曲亭一流京傳張」を作つて、その商品の煙管と煙草入との効能を述べ立てゝゐる。且つその縮組の中にも「妾は何の用事もないが、女が居ないと寂しいから、一寸顏を出した」と、云つて小説の本文には無關係な美人が挿畫の中に出てゐる。頭から讀者や見物を愚弄してゐる樣な態度で、敬虔といふ樣な考は毫もないのである。

所謂る「つらね」には、ことに甚しいものが多い。「外郎賣」の阿房陀羅經的の輕口早口、「五人男」の染物盡しや、安の字盡しの怪氣焰、さては景淸の娘人丸姫が役者盡しの地口などは實に振つてゐる、實に呆れかいる。かうなると、もう自然不自然などの理窟を通りぬけて、寧ろ無邪氣な滑稽に類するのであらう。

先夜浪華節といふものを聞いたが、その御目見えの口上から、引つかけ詞か何かで、講演の本文に流れ込むと、常に大喝采である。浪華節の定連と、元祿から天明ころまでの江戸趣味とは、やゝ程度が近いものと思はれる。浪華節や大阪俄が上方に發生した所を見る

と、上方にも同樣の駄洒落がないてはないが、それらは、極々下等なもの下品なものとして斥けられてゐたので、同じ謠ふものでも、上方唄の中には杵屋ものゝ樣な惡巫山戯は全く見えてゐない。

ところが、江戸ではかゝる滑稽が流行した結果、地口や口合の一つも云へない男は、青年の交際も出來ないといふ有樣となつた。つまり洒落を吐くことが、江戸つ兒としてのカルチュアと信じられるに至つた。川柳や雜俳の流行、ついては狂歌や黃表紙の全盛、皆この結果である。

江戸はいはゞまだ半開地である。人事の滑稽は勿論夥しい、加ふるに參覲交代の制度は年ごとに巨萬の淺黃裏を江戸に送る、これが實に好箇滑稽家の題材であつた、のみならず。これ等の田舍漢には、全く通じない洒落の應答、即ち地に口合を吐くことや、或はそれを容易く理解することを、江戸兒特有の技倆として、大に誇つたものである。こゝに洒落者といふことは、江戸的の教養あるものといふ意味を有つやうにもなつたのである。山東京傳が幼時讀書を好まないで、唯洒落ばかりに心を盡してゐたといふのが即ちこの教養のことで、其人が生長して最も洒落本に妙を得てゐたのである。まづ云はゞ太鼓持の雛つ子の樣な若者が、所謂る江戸つ兒の生粹で、

主人頓太郎「そこだて、口上茶番なら、口上て案じありだが、人が立つ氣なら、おれも立つ氣だが、立つ氣も知らぬ山中に、己獨りトンハツタリはをかしい。‥‥‥‥友人三太郎「お千さん只今お髮かえ、女房お千「三さんお出かえ、旦那え火燵に火は御座りますかネ。頓「よし〳〵火あり〳〵お火あり火あり三ぼうあたらつせい。三「けふはべらぼうに寒い日だ。‥‥‥この三太郎なんぞは三太郎樣ぢや、奧通り御免の男だネ。頓「公の樣なぶ男、とんと安心だ。女房「私が羨しいので内で案じるのさ。三「畜類寒玉子、ふわ〳〵のおむつま山吹ほうちん丹、畜生め〳〵。‥‥火傷をした、おらもう洒落れねえ〳〵。色男の洒落るの見にくいものだなうお架。

といふ調子が普通の會話であつて。前題の團十郎の洒落などは、まだ〳〵重くろしい方で、極めて輕快な、上づゝたもので、この趣味の上に立つた文藝に、樂實とか沈痛とかいふことは固より望むべき限ではない。輕薄といへば輕薄でもあらうが、しかも、その無邪氣な、樂天的な、特殊の趣味の掬すべきものがないではない。譬へば、元祿は濃艶な八重櫻の盛りの樣で、安永天明の江戸文藝は、且つ散りて且つ流れるといふ一重山吹の風情がある。近松や西鶴は結構なお會席である、喜三次や春町や三和や京傳は、湯豆腐か新漬であらう。

ハイカラ社會には、層一層濃艶なアネモネやチユリツプが愛せられる、こつてりとした脂肪臭いお料理が流行する。文藝社會にもこれに酷似した傾向が歴々として見えてゐる。この時この際、香の物のお茶漬といふ淡泊な趣味をも忘れない人は、安永天明の滑稽に意想外な妙味を感ずることが出來ようと思ふ。

白河樂翁公と書籍

德富蘇峯

白河樂翁公が東京の市政に關係のあつた事を紀念する爲めに此頃お祭のやうなものがあつて、諸先生がいろ〳〵公に關する談話をされた。私も序であるから樂翁公と書籍といふやうな事について一口譚をしようと思ふ。

樂翁公は非常な讀書家であつた。讀書は德川家累代の嗜みて、德川家の創業者たる家康は戰國の英雄中に於て最も多くの讀書家といふ事は出來ないが、最も實用的の讀書家であつた。自分が書物を讀む事を愛するのみならず、書物其物を最も愛して居つた。自分の相續者たる秀忠に主もなる贈物としては書物を送つた。自分の蓄へた明版(ミンバン)などの書物を送つた。又自分の最後の事業は實に群書治要の出版であつた。其血統を享けて居る樂翁公は德川の一門の田安家から出て松平家を繼いだ人だ。其人の血管には矢張り家康其他の血が交

つて居る。樂翁公の殘された最も主もなる事業の一つは集古十種の出版である。これは樂翁公が當時の第一流の畫工谷文晁をパトロナイズして、其天下の要路に居た位置を利用して集められたものである。今日でも其の版木は松平家にそつくり殘つて居る。又他の主もなる一つは賴襄の日本外史を世の中に公けにする緒口を開いてやつた事である。實は樂翁公があの書物の出來た事を聞きつけて取り寄せなければ、折角賴襄が心血を濺いて作つた本も、持た寶の持腐れとなつたかも知れぬ。一度あの人の手を經たから天下免許の書物となつて出版することが出來た。さういふ事を數ふればそれに盡きぬけれどもが、如何に樂翁公が其方面にインテレストが廣くあり且つ切なりしかと分る。で樂翁公の御老中であつた時代は僅かに五年だが、其の五年の間に殆んど德川氏の紀綱が弛んで幕府の勢力が地に墮ちんとしたのを挽回した。寛政の政は詮じ來れば八代將軍吉宗公の盛時に復したのである。が然し樂翁公の政治的生涯は五年で終つた譯ではない。其後にも續いた、恰度今日の元老といふ風で、至高顧問の位置に立つて居た。あの人の建白、若くは評議、若くは相談等の事は歷史の上に分つて居らぬ事の上にも極めて多かつたであらうと想像すべき理由がある。

けれどもさういふ事は今論ずべき所ではないが、讀書の方面、又書籍の方面に於て、樂翁公の力を致された事は純粹の讀書生以上といつてもよからうと思ふ。私が持て居る書物の中に明紀綱目といふ本がある。此表紙の上に書いてある標題の文字も樂翁公が書かれたのである。此本にはいくつも印があるが、其中に白河文庫、桑名文庫といふ印がある。此の書物には朱で句讀を附して且つ處々に批評がある。其批評も公の直筆で自分で書き入れしてある。例へば更定ニ官制一といふ處――それは當時方孝孺等の議を用ひて官制

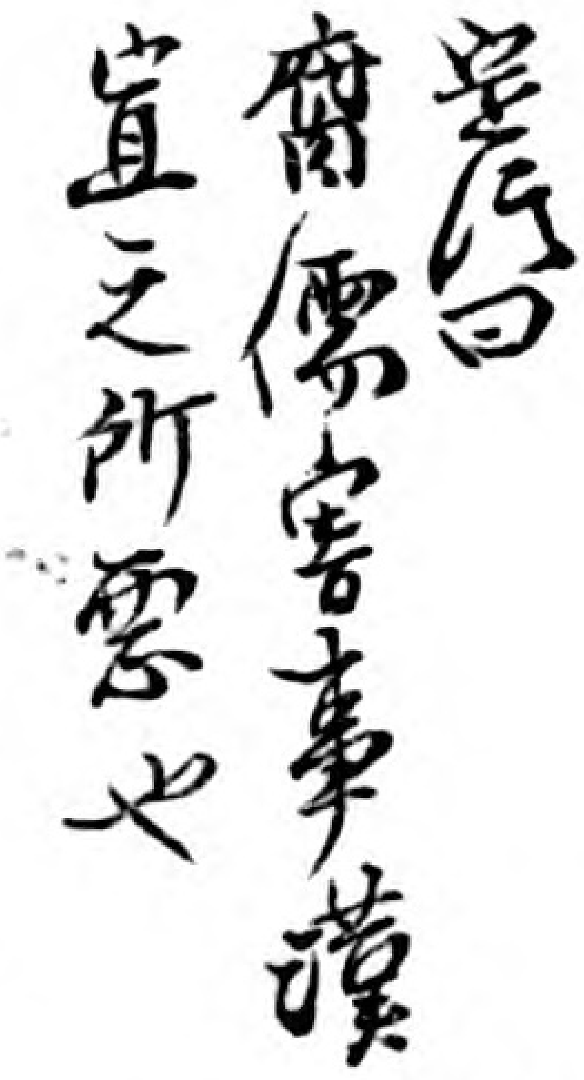


(明紀綱目の卷頭に捺したる印)



（明紀綱目の卷頭に捺したる印）

改革を行つた條——に定信曰腐儒害事、漢宜之所惡也とあつて餘程方孝孺や何かに不服てあつたと見える此書は尤も壯年の時に讀まれた本らしく



（明紀綱目評言）

（樂翁公眞蹟
字原形の儘）

思はるゝが、あの人は寛政の學制を定めて、寛政の三博士——栗山、精里、二洲の三人——を拔擢して朱子學を以て官學となした。さういふ人てあつて、朱子學派の方孝孺などを腐儒などゝいふ所を見れば所謂「尋句摘」章の人と違ふ事が分る。又私の持て居る中に虛堂錄といふ本がある。これば宋版て、もと一休和尚が持て居た本てある。其證據には一休和尚が自筆の印がある。「天下純藏司」といふ印がある。又一休の居られた「眞珠庵」といふ印がある。又「蟠桃院」といふ印もある。蟠桃院は妙心寺の塔頭(たつちゆう)てある。又「玄訥」といふ印がある。玄訥も天文頃の人て妙心寺の坊主てある。或時泥棒が來て、此坊主を創けた。外の奴等が官に訴へやうとしたが、此坊主は、之が己れの宿命てある。坊主はインヂクチブてあつてはいかんといふて其儘に死んだといふ高僧てある。樂翁公はどうして得られたものか知らぬが、此等の人の手を經て來た本を持て居られた、此書には「桑名」といふ印があり、又篦字にして「樂亭文庫」とある。此印は一休の印と同樣に樂翁公直筆の印てある。「白河文庫」の印の捺してない所を見ればこれは桑名に移てから、即ち御隱居をされてから得られたものと思ふ。樂翁公はこういふ佛書をも讀まれたのてある。此書には公以前の所有者の澤山の書入



虛堂錄卷頭の印

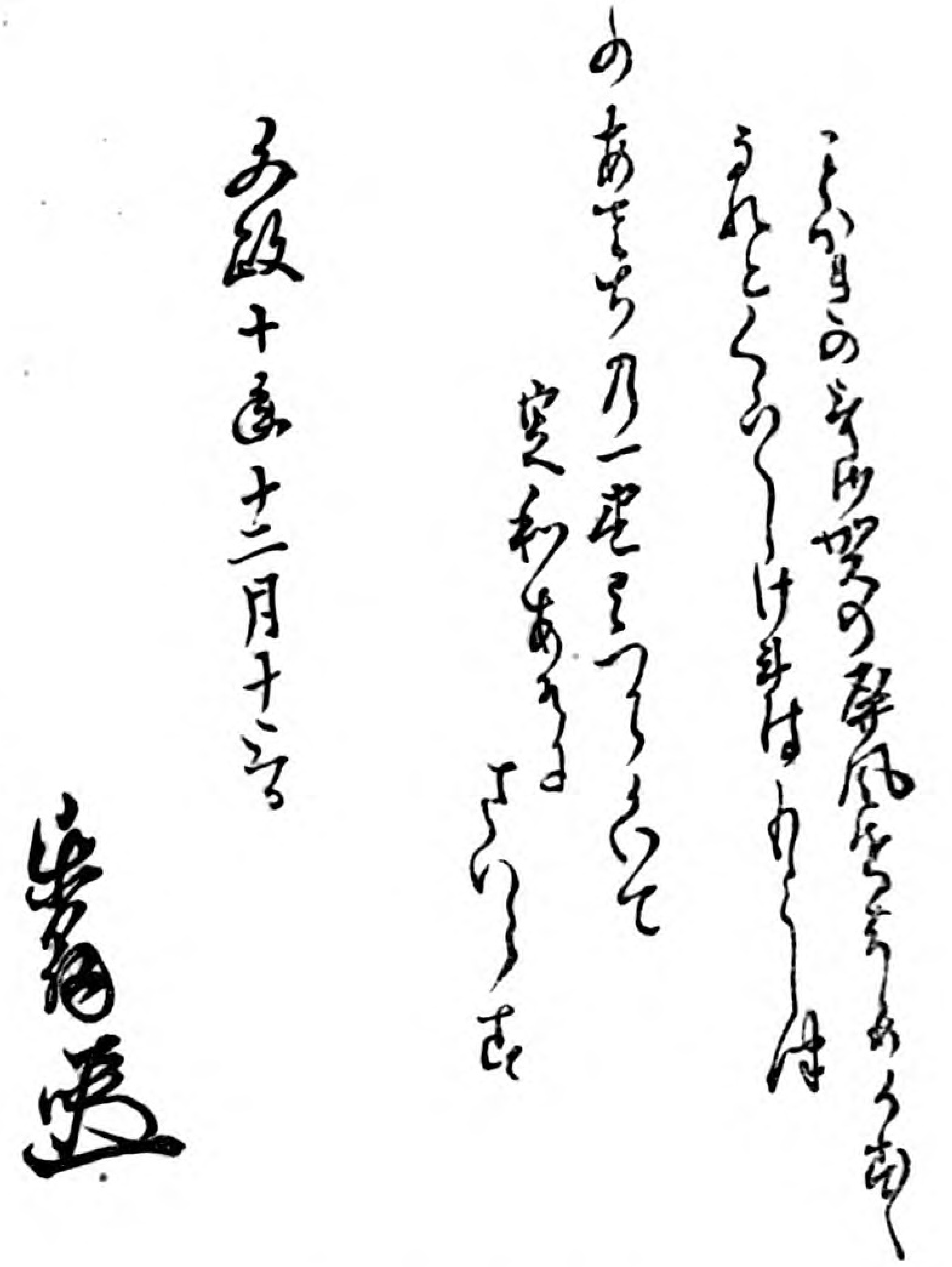

（盧堂錄卷頭の印但樂翁公眞蹟を彫刻したるもの）

れがあるか、公の書入れをせられる餘地がなくなつて居る。樂翁公のインテレストの廣い事はこれても多少證明せられる。

又樂翁公は馬鹿に根氣の強い人であつて、自分の著書が澤山あるが、其版下は自分で書いて居らるゝ、あの人の著書の中で最も面白いのは「花月草紙」で、樂翁公の「徒然草」といふべきものだが、此本は六卷ある。始めから終まで直筆で、始めの字も終りの字もちつとも變らぬ。全くステレオタイプのやうだ。それから殊に驚くべきは公の歌集「三草集」の版下である。小さな本であるが、文字は或處は今の五號活字の如く、或處は六號活字位の細かいのがある。それも始めから終まで直筆である。「三草集」は三卷あるが第一卷（よもぎの卷）は文政十年十一月十五日樂翁自ら書すとあり、第二卷（むぐらの卷）は文政十年十一月廿日あまり五日とあり、第三卷（あさぢの卷）は文政十


（花月草紙題簽）


（花月草紙初葉最初の二行字原形の儘）



(三草集之末葉字原形の儘)



(三草集及び花月草紙の巻末に捺したる藏版印)

年十二月十三日とある。餘程勉强されて書かれたものと見えるが、これは樂翁公の滿七十の時に書かれたものだ。眼鏡を掛けられたかどうか分らぬが、驚くべき事てある。公は七十二て文政十二年に死なれたから、死なるゝ二年前の事だ。精力の過絶なる以て知るべしてある。又松平家にはこういふ小さい文字て公の寫された「二十一代集」がある。此の本も矢張り直筆のまゝ桑名藏版の印がある、これて見てもどの位精力のあつた人かゞ分る。又樂翁公が文學の方に趣味の多くあつた人てあることが分る。それて、樂翁公が朱子學を以て官學とせられた事や何かは決して偏狹の思想てやられた譯てはない。所謂人心を統一する上て處士横議は面白くない、忠孝を主とする朱子學の方が國の治まりがよいといふので、經世家の立場から朱子學を官學と定められたので、自分は極めてオープンハートを以て總ての事に對したらしく思はるゝ。

最後に書物の話てはないが公がどの位オープンハートであつたかを證する一つの面白い話をしませう。熊本に境野嘉十郎、號を凌雲といふ學者があつた。此先生が、樂翁公が田安家に行かれた時にお給仕に出

た女を氣に入つて召使にされたといふ評判を聞いて、一國の賢宰相が女色にお迷ひになるやうではいかんといふので、隨分露骨なる手紙を公に送つた。尤も直接に送る譯には行かぬのだから公の御用人まで送つた。そうすると當分返事がなかつたが、稍々久しき中に御用人から返事があつた。誠に御忠告忝けない。主君に於ても最もなことと感ぜられ、早速女をさげられた。而し暫らく召使たのであるから、若し懷姙でもして居はしまいかと暫らく下屋敷に留め置かれたが、だん〳〵しらべれば其心配もないやうだからお下げになつた。誠に忝けなかつたとあつた。善に從ふ事流るゝが如しと迄はいかぬとも、誠に立派な人であつたらしく思ふ。其手紙の寫しは私が持て居るが、今は逗子の父の許に置いてあるから、今御覽に入れることが出來ぬが、確かな事であるからお話をしたのである。(完)



總選擧の結果

總選擧の結果は今や分明となれり。政友會は約百九十名の所屬代議士を得て、前回よりも十名內外を增加したるに反し、進步黨大同倶樂部猶興會は孰れも多少其の數を減じて、今や政界の分野は、自餘五十餘名の無所屬議員の向背に依りて決せんとす。此の際に當りて聊か所謂無所屬議員なるものゝ性質を究めんとするは必しも興味なき事にもあらざるべし。

去る十九日東京朝日は『總選擧結果』と題し、無所屬議員の著しき增加を述べて、さて云ふ

然れども此無所屬なるものが、今後いかに成行く可き乎は、未だ容易に判知す可からず。無所屬中には、知名の紳士の新選出もあり。其擧

識と其經驗とは、必ず其人をして其獨立獨行に終始せしめて、眞實の意味に於て無所屬たらしむるに相違なし。去れど此種の人々は多からざるなり。而して他の大半は、今後いづれの黨派に入ることゝなるや計る可からず。現に此前の選擧の時にも、即ち明治三十七年の選擧の時にも、當初は百十八人といふ多數の無所屬ありたりしに（其時の衆議院事務局の調にて）、それが次第に分れていづれかの政黨に入ることゝなり、然らざるは猶興會を組織して自ら一黨に類するものを立て、今春の最後に於て全く無所屬にて殘り居たるは、即ち前記の舊數十四人。其中にも、謂はゆる德島組の如きもの有り。實際に於ては、殆ど消滅し了り居たり。故に今度も大抵は前例に從ひ、それ〴〵に分屬するに至る可きなり。然らばいかに分屬す可き乎。こは今後の問題なり。政府黨にても反對諸政黨にても、共に今より無所屬中の或るものを我物顏して、隱に其黨籍に書き入れつゝあれども、これが存外『あて』にはならず。極少數なる特立獨行の眞の無所屬以外の謂はゆる無所屬は、いづれかといへば寧ろ形勢の觀望者たり、而して勢ひの盛んなる方に付く、即ち付きて有利なる方に付く。故に政府の勢ひ盛んなる事とも なれば、無論政府黨に入ることとならんが、然らざる場合には則ち政府反對黨に入ることゝなる可し。決して『あて』になるものには非ず。但聊か確と見らる可き事あり。そは無所屬の大數が、決して一處に固まりて一方の一黨に專屬するに至るまじき事、是也。必ず分屬するに相違なし。いづれに多く分屬するに至る可き乎が疑問なるのみ。

と、此れ恐らくは情勢に通じたる公正の見とも云ふべきならん。東京日々紙も亦た『無所屬議員の去就』中に

今回の總選擧に於ては無所屬議員五十餘名の當選を得たり。之を第九回總選擧當時の百十一名に比すれば恰も其半數に過ぎず。然も今回の五十餘名中には又前回の如く、當選後に於て政黨政派に加入すべき豫約を以て競爭場裏に立ちしもの亦少なからざるべきは勿論なり。現に其十三名は政友會に其十二名は憲政本黨に、其十四名は大同俱樂部に加入すべく期待せらるゝが故に、既に過半數は純然たる無所屬を以て目すべからざると共に、其餘も必しも眞に純無垢の無所屬とのみ見るべからず。隨て議會の形勢如何に依ては甲に黨し乙に加はり、眞に純無垢の無所屬議員として最後に至るまで孤壘に嬰守するものは極めて少數なるべきは吾曹の豫め看取せざるを得ざる所ならん。是れ前期總選擧に於て無所屬議員として當選せしものが約其半數を政友會に吸收せられ、其餘は或は猶興會を組織し、或は大同俱樂部に往き、第二十四議會開會當時に迨びては純然たる無所屬議員は纔に十一名を以て算するに至りたる近き經驗に基き、吾曹の爾く推測せざるを得ざるに因る。

と述べ、更らに

然れども吾曹は無所屬議員の進退去就が第二十五議會に於て朝野勝敗の岐るゝ關鍵に當るを思ふときは今に於て切に其去就を誤らざらんことを勸告せざるを得ず。

と云ひ、

總選擧の結果は各方面の調査一致を缺き未だ正確を期し得ざるも、政友會が恰も半數を得たるは爭ふべからざるに似たりと雖も、大同派は問題に依ては在野黨と步調を一にするを辭せざる歷史を有するが故に、必しも之を專門政府黨と見るべからざると共に現在の數を準として、大同派を在野黨に誘致し得たる場合を想像せば、無所屬議員の向背が勝敗の關鍵を握れる事實は之を推想するに難からざらん。是れ吾曹の輕々しく其進退を決せざらんことを勸告せざるを得ざる所なり。若

し政友會の算するが如く無所屬議員十三名を拔くを得て同會は總數二百一名を算するに至らん乎、政友會が過半數を制するは爭ふべからず、隨て勝敗は殆ど豫め睹得べきものなきに非ざるが如しと雖も、吾曹は在野黨の未だ必しも前途を悲觀するに足らざるを思ひ、之と同時、此場合、無所屬議員の進退に付て一考を要するの價値あるを認む。蓋、無所屬議員の始めより政黨政派に屬するとなくして起ちたるは何ぞや。多くは政黨政派に屬するときは所期の投票を得難き事情ありしが爲めならずとせず。即ち選擧者の多數が無所屬にして一黨一派に偏するときは選擧者の分裂を來たし、爲めに有利の投票を得べからざるの事情に强ひられたるもの無所屬に立ちたる理由を通じて最大勢力を有するものなるは疑ふべからず。果して然らば無所屬議員は何處までも無所屬議員として其所信を行ふと終始一貫の姿態を持し得べき所以にして又其選擧區民に酬ゆる所以なり。

と論じたるは、洞ヶ峠の順慶に對する正議正論と見るべきなり。

廿四議會の會期中、全國實業家は合同して增税案に反抗し、示威運動を院外に行ひ、增税案に贊成したるものは再び代議士に選ばずと宣言して、各自非常なる意氣込みを以て、當總選擧には申し合せて各地に蹶起すべしと約し、實は一時は雨後の筍の如く所謂實業派候補者の續出を見たるが、今回の結果を見るに、當選者の數通じて存外に多からず。只だ一部の都市に於て稍多數の成功者を迎へたるのみ。市部に於ける實業派の勝利は、小は小なりと雖も之れ當に增税否認の聲なり、增税政府の彈劾案なり。

日々紙の『總選擧の結果』は云ふ

無所屬議員の內容は畢竟するに實業家若くは其の利害代表者に外ならざるを知るに外ならざるを知るべく、政友會の候補者が甚だしく市部に失敗したりしに反し、實業家及其の代表候補者が著るしく市部に成功したりし所以のもの、大にしては現政府の財政經濟策が既に商工業者に容れられざる反影として認むべく、小にしては第二十四議會當時に於ける全國商工業者の非增税運動が、不滿足ながらにも尙ほ市部の選擧有權者に對し多少の感動を與へたるに職由せずんばあらず。吾曹の平生希望して止まざる國民的覺醒の兆候亦幾分か此の間に認識せらるゝを得べく、一枚の投票も一名の議員も、投ぜらるべくして投ぜられ、選ばるべくして選ばれたるは、則ち國家の至慶なり、政府黨たるを恃むの外、今や其の立脚地を喪ひたる政友會に至りては、須らく其の市部に於て失敗したりし所以の根原に反省すべし、無所屬議員を誘ふて以て議會に絕對的多數を制すべきを揚言するが如きは抑も末なり、無所屬議員中縱ひ政友會の所謂准政友なるもの尠からずとするも其の所謂准政友が無所屬を標榜して以て候補を爭ふたるは、近時の國論に鑑みて政府黨に依るの名聞上不利益なるを知ればなり、財政經濟の時局益々艱難を加へ、政府に對する商工業者の同情遂に全然冷却し去るに至らば、今の無所屬議員中後れ馳せに政友黨に歸依すべきもの果して多を得る乎、今其の若干を割て政府黨は議會に絕對的多數を占むべしとするも、衆議院に於ける多數は內閣の安全を保障するものに非ず、議會ありて以來度々の內閣更迭事情に徵して知るべし、僥倖に

して現狀維持の結果に接したる政府黨たるもの、今に於て猶絶對的多數を揚言するの愚を爲さず、當さに退て總選擧の示しつゝある教訓を玩味すべし、政府亦自から省みる所ありて可也。

と、蓋し我が商工業者が今日の所懷は略此言に盡きたりと云ふべし。

吾人は更らに轉じて總選擧全體の成績を顧みざるべからず。之れ當に本問題の生命にして、亦た結論たるべければなり。國民の『東京便』は云ふ

◎併し又一方に七八萬圓の選擧入費を要したる者なれば、他方には葉書代や、名刺代や、演說會場費や、俥代にて、事足りたる者も之有候。中にはそれさへ要せざる除外例も之有候。されば今回は寧ろ貧乏人の爲めに、最も氣焰を吐きたる選擧と申しても、差支なかる可く候。世の中は、觀察の仕樣によりて、如何樣とも判斷出來申候。

◎但だ世の中の事は、必らずしも金持の思ふ通りになるものにあらず。又た金の威光も、相手次第にては、其の力を失ふことを證明致候。是れ豈に快心の事にあらざらんや。

◎吾人は別に金權に反對するにあらず、但だ金權のみの世の中に反對するのみ。金持に金持の權利あれば、金持たざる者に、金持たざる者の權利あらざる可らず。要する所は、互ひに其の權利を敬重して、相ひ犯かさゞるを期す可きのみ。調和の要件存此矣。

と、日々紙の『總選擧の結果』も亦た

金力權力の後援擁護なく、當選の豫想頗る微弱なりし者の、開票の曉に於て優に當選者の上位を占めたるものあり、政府黨たるの利便を恃み、散ずるに巨額の黃金を以てし、加ふるに舊來の因緣を以てし、而かも其の得票に於て遙かに一の窮措大に及ばざるもあり、世は必ずしも黃金萬能ならず、權勢萬能ならず、人物政見を以て候補を爭ふは世間の見て以て選擧事情に迂なりとしたる所なるも、總選擧の結果は必ずしも絶對的に這般の俗論を是認せず、東京市に於ても大阪市に於ても、其の他の選擧區に於ても、當選者得票の順位は決して其の散布したりし黃白の多少に比例せず、其の後援としたりし權威の程度に比例せず、其の信賴したりし因緣の厚薄に比例せず、政友を賣り節操を賣り僅かに黃白を散じて其の罪を贖はんとせるも、選擧者の之を許さゞりしは此徒の得票に徵して明かに之を看取すべからずや、凡そ是等の現象は今次の總選擧の結果に於て心ある者の見て以て快とする所、候補者自身に取ても恐らく意料外の事に屬せん、之あるが故に吾曹は決して今次の總選擧を謳歌せんとするものに非ず、轉て他の一面を顧れば、選擧の弊習は例に依つて例の如く、當選者の姓名を聞きて直ちに選擧界腐敗の程度を聯想し得るもの尠しとなさゞるも、腐敗せる選擧界に在て多少ながら幸にして偶ま如上の現象に接するを得たりしもの、萬綠叢中紅一點の觀無からず、亦以て聊か慰むに足るべき歟。

と云ひ、萬朝報の『選擧の結果』にも

選擧の結果

東京市選擧の結果は一二の動かすべからざる事實を明示するものあり其一は熱誠は最も能く人を動かすに足ることにして、藏原氏の當選は之を證す、其二は人物の缺點を補ふには非常なる高價を拂はざるべからざることにして、鳩山氏が最も運動に務めたりと稱せらるゝに拘はらず、僅に三位の高點を得るに過ぎざりしが如きは之を證す

東京市以外の選擧に於ても同一の事實を示す、選擧民は腐敗したりと稱せらるゝも、候補者の人物は優劣なき場合、若しくは劣等なる候補

者が强て他に候補者と輸贏を爭はんとするに當り、金錢の多少は始めて其人の當選と否とを判別する標準たるに止まり、卓越したる候補者は金錢の力に依らざるも、今尙當選する力を有するは明かなり是に依りて考ふるに今後政府の干渉及び一部人心の腐敗を除くを得ば、選擧は自から公平なるに至るや必せり、吾人は速かに此時機の來らんことを望む

と演べ、時々紙も『總選擧の結了』と題して

衆議院議員の總選擧は全國を通じて滞なく終了したり選擧間近の頃には選擧法違反として拘引せられたるもの少なからざりしと雖も今日までの所にては重大なる犯罪事件と目す可きものなく又選擧の場合に往々見る所なる不穩の沙汰も聞かず要するに至て平穩無事の選擧なりしは何より結構のことゝ云はざるを得ず

と觀じ、東京毎日紙亦た『未だ腐敗せず』と題して藏原惟廓氏の成功を祝し左の如く云へり

東京市に於ける藏原惟廓氏が大多數を以て選出せられたるは選擧民の公徳を證するに足る、而して之と同樣の事實は全國を通じて現はれたるが如く、其二三を擧ぐれば、大阪市に於ける石橋爲之助氏が純然たる一個獨立の操觚者にして何等金力權勢の應援無きに拘らず、僅に第二位を以て當選したる、神戸市に於ける櫻井一久氏が選擧當日を距る數日前に於て其名乘を擧げ、殆んど運動と名くべき何等の手段をも執らずして而も大多數の當選者となりたる選擧民の徳義良心の甚だ旺なる者あるを見て吾人は頗る意を强うせずむば非ず、果然吾國の選擧界は未だ腐敗せざる也

と、吾人も亦た今回我が國民が示したる著しき選擧法の進步に對しては、竊かに大杯を擧げて祝する處あらんと欲す。（野逸道人）

次號說苑欄豫告

○包圍せられ居る伊藤侯　黑頭巾

美人にか、幇間にか、名譽權勢にか、兎に角何者にか包圍せられ居る伊藤侯の面目躍如たるべし

○新渡邊稻造と嘉納治五郎　笹川臨風

共に是れ我國敎育界の巨頭、各々異なる東西兩文明の代表者たるの觀あるに於て其處に如何の對照かある

○小杉天外論（現代人物評論第六）

普く文壇諸名家の評論を集むるの外、更に一般讀者の意嚮を知らんと望む天外氏の意を承け、廣く端書によつて有らゆる階級の人々よりその所見を聞く事としぬ

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

—(新著獨逸書類)—

レグラム叢書數十種新着したり、現代思潮に關係ある世界的文學は之に由て親しく窺ふを得べきなり

RECRAM UNIVERSAL-BIBLIOTHEK.

Anderson.—Improvisator: ...	.40
„ Sämtliche Mächen, 2 Bde ....je	.50
Befoe.—Robinson Crusoe. ...	.20
Dostojewskij.—Merorien aus einem Totenhaus.	.30
„ Erzählungen..........	.10
„ Schuld und Sühne...	.50
Goethe.—Faust, 2 Bde. ... je	.10
„ Hermann und Dorothea.	.10
„ Werther's Leiden...	.10
Goldsmith.—Der Landprediger von Wakerfield.	.20
Grimm.—Kinder und Hausmärchen.	.20
Hauff.—Lichtenstein.	.30
Heine.—Buch der Lieder. ...	.20
Ibsen.—Nora oder Ein Puppenheim.	.10
Irving.—Skizzenbuch..........	.40
Jerome.—Die müssigen Gedanken eines Müssigen.	.20
Kant.—Kritik der praktischen Vernunft.	.20
„ Kritik der Reinen Vernunft.	.50
„ Prologomena.	.20
Lessing.—Laokon.	.10
Das neue Testament.......	.50
Schiller.—Jungfraŭ von Orleans.	.10
„ Wallenstein, 2 Bde. je	.10
Schopenhauer.—Parerga und Paralipomea, I............	.50
„ „ II.	.50
Shakespeare.—Hamlet.	.10
Smile.—Selbsthilfe.	.30
Swift.—Gulliver's Reisen. . .	.40
Tausend und eine Nacht, 24 Bd. ... .je	.20
Tolstoi.—Krieg und Frieden, 2 Bde.....................je	.50
„ Luzern...............	.30
Turgeneff.—Gedichte in Prosa	.10
„ Ein König Lear der Steppa.	.10
„ Lietenant Turgeneff.	.10
„ Litteratur-u. Lebenserinnerungen.	.10
„ Memorien.	.30
„ Die Neue Generation.	.40
Zschokke.—Der Todte Cast...	.10

東京・大阪・京都

丸善株式會社

(東京振替口座第五番)

大阪支店 振替口座 第七四番

京都支店 振替口座 九八九〇



甥

徳田秋聲

瓦斯燈の薄暗い、田圃なかのステーションを出ると、野原から吹いて來る夜風が肥料の臭氣を帶びてゐた。此から一里半許ゆくと、もう其處が濱であるから、潮の匂もするやうである。押開いたステーション前には、大阪風に赤い提灯を垂下げた、不景氣な饂飩屋、雜普請の旅籠屋などがあつて、路傍に植つた柳の蔭は暗く、雨催の北國空がどんよりと曇つてゐる。汽車が敷けてから初めて歸省した私は、何となく他鄉を漂浪うてゐるやうな氣がした。

腕車に搖られて、私は暗い街を通つて行つた。ステーションから家迄は、里數にして些と半道ばかりはある。安江町、榮町、堤町、十間町、殿町など云ふ大通を通つて、腕車は段々石垣や土塀の多い、寂しい武士町へ入つて行つた。故鄉の印象が刻一刻、私の頭腦に刻まれて來た。老母や姉や兄や甥や姪の古い記憶が私の心を牽附けるやうに、目に浮んで來る。四月末の、若葉の繁つた尾山の市は、夢のや

うに靜であつた。ボンヤリした灯の影が、其方此方の門や窓から洩れてゐた。

家へ着いたのが十時である。其頃母は知合の家に同棲してゐた。古い武士屋敷で、重い耳門を推すと、ぎい〳〵言ふ鎖の音と共に、門のうちに在る一軒の長屋から、髮の鏟け立つた三十許の女房が出て來て私の樣子を見ると、急いで宅へ驅込んだ。

少時すると、廣い式臺の杉戸の蔭から萎びた母親の顔が現はれる。色白の寂しい顔の脊の高い姉、色の黒い、目容の險相な小柄の次の姉と、其子も姿を見せた。孰れも表情も愛憎もない燻つた顔をして、久振で弟を迎へるのに髮一つ綺麗に結はず、多勢の子供の世話や不運な世帶の苦勞で、窶れ切つてゐる樣子が一目で解る。

母親の住居は悒鬱しいと見えて、私はだだつ廣い臺所續きの大な圍爐裏の切つてある板敷を通り、黝光りに光つた箱段梯子を上つて、二階へ案内された。母親は多分私が十年前に勉强ランプにしてゐた、同じ薄暗いランプを持つて先に立つた。

取次の四疊を通過すと、二方廣椽を取つた、天井の高い十疊餘の一室である。室はガランとしてゐる私は疲切つた體を、先眞中に坐つて、簡單に一同へ挨拶をすると、直ぐ米原から此方の汽車の不平などを言出した。

「惡い石炭を焚くもんだから、滓が目へ入つて、遂敦賀から此處へ來るまで惱まされて了つた。」

二人の姉は「マア、ソー」と言つて、格段の同情もないらしかつた。

「加之時間の遅れるのには驚いた。」

母親は茶を入れたり、菓子器に菓子を盛つたり、暫くも凝としてゐない。菓子は少年の折大好物てあつた、スハマと云ふ品て、其頃何時か一度は鱈腹食つて見たいと思つてゐた覺もある。

「阿母さんは、些とも變りませんね。」と私は其菓子を一つ摘んで口へ入れた。

母親は、「阿母さんかえ、阿母さんはお蔭て、今ぢや疾病氣なしや」と私の口元を成つてゐたが、「今ぢや口が奢つとるやらうさかえ、其樣ものは食べれもしまいけれど……。」と言つたが、お國自慢の老人には、「東京にも此樣菓子はあるまい。」と云ふ氣振は見えた。

母は一服莨を喫すと、「嫁や子供にも來て貰はうと思ふたがね、何分自分の家もない始末でね……加之同族は同族て、年中垢の附いた着物を着て、世帶に追廻されてゐるやらうがね。」と氣毒さうに言ふ。

私は月々の仕送さへ、左右怠勝なのを可愧しく思つた。

「それても壯太郎さんは、此頃は景氣が好いんてせう。」と私は大い姉に言をかけた。大い姉は今年もう四十二三てある。私とは異腹て、美人だと云はれた其母親に酷肖だと云ふ噂てある。嫁入前後は可也綺麗てあつた。が、其時分から餘り愛嬌のない方て、口も無調法てあつた。苦勞性に産れついた女て、年よりは更けて見える。心臓が惡いとか言つて、聲が少し嗄れてゐるのも氣にかゝる。私は此姉が一番所好てあつた。シミヤした話は、此姉に限つたのてある。少い時分から世話に爲つた所爲もあらう。壯太郎と云ふは其夫て、七八年此方遠國の鑛山へ行つてゐる。姉のお繁は月に均して高々四十か五十の給

料の大分を仕送つて貰つて、それてカツ／＼四五人もある子供の教育も爲、一人の姑にも仕へてゐる。

姉は薄淋しい笑方をして、「何が好いよがあるもんてすかね。子供はメキヽヽ大くなるばかりだし、諸式は騰るし、それて入るお金はキチンと決つてゐるやないか、もう其日／＼を食べて行かれると云ふだけの事てすよ。」

「それて壯一は奈何してゐます。」

私は二年前に暫く東京へ引取つて世話をしてゐた甥を思出した。無口な潔泊な少年てあつたが、柔道が得意て、殺伐て、疳癖が强かつた。國ても敎師の手ごちに行かぬ腕白てあつたが、東京へ出ても然てあつた。直に何々組とか云ふ惡書生の群に引張込まれて、其から其へと友達が殖えると、其社會の一種の意氣て、弱いものは助けて、强いものは挫ぐ。琵琶や浪花節て。變に仕込れた頭腦は、唯其樣な事を面白がつて、終には酒や女の味などを覺えた。年長の仲間に唆かされて、始終私に不法な無心すら爲る。不思議な群もあるものだと、私は其仲間から脫しさせやうと力めたけれど、一度此の綱の中へ入ると、出るのが容易てない。甥の惡い性癖は益す增長して來た。叔父をさへ脅迫しかねまじき勢ひてあつた。俊秀な少年て、惜くもあつたが、可怕くなつて、私は到頭欺いて國へ逐返した。國ては多時ぶら／＼してゐたが、其後何處かへ逃げて行つたと云ふ噂だけは耳にしてゐた。

姉が一番大事にして育てた子てあつたので、壯一と云ふ名を言つただけて、もう含涙んてゐる。

「あれも、飛んだ御厄介になつてね。」と調子が沈んて來た。

「今てや上海とかへ行つとるとか云ふとてすよ。死んだか活きたか、何の道碌なものに成る氣遣はないんてすからね。」と非す下から、「他も不自由させて育てたもんてすから、些と可怪な氣になつてゐたのかも知れません。」と獨て愚痴を言つてゐる。

「けれど、あゝ成つちや爲方がないんだね。僕は不相變貧乏してゐるが、あの時分は殊に然だつた。」私は壯一の口から國へ傳へられた私の生活狀態が、非常に放縱て贅澤てあるかの如く解られてゐるやうな氣がしたから、つひ斯うも言つて見た。

姉は不感服さうな顏をしてゐる。私の洋服や、時計の鎖などを、冷い目てヂロヽヽ見てゐた。私は可厭な氣がした。

「次のそれ……」と私は目眩いやうな目を瞬いて、「頭腦の莫迦に大かつた、あの安二の方は如何しました。」

「あれは勉强してゐます。今茲もう十八に成りましたがね、來年て中學を出るのだけれど、痩腕てやなか〳〵此頃の仕込は出來さうもないし、如何して可いやら、困り切つてゐます。」と此も獨語のやうに言ふ。

「人の世話しるてものは、如何して、なか〳〵骨の折れるもんてす。」と次の姉が言出す。大な姉が、餘り慾張つてゐると云はぬばかりの氣色てある。父から受けた利かぬ氣の目がぎろりと光つてゐた。

するうち母は何か御馳走を運んて來た。朝から懸つて拵へた者てあらう、田舍ても今は希しい廣蓋に、丼や皿や箸立や醬油注が、ごちや〳〵載つてゐた。東京の口取のやうな物もある。燒肴もある。何やら

味噌和のやうなものもある。料理は多少心得があるやうに聞いてゐたが、もう年を取つてゐるので孰れも汚細工て、私の食慾を惹くやうな物は、一品も見當らなかつた。でも海が近いから肴は新らしい。燒いた鯛には磯くさい匂すらある。

「お婆さんは、マア大變な物を持出して入らした」。と小い姉は笑つた。

「何ね……今日は實にお肴が無うてね。加之もつと早う着くやらうと思うてゐたもんで……。」と先猪口を一つ取あげて私に酒を注ぎ、其から二人の娘の前にも一つ宛置いて注いだ。

でも酒は濃い。味も醇である、私は半分ばかり飲んで、不思議さうに廣蓋の上を見廻してゐた。

「可怪なものばかり並べたと思うて、じろ〱見てゐるんでせう。」と小い姉は笑止さうに言つて、「如何せ口に適ふやうなものはないわね。でも、此方も段々開けたわ。料理屋も殖えましたよ。正さんなぞは食べやうと思へば、何處へでも行つて食べるが可い。今でや隨分氣の利いた物が出來るさうですよ。」

「いいえ、そんな事せんてつちや。」と母は頭を揮つて、「食べたいものが有つたら、阿母さんが拵へて食べさすさかえ餘計なお金を使はん方が可い。」と言ひ〱小皿に二三種の料理を取配けてくれる。私は少宛箸をつけて見たが、何れも此も可憐い幼時の記憶ほどには口に昵まなかつた。

酒が少し廻つた處で、私は行李と鞄に分けて入れておいた土産物を取出した。海苔や、西洋菓子や、安い帯地や、浴衣地なども二三反あつた。甥や姪にやる文房具、化粧品、帯留リボンの類もあつた。でも多勢の頭に分配すると、何の端にも足らぬ位である。姉は孰れも注文のあるらしい目を聳てゝゐたが

母は感心したやうに、目につく物を手に取擧げて、「何て綺麗な！こんな心配せんこつてすよ。然てないと、又來るのが臆劫になる。」と氣毒さうに言ふ。

姉は二人て、反物を引張合つて、こんな柄が此方へも來てゐるとか、居ないとか、此は誰が着れば似合ふとか、派手すぎるとか、ぺちやくちやと低聲で呟き合つてゐた。

其晩は、其で二人とも歸つて了つた。私は久振で母に床を敷いて貰つて、直に枕に就いて了つた。夜はもう十二時大分過ぎてゐた。

母は枕頭で二三服莨を喫し、散かした土産物など片着けてゐたが、此も少時すると、靜に床の中へ入つた。有明のランプが、骨張つた其片頰に、蒼白い光を投げて、白髮交りの頭腦が、此前見た折に比べると、滅切萎びてゐる。私は十年以來、恁して淋しく寢て、淋しく起きてゐる老いた母親の生活を想像してゐた。が、母親自身は、海や山の幸の多い、水も美しければ、人の心も優しい生故鄕を離れて、東京へ連れられて行くのを、死にでも誘はれるやうに可厭がつてゐる。頭腦が沈んでゆくと同時に、私はスヤされるやうに深い睡眠に陥ちた。

翌朝目が覺めると、其處らが整然と取片着いてゐる。外も內も闃りとして、何やら物忘をしたやうな氣がする、日はもう可也闌つてゐるやうであるが、廂が深いから、部屋は其割にパッとしてゐない。が、花瓶臺の塗板に、白く埃の積つてゐる位は別る。楷下へ降りると、一層暗い。廣い臺所の、石で臺を造

つた流元は、水が始終腐つてゐるやうで、水蟲が這つてゐるやら、菜葉の片が粘着いてゐるやら、水腫けた飯粒が散ばつてゐるやら、北國人の無精な一面が、此にも現れてゐる。臺所續きの湯殿には、バチ〱炭の跳ねる音がして、朝から湯が立つてゐる。私は裏の井戸端へ出て顔を洗ふと、板戸で劃られた茶の室へ入つて、レウマチで惱んでゐる此の主の婆さんに挨拶をして、其から母の部屋へ入つて、飯を食つた。

此處は腰窓になつてゐて、廂が淺いから、比較的明かつた。荒れた庭には、枇杷や林檎、梅の樹などが、暢々と枝を蔓らせ、蓁々として深い緑が、町よりか田園の感じを與へる。昨夜は何とも思はなかつた鯛の鹽燒が、如何した拍子か、今朝はふと忘れられぬ味を舌に留めた。長い間の味感の習慣が、急に舊へ戻つたのであらう。

飯が濟むと、私はステツキを持つて、山へ登つた。山と云つても五六町ばかり行くと直ぐ、川の向で、北方山脈の裾が。此まで起伏してゐる、畢竟一つの丘陵に過ぎぬ。稚い時分は獨て能く此へ登つた。上には社もある。庵寺もある。石碑や墓もある。ずつと奥の方へ行くと、其處が有名な春日山で、金岩から安宅あたりの海や、河北潟の碧い水などが一と目に見える。私は松原に坐つて、能く此處の日沒を眺めてゐた。學校の課業が可厭になつた時、所好な本を懷にして、丘の半腹に寢轉びながら、少年の空想や、冥想に耽り、落日が全く遠い煙波の下に隱れ切つて、寒い夕風が松の梢に鳴ると、そろ〱坂を降りて、軒毎鰯を燒く煙の燻つてゐる貧乏町を通つて、家へ歸つた。其處で詩も思へば、世間や女も想つ

てゐた。

私は二時間ばかり其迹を逍遙ふて、暗愁の多かつた十七八時代の面影を想浮べ、松原を離れて、ポツ々夷かな丘へ出て來た。

川縁へ出た時分は、もう目眩いくらゐの初夏近い日射て、人影もない靜かな河原の砂地に、振子を張つた染物の絹が、幾反となく青嵐に光つてゐた。早瀬のある向河岸の水車が、ゴットン〳〵と、懈さうな音を立てゝゐる。ずつと川上の方て、崖際に旗の垂れてゐるのは、昔から名代の鯉屋と云ふ、川魚を食す家てある。

天神橋を渡らうとすると、ふと甥に逢つた。甥は嘉吉と云つて、若い方の姉の長男である。白い運動着に下駄穿て、手にラケットや球を持つてゐる。小作の瘦形らしい骨格てあるが、血色は惡く、髮の毛が半分の餘も白毛てある。目容も鈍く、口が少し吃氣味てある。顏の印象の薄いのは、母や父には似もつかず、寧ろ叔父の私に似寄つてゐて、私よりも一層弱いが、觀るから善人相て、勇氣や決斷力のない優しい心が、自から顏に現はれてゐる。

嘉吉はひよいと、私の顏を見ると、急に立悚んで、怯氣に充ちた目を瞬つた。それて、私が言をかけやうとすると、遽に目を伏せて、逃げるやうに驅出して行つて了つた。

何だか、哀な男！と云ふ氣がして、私は少時其後姿を見送つた。

其から舊友を訪ねやうと思つて、ずつと川へ沿いて、並木町を通つて行つたが、歩きながらも今逢つ

た甥の事が妙に氣に引懸つてゐた。其弟や妹の事、不幸な姉の事も想出された。

小い方の姉が緣づいたのは、漸と十五の時であつた。其頃は住居は、丁度今私が歩いてゐる町の向河岸で、八升生と云ふ頭抜けて大きな實の出來る、梅の老木が、前庭一杯に其幹や枝を蔓らせて、往來まで伸出してゐた。梅は今年も柔かい嫩葉を着けて、塀に蔽被つてゐるが、家は私の一家が立退くと同時に、花月庵とか云ふ料理屋に改築された。

私は今でも姉の舅と姑とが、入替り立替り、縁談を持込んで來たとを覺えてゐる。父とは同藩の人で、昔のまゝの家屋敷に田地なども有つてゐた。舅はでつぷりと、酒肥のした、中悸の氣味で、顔を振り〳〵ネチ々と話をする老人であつた。來れば必然ドッチリ坐込んで、彼此半日の餘も酒を飲んでゐた。歸りがけに、蹌踉きながら茶の室へ出ると、未だ眞の小供の姉が、ついと臺所へ隠れて了ふと。老人は、其處まで追駈けて行つて、暗い處で姉の顔を覗き、何か低聲で甘い言をかけてゆく。

父は長い間躊躇してゐたやうであつたが。其秋到頭姉は緣につかせられて了つた。實家歸りの時、母が話をして、其まゝ二三日泊めてやつたが、友達が二三人、姉の様子を見に來て、連に罪のない話を仕かけてゐた。姉は大な簪を挿して、派手な御召の小袖を着て、白粉を塗つた顔にシク々々泣いてゐた。

其後も姉は時々やつて來た。來る度顔が水々して、血色が鮮かになつた。島田に結つた、ふつくらした其横顔を、小供心にも私は美しいと感じた。近るのが、可羞しいやうな氣もした。姉は段々女に成つたのである。

するうち大分經つてから、姉は、來ても妙に歸を急ぐやうに爲つた。私に對する調子も、日増に疎くなつて來た。所好な芝居に誘つても、カルタをやらうと言つても、一向滿らなささうな顏をしてゐた。煩いほど誘ふと、怒るとすらあつた。私は、是が何より手頼がなかつた。

恁して姉は、一月は一月より世帶染みて來た。或春のこと、一日遊びに來てゐた姉が、晩食半ばでふと箸を投出し、「アラヽヽ」と妙な聲を出して、四邊を見廻すかと思ふと、

「目が眩んで、何にも見えんわ。耳が變になつて來たわ。」と誰かに縋るやうな手樣をするうち、力なくバッタリ仆れて了つた。

家は大騷である。飯を哺んだまゝ脊の高い兄が立上るやら、母が水を持つて來るやら、抱起すやら、呼ぶやら、一同まご〳〵爲出した。結局私が醫者を呼びに遣らせられるとに成つた。飯の食立て、私は横腹が痙攣つて、歩けなくなる迄夕暮の淋しい町を驅けて行つた。

其まゝ姉は家に留められた。而して毎日父に連れられて病院通を始めた。癒つて緣家へ歸るまでには、彼此三月も懸つたらう。

一番目と二番目の產兒が育たなくて、義兄が萎頓してゐる處へ、產れたのが、今の甥である。其からヒタヽ、三人も產れて、姉ももう好い位の婆さんに爲つた。舅姑も死んで了ひ、小舅も別居して、家も段々零落して來た。義兄は種々な仕事に手を出して、時に浮いたり沈んだりしてゐたが、畢竟は失敗續きであつた。一時外國行のハンケチの刺繡に熱中して、女工を集めたともあつた。活版の工場も興した。

人間は器用に産れついてゐたが、物に飽易い質なので、一ト通り筋道が腹へ入ると、もう投出して了ふと云ふ風であつた。甥が段々小供になる時分には、田や畑も追々に亡り、住居も荒れて來た。今の家に逼塞したのは、七八年前のことである。

甥が今のやうな體になる迄には、非常な手數が懸つた。父親は始終手を引張つて、公園や山を連行き牛乳やソップ、柳蟲や寒雀を食して、其凭弱い體質を補はうとした。お蔭で甥は丈夫に育つた、山へ木の苗を取りに登つたり、網を持つて小鳥獵に出かけたり、釣や梁なども巧者に成つた。夏から秋へかけては、山と川とで其日を暮し、河童のやうな顏をして、菜蟲を割いて食つたり、蝦蟇の照焼を拵へたりして居た。反對に頭腦は鈍く、感情や意志の力も薄弱で、勉强する根氣や氣働が少しも無つた。世間的智識にも乏しい。見るから血の氣の薄さうな、鈍い少年である。

私は其日は友人を訪ねて、歸りがけに前を通つたから、此の甥の家を見舞つた。

家は區裁判所の後にある。此處も武士町の迹で、今では市の勢力が西に移り、聯隊や學校や、重なる官衙の在る方へ、人氣を吸取られて了つたので、全然寂れ切つてゐる。家も大方取潰され、菜種や麥や桑が作られてある。彼方にも此方にも、殘壘のやうな石垣や土塀が崩れて、李、柿、梅の類が、野生的に枝葉を繁らしてゐる。日に光る若葉の匂、溝の蒸される匂、一種の瘟氣に息が塞りさうで、衿垢の目立つドンツクを着た人の顔が、蒼かつた。

甥の家は可也廣い。燒杉板の圍は、裾が大半腐つて、所々剝れてゐる。門には滅茶苦茶にチョオクや

墨や鉛筆て落書がしてあつて、屋根に草が生えてゐる、半分の格子を開けて入ると、土間續きの、横手の暗い物置に、姉がガサヽヽと薪の束を釋いてゐたが、何やら呟きながら明みへ出て來た。上へ上ると、三疊の玄關と、次の細い疊廊下とは眞闇て、埃で足がザラヽヽする。部屋は外に四つあつて、座敷へ入ると、整然と取片着いてゐる。鹿の角の刀も懸つてをれば、鎧櫃も据ゑてある。古い唐木の茶棚もあれば、懸額も垂下つてゐる。盆石もあれば盆栽もある。碁盤や謠本も備へてあつた。義兄は庭で盆栽を弄つてゐた。近頃何をやつてゐるか私には解らぬ。母の話では近頃貧財も大分出來たやうに言つてゐる。

色の黒い、目容の綺麗な男であつたが、今も其目は冴々してゐる。濃い毛は三分の一方白毛になつて硬い頰髯が二三分伸びてゐた。

茶縞の木綿物に小倉の帶を占めて、植木棚のあひだに蹲踞んでゐた。私が椽側へ顏を見ると、「ヤア。」と聲をかけて、「今上ります。」

弄つてゐたのは、一鉢の松である。枝が三蓋に姿作られて、捻くれた老木の趣を具へてゐる。が、葉は上の方の一枝を殘して、餘は殘らず紅殼色に眞赤に成つてゐる。

「枯れましたね。」と辭をかけると、義兄も力のない聲で、

「十年も持つとつた松やがね、到頭枯いて了うた。もう丹精するがものはない。」と溜息を吐ながら、そろ〳〵此方へ遣つて來た。

私は甥の事を想出した。茶の間から嘉吉の弟と妹とが出て來たが、兄と異つて、二人とも綺麗な鋭い顏をしてゐる。此樣な可愛い子供を、如何して人にするだらうと私は可憐しさうに二人の顏を瞶めた。手を洗つて、上つて來る義兄の顏を見ると、一種の怜の色も見えた。然し可愛いのは、矢張總領の方て、話は直に其事に移る。

「如何したら可いものやらうか」と常時は負ぬ氣の義兄も、私一人を力にしてゐたと云ふ風に投出す。話を聞くと、今度で前後二度落第したので、責めた處で、根が頭腦が惡いのだから、自分にも途方に暮れるばかりである。記憶力も薄ければ、理解力も乏しく、教師は氣毒さうに若白髮の頭腦を撫て、絕望的に、

「貴方は此頭腦が惡い。」と云つた位である。殊に今度の失敗には、滅切萎げ込んで了つて、唯トボ、、してゐる。もう迚も學問で身を立てる望みはない。とすると、他に方法を擇ばなければならぬ。其方法が、廣い東京へ出たら何か有りさうなものだ、と云ふのである。

「と云つて、勞働と云ふ譯にも行かんだらうし……勞働的の仕事にした處で、人の上にても立たらうと云ふには、矢張頭腦の必要がありますからな。」と私は首を傾げた。

「イヤ、何ても好い。郵便配達可し、活版職工可し、左も右劇しい東京の眞中へ投出して、少し揉んで下されば、其て可いので……」と義兄は酷く遜つた口を利いてゐたが、一切は私に委すと云ふので、壯一の例もあるから、此方も私立學校くらゐは、遣らしてくれても可からうと云ふ意味も、言外に見えた。

「然うも行くまいが……。」私は苦笑して俛いた。
「何しろ、物の一時間も机に向うてゐると云ふと、もう頭腦がぐらぐらして來る。誠に厄介な奴て……
……其なら……根氣が薄ければ、機轉でも利くかて云ふと、其も全然無い。」
「それぢや事務を取るとも出來なければ、商賣を行らす譯にも行かん。」
「と言つて、總領を早く物にしておかんと、何時何時此私が斃れるかも知れん。私も今玆はもう五十ぢや、此四五年、豪い體も弱つて來たし、根が中悸の統やから、如何も其が出さうて、今のうち、如何しても彼奴を野立たせて置かんと、手足が利かんやうになつた時、食してくれ人がない。」
兄は其から娓々と甥の身のうへを賴んだ。何でも可いから、一人前にしてくれろと云ふのである。姉も出て來て口を添へた。
其から、今日は呼びに上げやうと思つてゐた處だと云つて、器用な義兄の手料理て、酒を進められた義兄の食味通や、謠の自慢話など長々と聞されて、私は飽々して其處を出た。
歸る時甥を呼んて、其志望を聽いてみると、甥は唯堅くなつて、默つてゐる。可愧しいやうな、果敢ないやうな顏て、酷く何か言ふと、目から涙が出さうてある。
「こんな人間に、生活の重荷が背負へるものか。此子に老後の世話をさせやうとは云ふのも無法だ。」と私は心のうちに繰返した。
宅へ歸ると、大い方の姉が、十七になると云ふ、二男を連れて、私の歸省見舞に、一籃の肴を持て來

てゐた。母は茶を入れて、東京土産の菓子を出して、お愛想をしてゐる。

私が今夜の事を話すと、母は淋しい顔を顰めて、

「そんな心配せんこつちや。あの人達は慾張てゝ、子供までお前に塗つけやうと思うて……。」

と姉も、「嘉吉こそ駄目や。世話しましても、碌なとはないぞね。」と悠かやに莨を喫してゐた。

私の胸には、もう五六年前のやうな、故郷の可懐い感じもなく成つた。急に東京が戀しくなつて、其から二三日すると、行李匆々引上げて了つた。」

私が甥の嘉吉を東京へ連れて來たのは此時である。甥には込入つた學問をする能力がない、簿記學校を卒業させて見たが、何處にも使つてくれさうな處がない。更に寫眞學校を卒業させて見たが、滿足な寫眞と言つては未だ一枚も撮れぬ。

甥は相變らず、私の懇意な寫眞師の助手として、奴僕のやうに苦使はれてゐる。

國からは時々、親父の長い零し手紙が來る。

甥は其を讀む度に氣毒なくらゐ蒼い顔をする。親父に濟まぬと思ふのであらう。

（完）

苦熱

草野柴二

一

暑休みて歸省してゐた小田堅次は花京院通の素人下宿に八月の末又歸つてきた。學校の始業には大分間があるので、同宿の仲善もまだ來てゐない。郵便局に勤めてゐる川田といふ初老近い暢氣な男が一人廣い家にごろごろしてゐたが、是れも夜勤があるので隔晩には留守だ。

素人下宿といふのは大きな古るい家で、藁葺屋根の棟には箒草やら雜草やら勢ひよく生えてゐる。客を置く南向の並んだ三間と折曲つた六疊とはさして陰氣でもないが、北に向いた方は何の室も〳〵薄暗くて、ところ〴〵膏藥張してある疊は茶色で、濕潤する。此所は客や家内の者の荷物、道具がだらしなく雜然置いてあつて住居としてとても使はれず、又使ひもしない。田舍は暢氣なもので、門の錠も下ろすこともあり下ろさぬこともあるが、此あいだ珍らしくコソ〳〵泥棒が這入て、郵便局の先生の蝙蝠傘を偸られてから此方、這入口の戸には川田が内かち、寢る時掛金をかけることにした。家内の者は門脇の別棟に寢起してゐて、この母屋には三度の食事を運んだり拭掃除の時這入てくるばかりだ。家内とても三十五六になる内儀さんと、花代といふ面にも服裝にも不相應な名の小女二人きり。尤も平常は下女が居るのだが休み中は居ない、暇を出したのぢやあるまい、大方手隙なのを幸ひ、自用で生れ在所へて

も行つてるのだらう。

晒木綿を紺て絞つた腰巻の上から、同じ白木綿の袖無一つて、稍ともすると黒い大きな乳房のはみ出さうとする、その膝前を掻合せながら、堅次が鞄や風呂敷包を片づけてゐるところへ内儀さんが這入てきた。一寸人前に出るにも鏡を覗く都會の女とは似ても似つかず、言葉も純粋の土地辯だ。

「大變早とてお歸んなすたねす、お部屋も片付とかんで已あ。」

併聞き慣れてゐる堅次は別段可笑しい語遣ひとも思はず、「少し此地に用事があるんて……端書は着かんてしたか。」

「はア、今朝着ましてござりすウ。おうちでも皆様お變りござりせんて……。」

「え、宜敷言つてました」と堅次も一寸愛想を言つて、「あゝ、今朝着いたてすか。」

「はア今朝ねす。御無禮てござりすけど」と茶盆の縁を掌て一寸擦つて出した。

「お母さん、小田さんの洋燈火屋が無え。加茂屋さ行て買てくべいか。」小娘が椽側から袖無姿を少し表はす。袖無の襟は赤の金巾だ。

「待たいん。御免なさりせ」と、娘の後を追つて内儀さんはどた〳〵入口へ駆け出した。

夕飯を終つてから堅次は端書を二枚書いて外へ出た。一枚は親里て、一枚には房州北條塚田屋方幸田かづ子様としてある。かづ子さんといふのは、堅次が弟や妹と行つてゐた海水浴て不圖した緣て、遊びに被來い、え上つてよといふ仲になつた東京からやはり兄に連れられてきてゐた可愛らしい少女てあ

る。堅次は數へ年の二十一だがまだ戀を知らない。かづ子さんも此春女學校に這入たばかりの世心づかぬ少女である。それでも二人ながら別れる前日の夕闇には、兄妹の目褄を忍んで海岸を手と手を握つて歩いたので。

出さうか、出すまいかと渡々踟躕つた後で堅次は到頭その一枚を引裂いて了つた。けれどもまだ未練が殘つてゐる。裂かなけや可かつた、接げなからうかと裂目を合せてみた。先刻から餘程のあいだポストの前に佇立つてゐたのに心付いて、歩き出しながら揉みくちやにして、齒で咬み碎いて、傍の溝渠に抛り込てしまつた。

扨それから、東京なら日本橋通が小川町かといふ盛り場を、素より珍らしくも面白くもなく只散歩して、屋敷町の下宿に歸つた。

いつになく上り口に洋燈が置てあつて、内儀さんの袖無姿が奥へ引込むと、代つて娘の袖無姿が玄關先へ出てきた。だだ廣い板敷の直き彼方は客を置く室で、それが三間奥へ續いて在るのだ。一番の奥を借りてゐるのが郵便局の川田で、堅次は折曲つた六疊に居るのだから、二つは今空間で、隅に粗末な机があつてその上に本箱と新聞が載せてある。

「誰が歸つてきたのか」と、上り口で堅次は少女に聞いた。

「はア」と言つたきり、お歸んなさいと小腰一つ屈めんで、少女は駈け下りて母と二人の別棟に這入て了つた。さつぱり要領を得ん。馬鹿め、と舌打しながら、砂埃でざら〳〵する廻り椽を回つて部屋に這

入る。氣がむしやくしやして面白くない。閉めてあつた雨戸を手荒く開放して、どッかと机の前に胡坐を組む。外は好い月で、是れもだだ廣いだけで、ごろ〳〵した大石が二つ三つと、枯れ葉のやけに引掛つた松の大木がぬうと塀外に枝を出してゐるばかり風情のない庭も、月の光を一面に浴びて、綺麗だ。

「どうもお内儀さん、御厄介をかけて。」

「はア、如何致しまして。手が無えもんだて……九月になッと姉も戻つて參りす筈でござりすけど、今は私と娘ばりでねす。」

是れは内儀さんの返事だが、相手の女が誰だか解らない。堅次は聞くともなく聽いてゐる。

「あゝ、さう、下宿してらつしやる方は、大勢なの?」

「はア、いえお三人ばりでござりすウ。それも暑中はお國さござつてゝねす。けふ迄はお一人ぎりでござりしたけど、今日又お一人お歸んなさりした。」

自分のことを話してゐるのだなと、堅次は耳を澄ます。

「あゝ、さう。何處の方?」

「東京て被在りしてござりす。」

「書生さん?」

「はア、高等學校さ行ておんなさりしてがす。」

誰だか知らぬ女は變に輕い粗雜な言葉を使つて、今度は川田のことを聞き訂し始める。人の好い内儀

さんは鼻にかゝる悠長な調子て、それに受答へしてゐる。
少時經つと女は立上つた樣子て、「私一寸出かけてきてよ、お內儀さん。」
「はアお出掛て、是れから」と少し驚いた語調て言ふ。
「え。そんなに晩かないてせう、まだ。なに、一時間ばかりしたら歸つてきます。」
「はア、さうでござりすか。そんではア御無禮でござりすけど、お歸んなしたら戶締りお願ひしてがす、私お先きさ臥せりすて。」
「あ、よござんす。」
女が出て行くと間もなく內儀さんが堅次の室へ這入てきた。終日汽車に搖られたので、精悍な氣と新鮮の血を盛た軀も、ぼやけて、だるい。それに又東京や北條の空が何となく戀しくて、がらんとした薄汚ない仙臺の下宿が一層厭な氣がする。寢やう。と久し振て自から床をとつて蚊帳を釣つて、橫に倒れたところへ內儀さんがきたのである。
『お休みなさりしてがすか、そんではア明日の朝‥‥‥」と踵を返さうとするのを堅次は呼びとめた。
「いや、まだ眠やしないです、何か用事?」
「はア、さうすか」と又引返して蚊帳の外に膝を衝く。「あのねす、お客樣をお置申したて一寸ばり申し上げとかうと思ひして」といふのを緒口に女の話しをした。
內儀さんも此婦人とは先刻初めて面識したのてあるが、知合の者から口添えがあつて當分——一週間

か長くて十日ほど――置くことにした。貸したのは上り口から取付の八疊、床の間も袋戸棚もない眞四角な部屋で、九月の十日過になれば以前から下宿してゐる學生にあけ渡す。屹度それ迄女は居りはすまいが、もし其時迄もゐるやうだつたら他の家へ遣るか、北向の暗い室にでも移す。口を添えた知合の者の話によれば、女は東京者で、何か不幸に遭つたため此春から松島在の高城といふ町にきて、遠縁の家に厄介になつてゐた。ところが又都合あつて歸京することになつたが、行がかりの用事で少時仙臺に足をとめねばならぬ。泊めて貰ひたいと少しの手蔓を便りに内儀さんの知合の家にきたのだが、その家は多人數の手狹で、二三日でも到底泊めておく譯に行かぬ。幸ひ當時は休暇中で、空間があると聞いたから、面例でも少時此女を世話してくれと賴まれた。私も手少なのところを臨時の止宿は有り難くないが、去迚斷乎斷る口實もないので置くこととしたから、御迷惑ではあらうが含んで貰ひたい。間違はあるまいけれど、婦人客だから斯う申上げて置く。

二の腕がらずつと裸出の、だぶ〱肥つた手にとまる蚊を折々叩きながら、づうづう辯て話し終つた内儀さんは頭を下げて、「そんてはァ、先づお明日！お休みのとこを御無禮申しして」と下つて行つた。

雨戸を締切つたので遽かに暑苦しく、部屋中がもッ〱して頭が重い。疲れてゐるのにどうも睡れんて堅次は廣い蚊帳の中を輾轉しては、兩足をどたりばたりと投げ出す。蚊帳の隅にぢつと目をつけてゐると、父母や弟妹のことが思はれてくる。目を瞑つてゐると今度は北條の砂原や、かづ子さんの白い海水浴着姿が顯然と目前に出る。端書を出せばよかつたと裂捨てたのが惜しくなる。白河で正宗を三瓶買

込て、べいろしやになつた男が、郡山の停車場で落ちるかと思ふほど軀を車窓からのめらせて萬歲を唱へたのが、二三驛髙軒で眠り通して、福島で乘越したのに心付て、悄然と出て行つた樣子を思ひ浮べて堅次は一寸獨り笑みしたが、己も酒でも飮んだら睡られるかしらと又寢就かれぬのが氣にかかり出す。焦るから寢られんのだ、落ち付かうと一つ寢返りして、息使ひも成るたけ窃として居る。

二

翌朝堅次が床を出たときは八時を少し廻つてゐた。妙に神經を刺激されて、十一時であつたか十二時であつたか、内儀さんの寢てゐる別棟から、寂然として死んだやうな眞夜中の空氣を通して時計の打つのが微かに〳〵響いたのを夢うつつに聞いた後、何時眠るともなくぐつすり寢込て、不圖眼をさましたのは六時頃であつたらう。一度寢込むと、一寸目を開いても、その睡たさは又格別で、又その儘快眠して了つたのである。

蚊帳を外づして雨戶を繰る。強い濃い光りの波が庭、塀、屋根、大地の差別なく蔽ひ被さつてゐる。けふも暑いなと謚きながら、堅次は齒楊子を啣えて、折曲つて履脫に出た。上り口の戶は開け放されて、繻珍の鼻緒をすげた三枚疊の麻裏が、外から這入て來たなりの方向で、少し不揃ひに脫ぎ棄てある。門を這入た右の塀際に井戶があつて、板敷の洗ひ場には釜が飯粒の着いたまゝ、底に水を入れて斜に立掛てある。一方には脚の長い木盥が伏せてある。下宿人は自から水を汲上げて、此盥で、此洗場で手水を使ふのだ。梅雨時分には洗ひ場の椽や、朽ちた井戶側によく蛞蝓が匍つてゐたことを思ひ出して、

黒ずんだ濡れた木盥が堅次は厭だつた。

此方からは見えぬが臺所で物音をさせてゐた内儀さんは。　釣瓶繩を手繰る音にそれと知つて、塀に向いた水口から顏をのぞけた。

「お起なさりしたか、お早うござりす」と挨拶しながら、とうとうとうとうとゝと雞を呼ぶ。眞直に通路を殘した丈で、門の塀際から母屋の壁際迄廣がつた畠から、毛澤の佳い、雞冠の赤い牡牝が――是れを土地の人はシャアマといふ――聲を聞きつけて飯櫃の洗ひ流しを啄みに寄つてくる。いゝ、いゝ、たこんばちを被つた百姓が小山ほど薪を荷駄馬につけて、木や〱アとのそ〱門外をふれて行く。

堅次が團蒲を疊んでゐると、名前ばかり美くしい花代さんが箒と拂塵を持て這入てきた。

「婢がゐないて忙がしいね。」

「はア」と相變らずな返事しながら、机の上と押入の襖とを二つ三つばた〱やつて、そして疊の眞中だけ掃いてゐる。

掃除を避けて堅次は椽側に出た。左に折れると昨夕からの婦人客の室で、障子は外づしてある。中形模様の單衣が汗取を重ねたまゝ衣紋竹に通して庇内の釘に釣るされてゐる。堅次が廁に通ふには此室の前を通らねばならない。まだ面も名も知らず、口を聞かんのだから、女性に近づいたことの殆ど無い堅次は只庭ばかり眺めてゐた。鹽釜から三番の上りが轟々と重苦しい音に地響きをたてゝ、直近所の踏切あたりを通る。

掃除が濟んだので部屋に這入る。さて飯だがこれに堅次は又弱つた。部屋〳〵に膳を運んでくるのではなく、下宿人は北向の暗い一間で、給仕も付かず一所に食ふのが此家の——大概何處でも素人下宿は斯うだ——常例である。慣れると獨りぼつちの寂しく濟ますより可いのだが、最初は我も他も何となく氣拙い。それも男同士なら遠慮も何もないが、けふは生面の婦人と只二人きりだ。一寸挨拶しておけば宜かつたともじ〳〵してゐると、內儀さんが飯櫃の上に膳をのせて片手に味噌汁の大鍋を提げて堅次の室に這入てきた。

「御飯が晚うなりして、何ぼかおすきなさりしたべ」と何時になく飯も汁もよそつてくれた。

「なに、僕が朝寢したものだから」と堅次は安心して箸を取つた。東京の自家の飯を少時食つてゐたので黑い、强い、澤のないのが酷く目立たが、それでも旨い。一通りよそつてから內儀さんは少し聲を低めて、晝飯からは是迄通り裏向の室で皆一所に濟ましてくれ、彼方の女にもさう言つておくからと言ふ。厭だとは無論言へぬので、宜しいと答へたが、しかし堅次は當惑した。堅次の柔順しい、口數の少ない男といふことを內儀さんも心得てゐるので、その顏色をみては默つて下がれもしない。

「貴方樣は何ぼか御迷惑でござりすべけど……婢はまだ歸つて參りせんし手がねえもんだて」としばし考へてゐたが、「女さんとお二人ては貴方樣も何てござりますべけど……。」

「なに、可いてす」とせか〳〵飯を搔込む。

「お晝飯には川田さんもお歸りなさりしてがすからねす——お汁お代へなさりせ」と大きな聲を出す。

澤山、と辭して、それから、
「あゝ、川田君が歸つてきますね、それぢや可いです。」
「はア、そんでは何卒、お笑止樣でがすけど」と二人とも安心した。普通の聲で二つ三つ話しするうち飯が濟んだ。お粗末さまでと内儀さんは下げて出る。
　並ぶのは厭、對座はきまりが惡いる、如何せうと朝から晝飯の取越苦勞したのも、郵便局から川田が歸るといふのでほつと息は吐いたものの、やはり堅次は何かしら胸に支えてゐるやうな氣がする。川田は齡が齡、勤めが勤めて慣れたもの、擦れたもの、女に立向つて踋む柄の男ではない。下らぬことを眞顏て言つてはよく腹の皮をよらせる。佛頂面のこゝの少女まで此男の話には相形をくづしてげた〳〵笑ふ。けふも歸つてきたら、あの傳て婦人客を笑はすだらう。
「厭な奴だ」と堅次は小聲ながら口走つた。
　婦人客はどんな女か知らん。履物着物から推すと年寄てはないが、昨夕の話し振ては餘り若くもなく餘程人擦れた女らしい。夜晩く外出するのをみても處女てないことが解る。あの樣子ては川田と話しが合つて――合ふどころか巫山戯るかも知れない。……いや皮相を以て他を斷ずるのは酷だ、况んやまだ一遍も會つたことのないのだから皮相以上だ。是れは失敬だつたと正直な堅次は直にその想像を取消して了つた。
　會つて見たいなといふ聲が胸の底て囁く。名は何といふのかと知りたく思ふ。堅次は空想の好きな靑

年である、又小説の好きな青年である。空想と小説では屢々女性と肱を取り、膝を突き合すが、現實の女の手の温かい柔らかいものであることは、北條の海濱をかづ子さんと歩いた時初めて感じたのだ、けれどもそれも左樣感じたばかりでその外――に戀も愛も自覺したのではなかつた。なかつたが併、異性に對して一種の味を知りそめたことは拒まれぬ。そこで面識のない隣室の女が氣にかかる。

内儀さんが隣室にきて何かひそ〳〵話してゐる。内儀さんの言ふことは聞きわけられぬが、相手の女はよく通る聲で語尻も判然してゐる。輕いけれど前夜ほど粗雜でない。扨内儀さんは飯時のことを話してゐるのだなと女の返答で知れた。

内儀さんが出て行くと女は輕く咳して椽側に立つた氣勢だ。足音は奥へ進んだ。少時すると又此方へ近づいてきた。

「御免下さいまし」と堅次の思ひがけもなく堅次の室内を覗きこんだ。

三

藤巻お柳の方から面出をして、陰で聞いてゐたとはまるで反對にしとやかに、つつましく、厭味の無い愛嬌をみせて、初對面の挨拶を濟ました。荷厄介にしてゐた飯時も、二度三度と重なるにつれて段々飯が旨く面白くなる。女だけに折々はお柳が二人に飯をよそつてくれたり、汁椀を代へてくれることもある。川田は無論恐悦て、眞顔で冗談を言ふ。沈默寡言ではあるが堅次も内心嬉しかつた。

お柳はいくつになるか、女を知らぬ堅次にはよく解らんが、東京の姉に較べて少し老けてみえるから

二十六七の年配だらうと思ふ。自分の姉は痩形で脾弱だが、このお柳さんは丈夫さうである。顔は小さいが頸筋から肩にかけては肉付よく、胴も腰も太い。聲ほどに容姿は美くないと堅次は思つた。只色は白いが、光澤が悪るい――底に紅味をもつた白さではなくて、蒼白い、鉛色だ。それが湯に這入て、白粉を塗つて、銀杏返の頭に櫛の刃をいれると見違えるほど美しくなる。何故あんなに白粉をつけるのだらうと考へて、自分の姉も夕方湯から上ると白粉をつけるから、この女も斯うなのだらうと解釋した。東京の女が容貌を作り服裝を調へることは堅次も知つてゐる。

斯うお化粧してお柳さんは大抵毎晩出かける。一二時間で歸ることもあるし、泊つて朝ぼんやり歸ることもある。さういつた折は川田が、情夫と寢てきましたなと失禮なことを例の眞顔で言つて、水を向ける。えゝさうよ、貴方みたいに小包みの袋と雜魚寢ぢやなくてよと、お柳さんもづけ〳〵言ふが、堅次に尋ねられた時はおほゝと只笑ふだけだ。

笑ふだけて、小供あしらひにされるのが堅次は何となく物足らぬ。如何して己は斯う怯るのだらう、臆すだろうと我が含羞の癖を恥かしく思つた。我れを恥づると共に、川田の思ひきつた無慚の所業を憎らしく思つた。

川田ばかりではない、友人の學生中にも隨分酷いことを言つたり爲たりするのが居る。穢ない忌はしい、卑猥な情緒を他前に晒け出す奴が居る。そんな行爲は決して擬てはならぬが併その勇氣は己も欲しいものだと思つてきて、思はず聲をあげた。

「何爲！何が如何したんだ！」

堅次はどし〳〵濶歩して、どん〳〵會談して、何人をも正面から睨みつけて、微懼ともせん！と氣ほつたのである。

今日は川田もお柳も朝から出て行つて留守だ。學期の初めに出す校友會雜誌に堅次は一文を寄せる約束がある。いつも論説欄が振はんから、一つ文藝上の論文をと、編輯者から頼まれてゐたが、東京の自家は多人數でごたごたしてゐて書けなかつた。遊びにほうけて房州でも徒爾だつた。閑靜な、誘惑のない仙臺の下宿で書かうと、それで早目に歸つたのであるが、思ひがけぬ隣室の女客のために、生來知らぬ全く新らしい感じ――それは快感だか苦感だか自分でも判然しない――を教へられて、此二三日は如何してもお柳の姿を胸の中から拔き脫ることが出來ない。

お柳さんは左程美人ぢやない。湯上りの化粧たところは一寸美くしくて佳い匂ひをさせるが、決して美人といふのぢやない。又妙齡でもない、自分より五つ六つも年長女だ。それにどうも處女ではなくて他の妻――らしくもないが。氏素性は勿論解らぬが、併、お柳の身邊には何となく卑しい、それと明らかには言ひ表はしがたい或物があつて醜な女らしく思はせる。

そんな女が何故斯う氣にかかるだらう。

「これが戀かな」と口に出して、堅次は赧然赤くなつた。己のやうな乳臭い者が、えたいの解らぬ三十近い女と戀をする……そんな理窟がないや、と堅次は猶豫なく此妄想を排除けた。

しかし西洋の詩人などには年上の女と戀したのが隨分ある、と又堅次は筆を措いて原稿紙を眺めてゐる。歴とした他の夫人や、地位の低い女役者などと戀仲になつて、美はしい生涯を送つたのがある。詩だ！　牧歌だ！　それぢや何も理窟に合はんことは無いぢやないか、己とお柳さんと戀を――神聖戀愛なら罪惡ではない。

斯う考へてきて堅次は、お柳が廻り椽をぺた〳〵小い音たてて往來するのだの、他の面を見て直き兩頰に笑窩を入れるのだのを思ひ出して、その足音を聞きその笑窩を見たくなつた。書いた紙を數へると三頁半、それも半分は塗り消してあつて、殘つた文章は何程もない。今のうちに書いて了はぬと又妨げられる。書かう、と筆に墨を含ませて思想を引出さうと靜思する。書くべき論文の文句は出て來んで、嘗て讀んだ小説の詩的な句と戀の語が心に浮ぶ。それが最初は淸淨な、綺麗なのであつたが、段々不潔い、醜な語句となる。するとその文字が何かの機會にお柳の露出た襟元から胸にぴたりと箝つて、それが今度は堅次の、自らすら厭はしく思はるゝ情緒とこんぐらがる。

「厭だ」と筆を投げて兩手を後ろ頭て組て、目を瞑つて仰向に倒れた。

「腦を冷さんけや徒爾だ。」腦を冷やして而して穢れた情を洗ひ去らふと稚氣なる堅次は思つたので。

バケツと盥と柄杓とを借りに離れ屋の水口に行く。夏中は塞いてある大きな圍爐裡の板の上に内儀さんは、袖無も脫いた腰巻一つの裸身を兩鳶に座つて、べつたり臀部を冷たい蓋に付着てゐる。襤褸をせゝくつてゐたが、堅次の面をみると駈け出してきて、

「何つう暑いんだかねす、朝から。はア、お拭きなさるのすか。頭あお浴んなさるなら花代に水かけさせすべ。」

「いや、可いてす、僕自分でやるてす。」

亂暴に釣瓶繩を手繰る、冷たい、氷のぶつかきのやうな水玉が、釣瓶の井戸側やバケツに摑着る毎に炎天干の軀に跳ねかゝつて氣持が可い。手早く汲んでそそくさ軒下へ逃げ込む。

麻裏ばきの踵と紺絣の裾を土ぼこりにしたお柳が門に這入てきた。長い細柄の傘を肩にかついて、片手はだらりと下げてゐる。生え際に玉の汗を浮べて、おくれ毛が頰に粘りついてゐる。

堅次は今屈み身になつて脹ら脛のあたりを擦つてゐるので、飛石の上を踏むお柳の足音を心づかなかつたが、ひよいと頭をあげると直傍まできて、笑面をみせてゐたのだ。堅次はどきりとした。内儀さんは出てくるだらう、少女も見てゐるかも知らない、誰かが這入てこないとも限らんとは思つてゐたが、此の體をお柳さんに見られやうとは全く意外であつた。そこて、周章いて、狼狽しながら、「はッ、どうも」と解らぬことをいふ。

「まあ、どんなにか快いお心持てせうね、貴郎」とお柳は傘をつぼめて、「私も拭かうかしら、着物脱いて。」

堅次は急に喉を詰められたやうて口があかない。片足は拭きのこして、盥の水もあけずに駈込て了つた。

後からお柳も這入て行つたが、やがて浴衣の細帯姿を軒下に又出した。

部屋に駈込だ堅次は首を縮めて、肩をすぼめて、できるだけ小さくなつてゐる。

「あゝ、弱つちまつたなあ、飛んだところを見られちやつたなあ。」

「おう冷たい、ほう冷たい」といふ能く通る聲が外で聞える。

「あ、お柳さんが水を浴びてる！」堅次は身震ひして、驚いて掌で口を蓋する。見てやらう、見られた返報だ。」

急いで兵児帯を巻きつけて部屋の入口に寄る。三尺の入口には障子が一枚たててあつて、今のさき駈込んだ時我れにもあらず閉めきつたのだ。戰慄する手を引手にかける途端、はつと思つて机の前に引返した。

「何て野卑な精神だらう、己は。」

堅次は兩手で面を蓋して、机の上に突つ伏してしまつた。

四

お柳は面やら頸やら十分に拭いて上つた。鬢髪を梳つけて、浴衣の襟を合せて、そして繻子とメリンスの腹合せをしやんと締めた。少時閾ぎはに座つて團扇使ひしてゐる。松の木の間で翼も軀も褐色な大蟬が二三匹暑さうにぢやん／＼掛合ひて喧ましく鳴き立てる。青地の大空に白い雲が一塊づつ補布をあてたやうに圓く見える。眺め飽いてお柳は立上つて、風通しに釣るした紺絣の袂から「大和」の袋を取

り出した。堅次の室の方を振返つてから、奥に引込んで煙草に火をつける强く吸ひ込だ烟りが鼻の腔からすうと二筋長くたつて、やがて開いて消えうせる。半分あまり吹かしてお柳は揉み消して了ふ。その殘りを持つて厠に入つた。

堅次の父は高等師範の敎授で嚴格の人だ。祖父は禁中非藏人を勤めた人で、東京の自家に七十餘の老體を夥多の孫と健かに暮らしてゐる。隨れて家庭が淸く美はしい。堅次はこの父と祖父のもとに二十年の春秋を過ごしたが、去年の九月から此地にきて第一部の文科にゐるが、同窓の或學生のやうに梅林亭に藝者を呼んだり、對橋樓の踊り子に戯れたりしたことは一度も無い。是れはその家庭の淸淨な譯にも因るのだが又、その怯懦の性質が女に近づかなかつた原である。お柳の水浴姿を覗かうとした刹那はつと思つたのは、鄙しい情慾の發作をしたが耻ぢたためでもあるが、又思ひきつて隔ての障子を開く勇氣を缺いたからである。

何故己は斯う臆病なのだらうと齒痒ゆさうに身を悶える。冷水摩擦のところを他に見られたつて、何も憚ることは無いぢやないか。それに己はあわを食つて何とか妙なことを言つた。お柳さんが何とか言葉をかけた時、己はまるで返事ができなかつた。返事もせず逃げ込だのだから屹度おかしな人だと思つたらう。吁、意氣地がないなあ己は、と考へて、開けかけた障子を開けず仕舞に中止たのが何となく小耻かしくてならぬ。決心したことを貫かぬのは男子として恥づべきことだ。

斯う考へてきて堅次は胡坐の腿についた手を杖に兩肩をあげて、同時に腰を延して佶とみえをした。

濃い一の字眉が昂つて、唇が細く横に引張れる。やがて堅次は引絞つた唇をゆるめて、無氣味な薄笑ひをみせたのだ。

「小田さん、御勉强ですの」とお柳が障子の外から小聲で音訪つた。耳の傍で午砲を聞いたほど吃驚して堅次は腰を浮かせた。ひよいと首を振向けたが直元に返すと、今度は我知らず手を後にやる。後にやつた手先をむづむづさせながら又首を廻す。ちらと障子に目をつけて又すぐ外らした。

「固いこと、よ、よ」と引手に手をかけて、引いても突いても開かない。内の男はうんともすんとも言はず、固くなつてゐる。

「一寸お邪魔したいんですけれど……。」

勇氣！　勇氣！と堅次は腹の中で呼んで兩手を藻掻く。

「小田さん、小田さん」と女は二度呼んだ。

「はツ」と頓興聲を思はずあげて、内の男は勃然立つた。

「濟みません、どうも」と言はれて、一寸立竦んでゐた堅次は我れに返つて、兩手をかけて力まかせに横に引く。三尺の入口が殘らず開き廣がつて目さきに蒼い顏！

肥つた白い裸身が立つてゐると思つてゐた男の――全く肥つた白い裸身を豫想してゐたのが此瞬間の堅次の心理現象である――驚きといつたら無類つた。

「濟みません、どうも」とお柳は又靜かに言つて、小腰を屈めて部屋に這入る。「如何でせう、午前から

お暑うござんすこと。」

「はあ」と言つたぎり、堅次が座に着かないので、お柳も一寸てれ加減に、まだ立つてゐた軀をその儘、椽先に出て、庭の飛石のまはりに赤く、白く、黄色に咲いたひでり草に目をやつた。

「おすはんなさい」と堅次は漸と聲をかけて机の前に腰を下ろしたが、是れは女より一層てれて、只擴げた原稿紙に目を落した。

「ありがたう。」中へ這入て、男から二尺ほど離れたところに丁と蹠を揃えて座つて、「お暑いのに貴郎はよく御勉強ですこと。」

「いえ、勉强ぢやありません。」

「だつて些とも出て被來らないぢやありませんか。少し私のとこへも被來いな、川田さんは始終話しにいらしてよ。」

「は、伺ひます」とまだ女の顔をみない。一寸五分刈の頭を掻いた。

お柳は心持膝を進めて、少し低聲に、「ですけれど私、川田さんはあんまり面白くないんですよ、だつて眞面目腐つてよく他をお冷かしなさるんですもの。」

「さうですか。どうも——。」

「それや冷かされて嬉しかつた時もござんす私だつて。ですけと、それやずつと昔しの、若かつた時てすわ。今ぢやもう私お婆さん。」

おほゝとお柳は白い歯を出した。

「いえ、そんなことは無いです。」後を付けたいが、何と言つていいか解らない。

「貴方、私いくつだと思しめして？」と女は堅次の俯向いた面を覗きこんだが、直首を後に引いて、「あ、ですけど貴方、あてやうとなさらないが宜ござんす。自分ながら愛想のつきるほどお婆さんよ、全く私。」

「いえ、さうでないです――そんなことはないです。」

それは聞へぬかのやうにお柳は貝細工の簪で濃い髮の髷の根をグイ〳〵掻く。向ひあつてよく見れば左程美男ではない。若い女が目で惚れる側の好い男ではないが、と言つて醜男では尚ほない。色は日に焼けてゐるけれど隆い鼻の、盛顔だ。大きい華かな目の活々した瞳をお柳は男らしいと見た。是れてゐて何故斯う悩々するのだらうと考へて、世の汚れに染まぬ生だからだと決めた。心も肉も荒れすさんだ自分が厭になつて、こんな無垢な男と一所にゐたら、どれ程か嬉しからうと熟々堅次が見守られる。

女に目の前に坐つてゐられるのが憑物に憑かれたかと思つた堅次も、少し落付て、女性の匂ひが匂つてきた。茶器を本箱の上から取り上げる。相馬焼の急須の蓋を取つてみると茶殻の這入たままだ。湯も無いので立上らうとすると、

「あの、私もうお茶は澤山ですから。」

きまり惡るさうに中腰の儘てゐたが、東京から持參したビスケットのあつたのを思ひ出して、鑵を先

づ女の前に出す。

「お構ひなさらないて」とお柳は鑵の張紙に目をつけて、「貴方東京て被在いますつてねえ。東京はどちらて、お宅は。」

「右京町てす、四谷の。」

「あゝさうで。それぢや私の自家の御近所てすわ。」

「あ、さうてすか」とは言つたが、何處だとも尋ねない。一寸女の面をみて、又目をそらして了ふ。女は懐かしげに一膝搖つて出て、右の爪先を横にくづす、肥り肉の膝頭が開きがちになるのを引ぱり合せて、「私、信濃町の停車場の直近所てございますの。甲武電車の停車場の。」

「さうてすか。——おつまみなさい」と鑵を押しやる。

「え、ありがたう」と受けて、「東京は宜しうございますねえ、貴方も東京はお好てせう。」

「えゝ好きてす。」

「私も好きよ。歸りたいわねえ」と獨り言のやうに言ふ。

「お歸りになるさうぢやありませんか。」稍々平生に返つた堅次は、ぢつと女を見つめて、ビスケットをつまみながら言つたのだ。

「えゝ、歸る筈なんてすけど、よくまだ解りません。斯うして此四五日待てる話が纏まれば歸れるんてすけど、如何なるんてすか。」

自分の過去を堅次が知てゐるのではないかと不圖思つてお柳は、何物をか探し出さうとするやうに、凝然と男の面を見入つた。今迄感じたことのない恐ろしさと耻かしさが突如に襲つてきたのである。

「だけど、東京に歸つたつて私詰りませんわ。」

出掛つた後の文句をぽつりと切つた。既に知られてゐるのなら是非もないが、幸ひ何も怪んでゐないらしい堅次には、吾が經歷を匿して置きたい。可愛がられぬ迄も不快な女と思はれたくない。對座つて話するのはまことに快いのだけれど、その爲め君しか身の缺點を見つけられてはならぬ。

「どうもお邪魔しました」と突然言つて、「些私のとこへも被來いな、私獨りぽッちで淋しいんですから。」

「ま、可いでせう、まあ………。」

「え、また」と挨拶もそこ〳〵出て行つた。さほど讀みたくもないが、新聞か小說でも借りやうと思つてきたのに、そんなことはお柳は忘れて了つた。それでも、訪ねて行つた効があつたやうな氣がして、何となく心嬉しかつたのだ。

五

川田がゐないので晝飯は二人きりで、言葉少なに、寂しかつた。憂きはお互ひに、思ふことある堅次とお柳は、茶碗のやりとりを二三度したゞけ、なまり節に鮭卵といふ不味い食事が一層不味かつた。

食事が濟んでからお柳は頻りに吾が部屋で遊んで行けと堅次を誘つた。煮えきらない返事をしてゐたが、手を取らんばかりに勸められて、それではとお柳の四角な室に這入て、彼の三言に是は一言返しな

から、氷水のご馳走になつて、三十分ほど話して、又自分の居間に這入て行つたのだ。
隣町あたりを、ぼやけたやうな聲で物賣が通る。人氣少ないこの家の夏の日ざかりは、惰けた軀を投げ出して「暑」に食はれるにもつてこいだ。
龜さんは本當に如何したのだらう。何ぼ何でももう何とか言つてきさうなものだと、お柳は肱枕をしながら考へてゐる。あんなことを言つたつて餘りあてになりはしないけれど、三十圓の前借まで拂つてくれたのだから滿更ちやらつぽではあるまいと思ふけれど、
「だけど龜さんは全く獨り者かしら。」怪しいものだと思ふとお柳は厭氣がさして、あんなことを言つて空喜びをさせた男は幾人もあつた——米澤織を商ひにきた山形の彼もさうだし、去年の夏の蚊帳商賣だと言つた彼もさうだし、……吉ちやんの彼人もすつぽかしを食はせてあれつ切だし、綺麗に足を洗つたのはお市ちやんだけれど、それも半歳たつかたゝない中に又壽美屋の店に座つたさうだ。二度三度出たり引込だり、厭なこつた。
お柳は吁と太い長い吐息を漏らした。軒の低い、暖簾の重い飲屋の腥い濕つた空氣熟柿臭い香を吹いて銅羅聲をあげる醉漢を目先に浮べたせいばかりではない。男を知りぬいてゐる女は、女を知らぬ男に少なからず心を動かされた。女を知らぬから頼もしいの可愛いのといふのぢやない。それどころか、あゝいつた男は乾度齒痒い、少慣いだらけだらう。話しをしても調子が合はんて、間が拔けて、味も香もありはしない。けれども唯、新らしい、珍らしいといふ思ひは起る。何のへんてつも無いけれど、氣

が拔けてはゐない。拔けたのではない、まだ潮してこないのだ。

「あすこが氣に入つたよ」とお柳は莞爾して、「可笑しな人だよ、本當に何て馬鹿だらう。」

併お柳は世の鹽を踏んでゐる。あゝ見えても存外馬鹿でないかも知れない、もう女を知つてるかも知れない……解つたものぢやないとも又お柳は思つた。ばたりと足を横にかへした。あいた手を腰から滑り落して、ぐつたりしてゐる。

しかし實際まだ堅次は女を知らないのだ。尤も男女の關係といふことは他の話で聞いて、鄙しい穢ない言葉も心得てはゐるが、その男女の關係を、是れと形のある自と他との間で味はつたことは無い、猥らな語も交へたことは無いのだ。

先程もお柳の部屋で二人對向つて話しをした。座を立つた時女が後ろから自分の肩に手をかけた。思はず振返ると、目と目がかち合つた。ほゝゝと女が笑つた。まあ、恐い面と言つた。自分は決して恐い面をした心算ではない、肩をつまゝれた時驚きはしたが失敬だとは思はなかつたのだから、若し恐い面をしたとしても、それは自分の知らんことだ。失敬どころか、嬉しいやうで耻かしいやうで、恐ろしいやうで、それで又驚かされたやうであつた。

他は男女の關係を野卑なものだといふ、汚穢なものだといふ。さうか知らん、それだけのものか知らん。も少し淸い、貴いものがその外に在るやうに、どうも自分には思へたのであつたが——

「果して思つた通りだ」と堅次は我が考への正しかつたのを得意に思つて、机にすがつてゐた軀を仰向

に後ろに長くなつた。けふ丁と對向つて話しをしてみると少しも卑しいことはない、肩を叩かれてみると些とも穢ない感じは起らない。大變快い氣持て、今でも微痒いやうだ。ほゝゝと女が笑つた時、何故己もはゝゝと笑はなかつたらう。恐い面と言はれた時何故己は——何とか、何とか巧く調子を合さなかつたらう。

「やつぱり勇氣が無いんだ！」と堅次は腰に力をいれて勃然起き返つた。女が肩にかけた手首をぐつと握りしめてやらなかつたのが殘念てならない、一期の不覺と悉々しく後悔する。

いや、握つちや不可ん、それぢやゝはり弱味をみせることになるから、手荒くはね除けてやるのだ。さうすれば勇氣の證明が立派に立つて、證明が立てば尊敬してくる、尊敬すれば自然女の方て從順の態度を採らんければならぬといふ順序になる。男は剛健、女は優美、これが人間の生命だと單純な堅次は綺麗なことばかり夢みてゐる。

六

朝からどんより曇つて、頭を壓しつけられるやうな日である。寢てゐる中から蒸暑かつた。

此二三日堅次もお柳も少憤て、悶えて、暑さは暑し、彼方へばたり此方へごろり、苦しい心を盛た軀を持あましてゐる。

九時頃お柳のところに郵便がきた。待て待てゐた龜さんからかと思つて、玄關先へ飛び出してみると、さうてはなかつた。さうてはないが、龜さんのことて高城の今迄ゐた家からよこしたのであつた。

披いて一通り讀むか讀まぬにお柳は畜生！と叫んで、投げつけたが、又取り上げて、も一度讀み直した。今度は讀み殼を寸斷〳〵に裂きちぎつて疊の上に叩きつけた。そしてその上に少時突伏してゐたが、上げた時の面は、常の蒼白いのがどす黒い赤味を帶びて、何とも言へぬ色。一時に疳が熾えたので、額が汗じんで、亂れ毛がぴた〳〵粘りついてゐる。

少時唇を咬んで、おいと空をみてゐたが、いきなり立上つて裝束したのだ。巾着を帶に挿んで、川田にも堅次にも言葉をかけず、お内儀さんだけに一寸高城へ行つてくると言ひ殘して、停車場に驅けつけたのである。

晝飯が濟むと川田は局に出て行つた。井戸傍に出てゐた内儀さんからお柳は是れ〳〵だと聞いて、そんてはア急に色男を思ひ出したんでがす。泊つてくる言ひしたべ、お内儀さ。」

内儀さんはは丶丶丶と高笑ひして、「大概歸てくるつもりだけんども、若しかすッと泊るか知んねえつうて居りした。」

「若しかすッつうこともがすめえて、はゝゝゝ」と笑つたが、「お柳さは情夫と寢さ行ぐ、己はア蒸室のやうな宿直室さ不寢番さ行ぐんでがす、お内儀さ。」厭んだ〳〵と投げ出したやうに譫きながら、嘉平次の袴をべらつかせて、埃て鉢卷の茶色になつた中古るの麥藁帽を阿彌陀に冠つて門を出た。

外も風のけも無い、只生暖かい空氣が鬱陶しく蔽かぶさつてくるばかりだ。

堅次は永い一日を持扱ひかねた。自分のものでないやうに軀が氣慵い。雜誌に出す論文が氣がかりて、

此間中から何度筆を持て何度投出したか解らぬ――まだ半分も書けてゐない。論文などは如何でもいゝと思つても、又さうも行かぬと思ひ返される。胸と腦とがしつ切なしに苦しい。

一昨日の日暮方、薄暗い椽側で恍然としてゐるところを、お柳にいきなり羽がひ締にされて以來、尚ほ胸が苦しくなつた。驚いて振りほどいて、何をするんですと自分は怒つた。厭て怒つたのか、恐ろしくて怒つたのか、それは判然しない。

振解かれた手をお柳さんは一寸所在なさゝうに、少時默つてゐたが、それから、貴方怒つたの。失禮、御免なさい。貴方が懷かしいものだから、と言葉を切つたのだつた。何が懷かしいんですと尋ねたら、だつて貴方は東京の方て、私と直近所の方だから、それだから懷かしいと言つた。そんな馬鹿なことが、とあの時は思つたが……姉さんも人の面を見ると懷かしい〱といふ。阿母さんもよく懷かしい〱といふ。人の面さへ見れば女は懷かしいものか知らん。生れ故郷を離れて、こんな遠方へきてゐて、そして鄕里の方に遭ふと懷かしくてなりません、とお柳さんは言つて、それだから、あんなことをしたんてすと又付け足した。

先達て肩に手をかけたのも懷かしいからか、一昨日後から抱きついたのも懷かしいからか。それだから、といふだけては何やら物不足の感がある。もつと何か、何かもつと他の理由が欲しいと思ふ。それだけては親子でも兄弟でも可いのだ。それ以外の關係がお柳さんと自分との間にはありたい、二人の間に男女の關係がついても不都合はあるまい、先達ての事てみても一昨日の事て見ても、卑穢の感情は少

しも起らんのだから。

振りほどいたのは勇氣の證明が立つたやうて嬉しいが、又殘り惜しいといふ思ひが何處からともなく首をもたげて、嬉しいが嬉しく思へなくなる。如何したら眞に嬉しからうといろ〳〵考へる。少らく考へてゐた堅次はにやりと溥笑ひした……。

「馬鹿、それこそ墮落だ！」と呶鳴て、疊を踵て蹴た。

空を鎖した灰色の雲はます〳〵厚く濃くなつた。雨蛙が庭の梢でぎやァ〳〵鳴きだした。雷氣があつて、もう餘程久しく遠方で、波の鳴るやうな音をさせてはゐるが中々近よつて來ない。折々生ぬるい風が重々しく吹くから到底白雨の望みはないらしい。

夕餉を終つてから堅次は散歩に出た。茂市ヶ坂を下りて大町を突切ると、廣瀬川の大橋に出る。欄杆に凭掛つて川面を見わたす。水は七分通り涸れて、對ふ岸の低いところが僅かにせゝらいてゐる。塵芥の引掛つた砂礫の川原に屈んで、尻をむき出して何かしてゐるのは、枇杷首の端あたりに住む百姓が夜釣の支度してゐるのだらう。向ふ鉢巻の子守つ子が、いぐひす(鶯)や初音つん出せ聞くべいにと、腹掛一つの裸つ兒を背中で搖ぶりながら橋の上を彷ついてゐる。彼方此方に白い面、白い浴衣も見えるが、盛んに通るのは黒い面、カーキ服の兵士で、川内の聯隊に歸つて行くのだ。

目に入る物が皆穢くみえて堅次は尙ほ頭が痛くなつた。橋を渡つて左りに折れて、今度は天守臺に上る。之の字形の坂路の、高い榧低い雜木の間を三四丁上ると、廣い城跡だ。平地の中ほどに、征露紀念の

金鵄の両翼を張つたのが幾丈かの高い臺石の上に据えてある。その側を通つて、巨大なる自然石を打缺いて築きあげた石垣の突端に出る。直下は樹の枝で何も見えぬが、遙かに川筋が帯を解き捨てたやうに望まれる。

堅次は嘗て此上に立つて、青葉下から愛宕山の裾を廻つて長町まで左右に長く建て列ねられた市街の、無數の常綠木の間に匿されて屋根は殆ど見えぬ仙臺侯の城下を、實に大きなものだと眺めたことがある。市の東の端は躑躅ヶ岡から、低く宮城野が幾何里彼方かの海岸迄續いて、快晴の日には金華山が煙靄模糊の間に望まれるのを、廣大な景だと賞したことがある。それにけふの今は薄暗い、重く濁つた中に、朧ろの火影が暑苦しく見えたのである。宮城野も耀やく海も無論見えない。下らん市だ、小さなものだと思ふと、蚊か蜉蝣かわん〳〵唸つて急に目鼻に撞着るのを感じてきた。

「馬鹿な、何だつてこんな所へ上つたんたらう」と憤然しながら下りて、何處へも寄道せず、又面白くない下宿に歸つて了つた。

生ぬるい風すら又ぱつたり落ちて、雷の遠鳴も聞えなくなつた。白雨も到頭かゝらず、只むし〳〵と厭に暑い。

七

寢苦しい〳〵と惱みながらも何時か眠つたとみえて、不圖目が覺めた。洋燈の心が螺ぢてあるのに火屋が曇つてゐるので火の色が變に赤くて、油を吸ふ音が蟒蝤でも鳴くやうにぢい〳〵とする。咽が乾い

てたまらない。茶器は就眠時に小娘が下げて行つて、湯の藥罐も無い。お柳も川田も留守だから、湯を貰ふには內儀さんを起しに行くほかはないが、手も足も、わけて脹ら脛が氣惰くて、とても起上る力がない。水を飲みに井戸端に出るのも厭だ。

戸を閉めきつた家の中がいかにも暑い、室の中、蚊帳の內、蒲團の上は茹るほどである。重い脚を引摺つて出て、雨戸を一枚繰る。曇つてはゐるが月夜なので薄明るくて、そしてこそりともせず寂然としてゐる。何時かと枕もとの白銅時計を見る。一時を少し廻つてゐる。眞夜中だ、と思ふと遽かに淋しくて、廣い古い家の中に一人きりなのがひし／＼と感えて氣味わるい。

うつら／＼してゐる耳に門を開けたかと思ふ音がかすかに聞へた。それぎり物音はやんで了ふ。空耳だつたかと思つてゐる矢先に、とん／＼と又聞へた。ぱちりと目があく。小い音ではあるが、それは上り口の戸を叩くのだと知れたからである。

「お柳さんぢやないか。」とん／＼と二つ叩いた刹那に堅次は斯う感じて、斯う聲に出したのである。

「とん／＼。」又二つ叩く――先きのより少し音が高い。

「とん／＼……小田さん。」

姓を呼んだのは慥かにお柳さんの聲だ。とは思ふが又お柳さんでないやうでもある。

「とん／＼、とん／＼、小田さん、開けて頂戴な。」

「は、お柳さんですか。」

「え丶私、開けて頂戴。」

がばと跳起きて蚊帳をはねたその刹那、堅次はどきりとして、蹲くまつて了つた。

お柳と堅次と二人でこの棟の下に夜を過ごしたことは幾晩もある。お柳は取付の四角な部屋に、堅次は折曲つた我が室に、二人きりで今迄は何事なく寢て起きてゐた。それを堅次は何とも思はなかつたのだが、然るに今、戸をあけに行かうと蚊帳から出かけたその瞬間、堅次はどきとした――とぎりとすると蹲くまつたぎり一足も運べなくなつて了つたのだ。肩をつまゝれた事、羽がひ締にされたことが稻妻の如く目前にひらめく。

「開けて頂戴、早くよ、小田さん。」聲が甲高になつて、叩く手も荒くなつた。づしんと小田さんが頭の髓まで響き込む。

「早くよ、小田さんてばねえ。」

「…………。」

「開けちやくれないんですか。」

如何して出てきたか、如何して開けたか、堅次には一切解らなかつた。が、お柳の顔の輪廓だけは微白く暗中にみえた。

「ありがたう、お氣の毒樣、どうも。あゝ苦しい。」ふうと鼻の先に酒臭い息を吹きかけて、「その代りおみやげがあつてよ。こんな可いもの、ビールとお菓子。嬉しいでせう、え、貴方、一寸さ。實があるてせう、私。あれ、危ない、危ないてばさあ」と蹣跚と跟けかゝつて、魂が藥脱けたやうに佇立つてゐ

る男の顔の上に暑い〳〵顔をのしかけた。拍子、奥の知れぬ眞暗な穴が、家中擴がつて、大きな渦巻となつて、眩めくばかりの速度で堅次の目前をぐる〳〵驅け廻る……………。

いつも早起の堅次が九時近くなつても顔を洗ひに出ないので、内儀さんが不審して上り口の戸を引ぱると、がたぴしゝながら開いた。お柳の貝細工の簪が、折れて落ちてゐる。先づ堅次を起しておいて、お柳の部屋を覗く。これは朝寢が常例だから、その儘默つて引き下がつた。

三十分もすると堅次が井戸端に出てきた。蒼い〳〵面をしてゐるのをみて、如何なさりましたと聞いたが、返事は判然せずに、兎角内儀さんの目を避けやうとする樣子だ。昨夜暑くて寢苦しかつたせいだらうと思つて、内儀さんはその上別に尋ねもしかつた。

昨夜のことけさ――明方のことを思ひ出すと堅次は不快で〳〵何とも彼とも言ひやうが無い。醜だ、醜だ、醜だ！と繰返して、兩手で頭髪を掻き挘つて机の上に突伏したまゝ身動きができぬ。慚愧後悔 腸を斷つ想ひて、此儘息絶えよと胸の中で叫ぶ。

内儀さんや小娘に面を見られるのが何より辛らい。お柳の顔は無論見ない。起きてきたけれど彼方からも面を見せない。見せず、見られぬが嘔吐を吐くほど厭なことはよく解かる。蒼い面、濁つた瞳、毒々しく赤い 唇――吁厭だ！とぺつと唾を吐いて庭に目をうつすと、不圖海水浴で會つた和子さんの可憐な無邪氣な姿が顯然と現はれたのだ。

あの澄んだ純一な眼容を今一度見たいものだと思つて、又同時に。

「もう和子さんと會つたり話したりする資格は己にや無いんだ！」青蠅のたかつた腐れた肉だ、糞汁にまびれた豚だと感じて堅次は、熱い涙をほろ〳〵と滾した。

（完）

切株

吉江孤雁

家屋は大半破碎せられ、屋敷の外を廣く取圍んでゐた杉の生垣は引破られ、裏庭から續いてゐた松林、楓の樹、高く聳えてゐた榎、其根本から樹の半程までも爬ひ登つてゐた葡萄の大きな藪、皆切り拂はれて、鬱蒼として一團の杜をなしてゐた七本の槻の老樹は、其中の大きな三本を切つたので、後はすつかり明るくなつた。今迄は日影も浴ずひよろ〳〵してゐた下草は、元氣よく生長する。犬蓼、露草、藜、などのたけ高く伸びて其三つの切株をば覆ひかくすやうにする。吸葛、野朝顔が一面に爬ひまわつて、紅に水淺黄に其切株の面に點綴する。

朝日が登り初めると、切殘された槻の樹の青葉は影を長く地に敷いて、切られて間もない其三つの切株の面をば、痛々しそうに覆ひ包む、日が次第に、高く登ると、綠の陰も次第に遠く退けられて、周圍をかこむ草の露も乾き、白く稍々茶褐色を帶んで來た切株の面は容赦もなく烈日の下に照らし出される。切目は疊六枚敷く位の大きさがあらう、其面にはピシ〳〵と縱横に罅が入いつて、中央には地下幾丈の下までも續いてゐるだらうと思はれるやうに大きな穴が穿いてゐる。

厚は此切株の側に立つて樣々な回想に耽つてゐる。

厚が故郷を出たのは十年前だ、五年前に一時歸省したが、其時はまだ杜も舊時のまゝ、家屋も舊時の

まゝ、家の人も、祖母も居た、叔母も居た、母も生存してゐた、それが今では、其三人の女性はもう此世にない、弟二人もそれ〳〵散つて家にゐない、只父と少妹二人とが破屋の片端に居るばかりだ。

夏の朝の空氣はいかにも爽々しい、深く吸ひ込めば身も輕くなる。四方の山影が鮮かで、今迄て杜に遮られて見えなかつた隣村のさまが、別な國へても行つたやうに際立つて目につく。

草叢の中から切株の周圍をめぐつて、酒倉、穀物倉の立つてゐた跡へ出て見ると、一面の大豆畑に變つてゐて、青々と茂つた葉の陰にうす紫の花が微かに咲いてゐる。松の林のあつた方へ行くと、夏草の中に昔からの苔むした井戸端に、一ぱいになつて水が湧いて流れてゐる。

幼時の回想は潮のやうに胸に溢れて來る、そして五年前と五年後と轉變の如何にも甚しいのに只舊い物語の中でも歩いてゐるやうな氣がする。

穀倉が三棟、文庫倉が二棟、他に酒造所、油倉、一時に四五駄の米を搗き上げる程の水車場、二三の小作人の家族が住んでゐた門長屋、物置場、厩、秣小屋、嚴しい乳金門、盡く跡方が無い、生垣に添うて取卷いてゐた細長い池は、大方岸が崩れこんで水が銹てゐる、岸を踏んで通ると、ぶつ〳〵と白い泡が浮き上る。――斯樣な荒廢した跡が曾て自分の生れた家かしらと思ふと不思議な氣がする。一寸立留つて見渡してゐると、妙に靜寂で、白ぢやけたやうな調子が隅々まで行き亘つてゐる、切殘された樹の青葉は半面日の光を受けて、黒い影を今切株の上まで投げてゐる。――何物かさん〳〵に亂暴した後て「ざまを見ろ、少しても俺に手向ひすると此樣な目に逢はされるぞ」と、何處かで嘲笑つてゐるや

うな氣がする。

厚の父が一寸した失敗から、四五年も續いてた家が此憫然な仕末に陷つた、鑛山事業に手を出した爲めだとか、議員の選擧に失敗した爲めだとか解釋を付ける人は付ける。然し厚にはどうも只それぱかりとは思はれない。

昔はよく杜に嵐が荒れて行く事があつた、其樣な時、何人に敎へられたのか、兒童等は大樹の幹へしがみ付き耳を當てゝ、風を聽くと云ふ事をやつてゐた。――ごうと云ふ響が枝を傳り幹を通して地下まで深く沈んで行くやうで、其響が高くなればなる程幹は搖れて地は裂け、家屋も撥飛され、家の中の人は皆殺されるやうな氣がして、思はず泣き聲を立てゝ其樹の下を飛びのいた事もある、何か不平でくてたまらずにゐる大きなものが、杜を倒し家を突拔いて何處へか飛び出して行かずば息まないと云ふやうな氣がする。一度は必ず家の破碎される時があらう、樹の切られる時があらう、そして小さな小屋掛けをして家の者が皆て其小屋の爐邊に集つてゐる時があらう。さうすれば屋敷が明るく廣くなつて生々するだらうと云ふやうな空想に耽つた事もあつた。所が、其空想は殆んど實現せられて今眼前に開展してゐるては無いか。厚は殘念でも、口惜しくもない。有るべき事が啓かれたやうな氣がする。殘存してゐる青葉の陰に黑い破屋の端が見えて、其中に父と小妹とが住んでゐるのかと思ふと一種不思議な氣がして來る。

屋敷の中を一廻りして、槻の樹の下へ來て其幹へ身を倚せかけた。樹肌が衣を透して身に觸れるやう

に覺える。心は靜かになつて樣々な過去が歷々と眼前に生き還つて來る。

夏の初め槻の若葉の出初める頃は、白い、極めて小さな有りとも思はれないやうな花が一面葉隱れに咲く、やがて實となる。此も小さい、青い色をした菱形のもので、此小さな木の實から如何して此樣な巨樹が生ひ出たのかと不思議な念がさせられる。此實が落ち出したらそれこそ止む時がない。ほろ〳〵と夜でも晝でも屋根に落ち庭に落ち畠の中へ落ち、掃き集めては川へ捨て、捨てゝも捨てゝも直ぐ後から溜つて了ふ。或年、其掃き捨てた殘りを搔き集めて置いたら、何斗ばかり有つたらう、それを俵へ入れて庭の片隅に置くと、何處で聞いたのか、旅商人が來て、それを賣つて呉れとの事であつた。何にするのかと訊くと、方々の森の木の實を集めて遠くへ送つてやると、植林するために其等の實をば播き付けるとの事であつた、もうそれ等の實からは芽が出て、若木となつて知らぬ土地に生長してゐるのかも知れない。其年限り「槻の實」を買ふ旅商人は尋ねて來なかつた。

根元の小高く盛り上げてある土の中からは、幾つかの蟬が拔け出て大樹の幹にとまり、其拔け殼が殆んど隙間もなく幹の周圍に取りついてゐるのであつた。所が其頃には克く槻の外皮が剝落する。自ら落つるものと、風に吹かれて無理に剝ぎ取られるものとある、其剝取られた跡は青い色をして乳のやうな水が其處から滴り落ちる。いかにも痛々しい。樹の根には無數の黑蟻が巣を作つてゐて、日每幹をば上下

してゐるが、それが群がつて木地へ吸ひ付く、樹肌から泌み出る乳をば吸はうとしてゐるのであらう、眞黑くなつて一處に輪をなしてゐる。それを見ると、嫌な氣がして身軀じうが身震ひするやうで耐らなくなり、家の中へ馳け込んで、一日でも二日でも戸外へ出る事すら出來ない事もあつた。

五年間居ない中に色々な事が起つた、伯母の死んだのは枯林に雪の降積つてゐる頃で、祖母と母の死んだのは若葉のまだ柔い夏の初めであつた、祖母と伯母とは家の舊分子、舊時代の權化、母は新たに他家から嫁いて來たので力が弱い、舊い歴史の籠つてゐる家には何時からとも知れず釀されてゐる恐ろしい排他的の思想がある。其思想が固つて祖母となり。伯母となつたのだ。柔しい懷しい常時涙を持つたやうな眼をしてゐた母は取りつく方が無かつたのだ。世の中に取付く方が無と云つて恐らく此母親位寄邊なかつた人もなからう、

厚が五年前に一度歸つた時でも、母の姿は見る影もなく瘦せてゐた。美しかつた頰の色が失せて、頭髮は薄くなり、肩は一層こけて呼吸づかひも苦しそうで、一體が華奢な小形な人が一層華奢になつたやうに思はれた。

家の人達が寢靜まつてからランプの下で、聲を潜て母は語り出す

「お前のう、御生だから伯母樣に善くして上げてお吳れ、お前が伯母樣に善くして上げないと、又私ぶつらくつて困るから」

「だけれど、嫌やですね……」

「嫌やだつて、それでは私が如何すれば好いか解らなくなつて了ふ。お前に手紙を出す事も出來ないし、歸つて來ても餘計な事を喋つてはいけないと、昨日も固く言ひ渡されたしね」

「關はないぢやありませんか」

「關はないつてお前、それを少しでも爲樣ものなら、それこそ恐ろしく叱られるのだからね、もう私の身體なんか長く續かないやうな氣もするし……」

「だつて、それは仕方が無いお母樣が忍べるだけ御忍びなさい」

「忍ぶ事は忍ぶがね、せめてお前にでも話そうと思つて……」

母はその儘語を切つて一寸と傍を向いてランプの光を避けた。薄くなつた頭髮の小さく結つた髷が下がつて、細い頸が青白く、何か物の影を見るやうな氣がする。「せめてお前にでも話そうと思つて……」其語が鋭く胸へ響いて、何か言はふとしても厚は語が出ない。情けないやうな淺ましいやうな言ふに言はれない思が充ち充ちた。

母は賑かな町家に育つて、十八の歳の暮、振袖の美しい姿で此杜の家へ嫁いで來たのであつた。家はまだ盛の頃て、養父母と、夫と、夫の姉二人と、召使の男女も四五人はゐた、やがて祖父が歿する、父の姉も他へ方づいたが、一人は程なく夫に死なれて歸つて來た。其頃父は年少だつたので、少しの借財を苦にして其を整理すると云ふ次手に、所有の田畑をば金に代へて、金廻の爲にとて、母の里方へ預ける

事にした、此が云はば一家紛亂の基て、一時隆盛てあつた里方も、商業の失敗から、遂には其預り金さへ返されなくなつた。母は窮境に立つ事になつた、父の家出は其頃から烈しくなる、遂には十年も居た後て、母は二人の小供を殘して里へ歸る事になつた――里へ歸つて後に母の困難は云ふまでもない。所が、其後又十年以上も離別の姿になつてゐた母は、或人の骨折で復び厚の家に戻る事になつた。「里方の者とは緣を切つて、只小供の爲めに戻る」と云ふ事て、厚に取つては未見の弟を連れて歸つて來た。十年以上も逢はない母親だ、如何にも懷しい、懷しけれども其間に何者か入つてゐる。情がしつくり合はない、厚の頭腦は既に排他的に傾いてゐた。舊い歷史が半ば以上頭腦を支配してゐた。「母は氣の毒な人だ」と口癖のやうに言つてゐるが、如何も厚の情は母を溫め母を勵ます事が出來ない。弱者を嘲ると云ふやうな恐ろしい念が不圖胸を突いて走る事がある。

母子の間に情けない會話があつた翌朝だ、厚は朝早く庭へ出て見ると、何人か大樹の陰て、ひそ〳〵話し合つてゐる者がある。一人は母の聲らしい、一人は出入りの老婆の聲だ。

「でも、厚樣が御歸りなさつて、幾許かおよござんしよ」

「いゝえ、あれが歸つて來ると、猶更家内がむづかしくつてね。私に好くして吳れゝば、吳れるで皆樣が嫌な氣がなさるし、それに、彼れの氣だつて何だか解らないしね……」

風が青葉に噴ぐので克く聞き取れないが、不圖其語が耳に入ると、はつとして思はず厚は驅け出そうとした。常時は氣振にも見せないが、母はやはり自分の無情なのを感じてゐるのか。心から泣いて母

の愛を受けやうとしても、妙にそれが逸て了ふ。濕つてゐる眼に力を入れて、それでも何處か物臆ぢするやうな風で、「お前此を仕てお呉て無いか」と言ひかけられると、妙に一寸と逆つて見たくなる。「嫌やです私他に忙しい事があるから」と一言に退けると、強いて言ひ張らうとは爲ない、悄然とした風で、「さうかえ」とばかりでやめて了ふ。取り付くすべもないとのやうな其風を見せられると、又耐らなくなるが如何も何とか逆らはずにはゐられない——老婆の聲は又耳には入る。

「そんな事が、とんでもねえお前樣、厚樣だつて、どんなにかお前樣の此方へ御歸りなさるのを待つておいでなさんしたゞ、え、え、お母樣が歸つて來てさへ呉れゝばつて仰つてね……」

「さうかね、私だつて、此度歸つて來るには厚一人をたよりにして來たやうなものだがね、それが來ると直ぐ東京へ行つて、歸つて來てもね……………

厚はもう聞いてゐるに忍びなかつた。小急ぎに其處を去つて、後庭の池の方へ行つた。何だか胸が掻き挘られるやうな、又嫌な氣がして耐らない。暫く無意味に池の岸を歩いてゐたが、振返つて見ると、大きな樹の根本を母と老婆とが右と左へ分かれて行くのが小さく目に入つて來た。

何故心から母が愛されなかつたらう、耐らないやうな氣がしてゐると、回想は一層以前へ辿つて行く。

五月雨がしと〱降つて闇が深く杜を包んでゐた頃だと思ふ。或晩、厚は眼が痛んでたまらない、眠らずにゐると、母は枕頭へ金盥へ水を入れて持つて來て、手拭を絞ては痛い眼に當てゝ終夜看護して呉れた。翌朝になると、眼の痛みは大方無くなつて了つた。其朝だと思ふ、家の人々が、祖母も伯母も皆な

居る所で、厚は。昨夜はお母様が、終夜私の眼を擦て居たので、幾許睡くても眠られやしない」と言ひだした。母は一寸と眼を擧げて厚の方を見たが、坐に耐らなくなつたのか、つと立つて室を出て了つた。祖母も伯母も默つて、他所事のやうに茶を飲んでゐた。後二年して母は歿して了つた。勿論厚は其死に目には逢はなかつた。

「母は死ぬ爲めに歸つて來たんだ。何人にも愛せられず、只死ぬ爲めばかりに歸つて來たんだ」と思ふと、恐ろしい力が身に感じて來る。外界から來る者は何者も入れまいとする、如何なる人をも排出しやうとする此家には一體如何なる力が籠つてゐるのだらう。

財産の大部分を失ひ、家屋を破り、巨樹を切つて、父はほつと息をついて、先づ此れで好い、自分の果すべき職務をば盡したと云ふやうな調子で日を送つてゐる。

破屋の一隅の今の住居、廣かつた臺所の一部を切つて、舊時の十分の一位の爐を作り周圍に莚を敷いて、村の農夫が毎晩のやうに樣々な話を聞きに來るのを合手に、爐へ枯木を燃べながら話してゐる。如何にも安氣で、今初めて所を得たと云ふ風だ。「何あになるやうに成るものさ、俺が爲なければ貴樣がやるばかりだ、」と言つてゐる。

樹上の青葉には風が一層騷ぎ出した。向ふに見える廣い松原を越えての山の頂からは白い雲が湧き出して、次第〱に廣つて行く。青葉が騷ぐにつれて回想は繁くなる。雲が廣がるにつれて陰影は明るく暗く切株の上を覆ふて走る。

褪せたる色

秋庭俊彦

此の詩の中にある『獸の戀は戯れよ』と云ふ一句は小說「破戒」のなかの句だ。曾て自分はこの句から强い印象を受けた。今でも繰返すたんびに何となき物寂びしさが胸に響くのだ。

その女、髮の油のぬれ色に
灯影なまめく夜なりしよ。
あつき心はうち顫へ、
ひたとくちづけ、なべて我
若き日を、夢を、我自らを忘れはて、
淫らなる樂欲の阿片の毒に
醉ひあざれ、うとうとと眠りにき。
さな問ひそ、

我はただ人生の暗き獄屋に
つながれてある寂びしさを、はた胸の
見えざる影の嘆かひを、
ただ刹那、刹那だにわすれむと、
それのみにもとめき、戀を、戀と云ふ肉の香を。

その肉の香は弛ゆく髓に沁みゆき、
わが若き血潮を汚し饐えよどむ。
ああ病毒のくるほしさ。

かくてわれ目覺めたれ、
獸の戀は戯れよ。——
病は癒へつ、さもあれや
獸の戀は戯れよ。——

その女——古戀人に、——われはいま
塵埃いぶせく窒息む都の大路、
馬、車惱める辻にふと會ひぬ。

そしらぬ樣にちらと見ぬ。
あな哀れ、悲しげに曇れる面、
賣女かと白粉ときめきはすれ
蒼ざめてやつれし姿、
更らにまた褪せたる色の唇よ。
しほじほと辿りきぬ。

何しらずこの時われは殘虐を
行ひ得たる快さおぼえて、寒き空笑みは
頬にこそのぼれ。――やがてふと
獸の戀の戯れのさびしさおもひ
執ふかき哀愁に胸はせまりぬ。

譜

うら悲し、ピヤノの蓋はとざされぬ。
うら悲し、心も影にとざされぬ。
一室のなかは青き灯の細きためいき。

譜は君とわが音の縺れ
消えてしゆけば、うら悲し。
黒帷かすかに顫ふ。

和歌　柴舟選

○　中野紫葉

葉の露にうたれて立ちぬひややけきあしたの森にいふこともなく

父たるにふさはぬわれをよくしりていく年去らぬわが若さかな

道はいま靜寂としてもろもろの音をばをさめわれをまつらし

生といふ國はもをかしわれとひとかはれる路の幾條をゆく

いつか來しつめたき手してわれつれて日月の道

をひた走る子は
濃みどりのゆるがぬ中のうれしさはたまたまおつるかの雫にて
よろこびにあれど足らざる思ふとおこるこゝちし夏をまつかな
いつはらぬわれを思へばさかしらのひとの詞にあふこゝちする
長き足ふたつはもげて卓の上に灯にやかれたる虫はまろべり
たどりきてあふげば大樹葉をふせてものこそいはねわれをむかふる
生れきて初めてふみし地はなほおなじ荒びし足をのするかな

○　樋渡明花

月光の青きが青き野の草にしたゝるよをひ涙はてなし
哀樂のいづれの國へ我れをしも運びゆくらむ日の小車は
腹白き巨口の魚を肩にして蹌踉とゆく初夏の磯
何事を思ふともなく深林のしゞまの中に立つ久しさよ

春の日はさしぬ此世に飽き倦みてつかれはてたる人の瞳に
林間のしめりし土に芽をふきし草にも花の咲く夏は來ぬ

○　大友月人

水流るあゝ水流るいかなればかく安らかに岩越えて行く
たわいなき生活(なりはひ)どもをくりかへし今日の一日もかなしう暮れぬ
春逝きぬ夏は來りぬそれとなく思ひこもごもなる夕かな
かつてわれ踏あやまりし道ながらあまりに多し首垂るゝ日の
くれの街どよみ行くかな現世のさまざまごとに人は汗して

○　關本梁村

大空にまひるのひかりみなぎりて木々の若葉はみな匂ふかな
ともすればあらぬかたのみうちまもり吐息のみせし日ぞうかび來る
故しらず昨日をおもひ一昨日をおもひさびしく

ほゝえみて居ぬ
われひとり老いぬひとみなよろこびにみちたる
聲し語らふなかに
小草の根ふとかむあまさちひさなるよろこびに
しもわれは生くなり
青き空乳の色なるひとひらの雲こそうがべ靜か
なる日や

○ 角田野花

月光の冷たき夜かなかるゝ時偉き力の人も死ぬ
らし
わが胸の形をしおそれ若き日に描きすてたる幻
を趁ふ
たゞ言も氣重にいひて我胸を亂す人ありいとに
くきかな
ものみなは深き恐怖に包まれてまがものや來と
待つらむがごと　(深夜巷を通りて)

○ 草野汀秋

おぼえざるよろこびもつ日君が戸に薔薇といへ
る紅き花咲く
むれてとぶ鴎にまじりわが魂は我にかへらず青
き海ゆく

○ 大石青花

夜の風凪ぎて世界の沈靜に落つれば心泣きぬし
づかに
きりりきり泣くは何物枕上ともしつめたう夜は
ふけにけり

○ 渡邊潮畔

夏花のかほりみなぎる眞晝野にさまよふ魂の行
方知らずも

○ 野々口精一

かくて我れ何の望のあればにか死を忘れつゝ天
地に生く
風吹けば木の葉ことごと聲立てゝ救を呼ぶと空
を見るかな

○ 井出八井

野の遠(をち)はあかるう照りて若草のうすきみどりに
いま入日する
樹によれば母かと惑ふやはらかき御手に眠りし
日のこゝちして

○ 佐藤琢琅

君が家と我が家の中の一本のさくら實となり夏
は來にけり

○ 岡本臥牛

北の國氷の湖のあけがたをやつらてすべる朝月のかげ

○ 富田碎花

何ものゝ影だにもなし戸をいでゝ仰ぎてはみる大ぞらと地とに

ほこりかに肩は搖すれどあめつちにたゞひとりてふわがさびしさよ

○ 鵜澤珪泉

なつかしきめして我れ見るをとめらのなかにしあれど心寂しも

○ 佐藤茂

絹を織る少女のかみにしづれ來ぬ機のはしらの華籠の藤

○ 大津照水

地の胸の砂をどらせてくらきよりあかるきにわく、思てふ水

○ 三浦幽香

海を見てはた山をみていと輕き悲みに居ぬふる郷の家

○ 玉野清

手浸せば底すく石に初夏の、日影亂るゝ野の小川かな

白日の中にしなれと何んとなく、不安覺えて涙ながるる

櫻あり野あり山あり流れあり中に我れありしづ心なき

紫の花のしとねに斑牛、はらばひて居ぬ牧の春の日

（應募和歌は東京市小石川區一三三尾上柴舟宛の事）



雷

鮓桶を洗へば遠きはたゝ神　へき

雷鳴や盥の中の魚はねる　同

惡左府の柩通やるはたゝ神　同

雷落ちて大雨霽れけり瓜の花　同

雷や衛士の篝の燃え盛る　同
芭蕉玉ほぐれて雷にさくる哉　同
竹植えて遠かみなりを仰ぎけり　同
雷や蚊屋に集る小傾城　同
敵陣に馬逸しけりはたゝ神　同
虹見えてかみなり遠くなりにけり　同
はね返る俎上の鯉やはたゝ神　同
雷に布袋の臍の油斷かな　同
雷にすはとさめたる晝寢かな　長鯨
鳴神に硯の海の震ひけり　竹枝
片照の片降ならんはたゝ神　牛午
雷や葱の軒に雨車軸　小蔭
遠雷や微風に落つる柿の花　里子
雷や橋杭に船を突あつる　火箭
遠雷や權兵衛が鼾ほども無く　寶水
雷や巽の空は墨のごと　癡足
垣越えて來る盗人にはたゝ神　緑洋
雷の一本松に落ちにけり　露々樓
雷や十字架光る天主堂　白雨
戸を閉ぢし晝の草家や雷神　ろく水
雷や十里野牛の遲々として　大哲

斧入るゝ杉や近寄るはたゝ神　牛叟
雷おどろ歸山の僧が頭上哉　僊舟
巖上に何祈る女はたゝ神　花鷄
麥粉挽く臼のとゞろや雷遠し　藍川
雷の雲遠く去る廣野かな　木柏子
雷鳴や旅商人の早どまり　呼舟
雷や禪を修行の人若し　二重城
雷の遠きに近し浪の音　小蛙
雷鳴るや水論の彼我旗を卷く　漁郎
打ち下手のころがり下手や雷落る　八面琅
雷の早瀬に落ちて流れけり　惠壽雄
黑船の沖に見ゆるやはたゝ神　鯨舟
土砂降りの雨となりけりはたゝ神　吼天
雷や米舂く男唄上手　せん子
雷の鳴るほどに雨降る程に　竹涼
僧兵の雷を喝して下山かな　琴星
百万の甍の上やはたゝ神　楜村
天井に貼る雷除けのお札かな　其櫻子
神鳴の眼の上の瘤に響くかな　吟朗
一峰に映ず夕榮雷遠き　團十郎
雷の雲の切れ間を落ちにけり　さく舟

山の溫泉の二階に人やはたゝ神　盛花
推敲の吾がホ句成りぬ雷はれぬ　桂村
刀打つ合槌絶えてはたゝ神　靑眉
南山に黑雲起きて雷神　櫻村
雷や大きな蚊帳に獨り寢る　尺水
藍壺の底のひゞきやはたゝ神　夜色
辨慶の來ぬ夜なりけりはたゝ神　百句拙
雷過ぎて明るき雨戶開きけり　朱郞
かみなりや筑波にかゝる雲の脚　壽秋
雷のおぞましかりし戀もあり　連雀
鳴神の沖行く白帆一つかな　綿紗
雷や心太賣る寺の門　綠水
遲々として神鳴る中を牛車　六絲
遠雷や河原に晒す布白き　同
瀨戶を行く足遲き船やはたゝ神　羅石
納屋の戶のはゝき木のびぬはたゝ神　同
雷や客に蚊帳吊る船の宿　草童
小雷親雷の加勢かな　同
船出して遠き雷聽く日かな　烏城
雷や欲すてゝある畑の中　同
雷やいさゝか搖ぐ蓮の花　壺人

江の島は雨の中なりはたゝ神　同
鳳髻を道に奪ひぬはたゝ神　八王子 春洋
鮓を壓す我に涼しき雷雨哉　同
屁の如の雷哉と一茶なか　天唖郞
雷に半道早き宿りかな　同
かみなりや河原蓬の一ト嵐　伏竹
雷や薙刀をとぐ山法師　同
雷にものめくさまや敵の陣　粱村
舟に居て陸の遠さよはたゝ神　同
雷止んで蚊の啼く石蕗の葉裏哉　黃葉村
法華寺の團扇太鼓や雷の鳴る　同
稿をつぐ忠邪の辨やはたゝ神　太郞
江を橫ぎる蘇帆一つはたゝ神　同
歸り帆に雨いさゝかや雷遠き　同
行水の盥仕自へばはたゝ神　玉雪
雷に負け崩碁して歸りけり　同
雷に恐ろしき夢さめにけり　同
雷の落ちし化物屋敷かな　麥花
雷に渡しの舟の小ささよ　同
雷や麻に降りたる日照雨　同
香一縷遠雷のそどろかな　碧雲居

雷や寺に大鐘鑄る日なり　同
横さまに戸をうつ雨やはたゝ神　同
須彌壇の灯に立つ風やはたゝ神　靜帆
自若たる端居の僧やはたゝ神　同
はたゝ神人馬の走る巷かな　同
雷に遠き思や蚊帳の中　同
驛つぎの駕の早さに雷雨かな　征鬼郎
小ざかしき虎の褌や子雷　同
壁落つる蠅とり蜘やはたゝ神　同
敵來ぬと陣貝鳴るや夜半の雷　同
牡丹さかし其夜おどろとはたゝ神　柿腸
雲の峯崩れ終んぬ雷神　同
雷の遠のく頃を夜半の鐘　同
遠雷や菖蒲湯ぬるき峯の宿　同
遠雷や薪割り急ぐ寺男　重山樓
一念は雷ともなれと祈りけり　同
青くなる七面鳥やはたゝ神　同
遠ざかり行く雷や風呂を焚く　同
照草に素通り雨や日雷　三錢子
はたゝ神呪ひの杉の名ありけり　同
瓜喰ふて落付かぬ腹やはたゝ神　同

鳥羽が繪やでん〳〵太鼓はたゝ神　同
はたゝ神お山開きの日なりけり　象外
神鳴りて歌の論議のやみにけり　同
秣煮る釜に雷聞く夜頃かな　同
雷止んで人語生きたる御殿かな　同
かみなりや舟津に近き下り坂　柳琴
神鳴るや晝顔の葉のやく動く　渭商
雷除けの札や夏蠶も少し飼ふ　魯斧
雷止んで壺の蚊帳の可笑しけれ　青城
雷鳴るや媼が稱名覺束な　稚草
鳴神に鰻釣り居る橋の下　濛雨
學寮の硝子障子やはたゝ神　東京　春洋
雷去つて芭蕉に起る微風かな　同
夜桑摘む頭の上やはたゝ神　總子
鳴る神に米とぎいそぐ女かな　同
麥刈つて安堵の里や雷神　豐川
難船に鐘つく島の雷雨かな　同
雷止んで闇涼しさや飛ぶ螢　一衣
牛すねて動かぬ山車やはれゝ神　同
晝寢さめて雷遠しまた眠る　同
外風呂の蓋しに行くやはたゝ神　同

雷はれて香に立つ百合や坊涼し　同

本號應募者は總て百一名、句數二千四百八十八句、應募句數の三十五句以上を擧ぐれば、柿腸、痿足、漁郎、麥花、惠壽雄、せん子、團十郎、桂村、象外、櫻村、梁村、濛雨十二君の五十句づゝ、靜帆君の四十八句、玉雪君の四十七句、青城君の四十五句、鳥城。竹凉二君の四十四句づゝ、黄葉村、綠水二君の四十三句づゝ、重山樓、一衣、連雀、總子、豐川五君の四十句づゝ、征鬼耶君の三十八句、百句拙君の三十七句、伏竹、春洋(東京)、栩村三君の三十五句づゝなりとす。

募集課題　富士詣　六月十五日締切
　　　　　金魚　七月十五日締切

應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事。

戸をとざす廓の晝や雷神　三聲
鳴神に關所ぬけたる女かな　同
雷にさめし宰予や寢ぼけ顔　桃紅
鳴神の太鼓に下手も交りげり　同

右は締切後に到着したる三聲君の四十句桃紅君の四十二句より撰拔。



文士と道德

城水生

文藝と道德とは古き問題にして又常に新き問題なり、風に下伏す烟の如く其影暫く見えざるとあるも、そは唯潜むなり、消え去れるにあらず、折さへあれば復たしても紛起するなり、道德家美善合一論の壘壁に就ては、文藝家美善對立論の牙城を憑むと言ふが如く、仲裁人なき喧嘩の、爭ひ勞れて自ら分を取るに似る事あるも、そは唯暫時のみ、決して中心より妥協を見たるにはあらず、自然主義文學の聲は肉慾描寫問題となり、施いては作品の發賣禁止となり、扨ては復たかと言はまほしき文藝對道德の問題は賑ひぬ、前述の兩論以外シ

ラーやシエーリングの美至上論なるものあり、吾人は此見地よりして美善の調和聽ては文藝と道德との妥協もあながち難からずと思ふものから、そは暫く說かずもがな、別に文士と道德との命題に變更せば如何、即ち社會の一員として共同生活の群に居る文士なるものと、その社會の共同生活を安固ならしむる道德との關係を見るとせば如何、一面文藝の世界に住む文士なるものは、同時に他の一面に於て道德の世界に居るものにあらずや、然らば自己の作品を上梓する上には、單に文藝上の標準より判斷する以外に、別に道德上の標準よりも判斷せざるべからざるべし、文藝の標準よりして筆を取れ、而かも亦道德の標準よりして之を上梓すべきかを計れ、斯くて相方より多少の步み合をなすを避けざれ、これ社會の一員たる文士として當然の事理にはあらずや、されど玆に至難なるは、天邊一痕の月見る人の心々にて喜悲異なるが如く、文藝上の作品亦讀者の階級品性の差等によつて、及ぼす所の影響決して一なるを得ざることあり、赤裸の西施をして前に姪容をなさしむとも、面壁達磨は一毫の眉毛をも動かさざるべけれ、出ッ歯龜の如きは無心の童女の湯沐を見ても劣欲の血の漲るべし、然らば前の如く言ふはこれ難きを文士に求むるものたるべき哉、醫の事は醫に問ふべし、これを以て別に當局者あり、調法極まる當局者あり、世は分業なり、文士は唯大凡その邊の顧慮に止めて細密の處は當局者に一任すべし、而して當局者も亦一任せられ得る程に、十分文藝上に眼を見開き置くの肝要なるは言ふ迄もなし、然るに前者の倨傲なるか後者の不靈なるかそれは知らず、今の世紛爭の兎角に絕えざるは何の故ぞ、職として未だ這般の見地に乏しきものの多きに由るに非るか、止めよ相罵るを止めよ、發賣禁止を幾度命ぜらるゝとも、自ら顧みて疚しき所なくんばそは決して爾の恥辱に非るにはあらずや、世人も決して之を以て直にさる文士を擯斥することを止めよ、異なる互の標準によつて異なる互の行動を取ること、其處に一毫の非難あるべきにあらず、吾人は此意を以て都會の發賣禁止を喫着したる生田葵山人、復讎の發賣禁止を喫着したる佐藤紅綠氏に對し、江湖の漫に是非の念を兩氏に加へざらんことを欲す。



我輩も猫である（十四）

白　也

案山子君は、鳥渡、枯尾花のやうな髯を、大切さうに拇示の二指てつまんで、チョイ〳〵と引張つたが、ハンケチを出して丁寧に撫てつけて、先づ一服召し上がる。

「お茶ても召し上れ」

と主人は波々と注いて出す

「頂戴」

と云つてコックリと飲むと、扨てと云つて話し續ける

「全體どんな女かと役場の書記に聞いて見ると、話しが馬鹿に可いてすな」

「眉へ唾てもつけやうかな」

「いやお心配御無用だ、先づ聞き給へ、書記の曰くさ年は十九、去る素封家の娘て、敎育も相應にある、第一容貌が可い」

「第一が耳ざわりだね」

「然し女の寶は容貌ですからな」

「美顏術の行はるゝ亦故ある哉かね」

「全くですよ、菓子のやうなものですら、見た眼に美しいものゝ方が可く賣れます」

「綿お召の行はるゝ以所也かね」

「男が腦を以て立たうとするに、女は飽くまでも容貌を以て立ちます」

「藝者ある以所也かね」

「唯容貌の賴みにならぬ者だけが、男を眞似て學問などを志します」

「女學校ある以所なりかね」

「彼等は天賦の寶を持たぬ爲めに、苦んて幾干の富を

得やうとするのてす」
「ABCを知る以所也かね」
主人は一々出鱈目を挾む、案山子君は、主人の出鱈目を物の數とも思はずして、ドン〱と押し進む、
「其處て、第一容貌が善いがヅンと氣に入つた、が然し話に聞いたばかりでは安心が出來ん、一度見たいがと云ふと、いと易き事にて候、今宵幸ひ僕の處へ遊びに來るんだから、閑なら君も來玉へ、紹介しやうと云ふ、話が馬鹿に可い都合だ」
「餘り都合が可いと劍呑だ、又添書でも書かれたらう」
「ハヽヽ、いや今度は直接面會だからその危險はない、兎に角それならば行かう、來玉へて書記殿は歸られたが、日の暮れるのが待ち遠だ、
何んとなく氣が浮いて、フワ〱して、何事も手に着かんてすな、本ても讀まうかと思つて開いて見ても、同じ行ばかり何度も何度も讀んて居て、どんな女かしら、早く見たいとばかり書いてゐる」
「何の本だねそれは」
「岩見重太郎武勇傳です」
「え？」
と云つて流石の主人も面喰つた、
「これはいかんと思つて、今度はイソップ物語を讀んて見たが、矢張、どんな女かしら、早く見たいと書いてあります」
「イソップがそんな事を書いたかね」
「始から終までそればかり書いてあるです、今度は義太夫丸本を讀んで見たら、こんなとの子と添ぶしの……とありました」
「可なり奈何かして居るね」
と主人も呆れて眼ばかりパチ〱させて居る
「一層の事寐て見やうかと思つて、頭から布團を被つて橫になつて見たが、變に胸が躍つてたまりません、心臟の處へ手をやつて見ますと、ドキン〱とします」
「誰のだつてするさ」

「それが一層著しくするのです、最う日が暮れたかと頭を出すと、窓の障子へ夕日がかん／＼として、上の方に細い影がかたまつてふわ／＼する」
「それから柿でも喰つたかね」
と主人が先手に出る、此時案山子少しも騒がず
「柿は無かつたから、金平糖を喰つたです、で又寐床へ這入つて、早く日が暮れゝば可いと密かに神佛に祈念をこらした、」
「大變な事になつたぞ、又秋の日がかん／＼して、柿を喰はれた日には、ヴア・オリンを買ふ迄には日が暮れて了ふ(我輩は猫である下篇參照)」
「所が日が暮れないで私の日がかん／＼」
「金平糖をボリ／＼か、少し僕も手傳つてやらう、獨りで話して居ては大抵な事ぢやなからう」
「ハヽ、其御心切に甘へまして、早速ながら日の暮れた事にしませう」
「贊成」
と主人はパチ／＼と手をたゝいた、

「漸く日が暮れたので、早速ながら出懸けました、敢て(南郷街道を二丁來て、鷹台町から市内に這入つて、古城町を通つて仙石町曲つて、喰代町を横に見て、通町を一丁目二丁目三丁目と順に通り越して、夫から尾張町名古屋町鯱鉾町蒲鉾町……)と云ふやうなくどい事は云はず……」
「云はずちない云つてるぢやないか」
「これは僕が云つたのではありません、僕は斯う云ふくどい事は云はぬと、くどい例に朗讀したのです」
「そんな例は可成引用しない樣に願ます、」
「以後は謹みます、」
「晋記殿の處へ行つて見ますと……」
「早速着きましたな、これは目出度い、見ますと……奈何しました」
「見ますと、まだ女は來て居りません」
「又暗礁に乘り上げた」
と主人は苦い顏をする、案山子君は平然として、
「その內來るだらうと云ふので、晋記殿と雜談して居

りましたが中々來ませんぬ、待ち遠やら心配やらで心はドンチヤンする、胸が痛いやうだ、その內女の下駄音がしたから、やれ有難い！と思つたら、隣の家の女中だ」

「終に來なかつたのか」

と主人は連りに先きを急ぐ、實際又此處で、秋の日都かん〳〵の演義をやられては、我輩と雖ども大にへこまざるを得ない、

「然う急がれては忙しくつて話しが仕惡いから、神妙に謹聽し玉へ」

「有難く出來て居るね、それでは精々神妙にして居るから、君も精々簡明に話してくれ」

と可愛さうに哀願に及んで居る、

「それでは非常なる勉强を以て、勇猛突進的に話を進軍させます」

「愉快々々」

と主人は又妙な處で拍手する

「待つ事凡そ一時間許にして終に女は來たです、玄關で御免下さい……と云ふ鈴のやうな聲がすると、來た！書記さんが眼で知らせた、然うかと僕は蒼皇して衣紋を改めたです」

「衣物を着更たのか」

「衣物は着更ないが、襟を合せて座り直して、ハンケチで髯を撫でました」

と襟を合せて座り直して、ハンケチで髯を撫てゝ見せた、

「成程」

と主人は案山子君の演ずる動作を一々注意して見て、終りに撫てたての髯を見て

「成程」

と又言つた、何か言ひたかつたが、面倒だから止めたと云ふ風である

「軈て向ふの襖が明くと、下女が顏を三分の一程入れて、あのウ星子さんが御出でゞ御座います……話が前后しますが其女と云ふのは、姓を細溝、名を星子と云ふので……すると書記さんが、此處へと云ふ下女

は御辭儀をして退く」
「君下女の御辭儀をしたなどは、略しても可いぢやないか」
「然し事實を省略するのは不忠實でしよう」
「不忠實でも可いよ」
「然う君のやうに亂暴では困る、苟も宇宙に現はるゝ一切の出來事は、如何なる細微の事であつても、詩人の眼には悉く詩として映ずるのだから、下女の御辭儀と雖ども、然う手輕に省略し得られるものではないよ」
「然ふ云う詩人が脚本を書いたら、仕立しばかり多くつて嘸ぞ面白からう」
「勿論です、辛い小數の人間に賞められるよりは、甘い多數の人に喜ばれた方が利益です」
「金平糖劇も可いだらうが、切めて僕にだけは詳くやつて頂きたいね」
「君一人の爲めにそんな事が出來るものですか」
「それでは止むを得ない、何とても君の勝手にするさ」
「勿論勝手にします」
話しが變な處へそれて、變な處で切り合をやつて居る、
「何でも可いから早く話し玉へ」
と少々ぢれつたさうな調子で云ふと、案山子君も氣の毒と思つたらしく、莞爾として
「まアさう立腹(おこる)なよ、それでだね、それでだ、」
主人はぢろりと見たが今度は默つて居た、觀念したものと見える、
「下女が引退ると、程なく衣鳴りの音しとやかに、白魚のやうな指で襖をツッと明けると、兩手を斯う新駒屋式に突いて、略三十五度位に首を傾けて、今晩は……と云つた」
「藝者のやうだな」
「馬鹿な事を云つてる、帶は何んと云ふものだか知らんが、兎に角上等の帶を、何と云ふ結び方か知らんが、兎に角具合よくしめてね、」
「知らない事なら略したが可いぢやないか」
「又略せか、煩くね、然し知らんけれど、可かつたね

それてあの、何とか云ふ當世流行の帯上げをして、一本二圓三十錢位の香水の香をプンとさせてね」
「直段まで嗅ぎ別けるのは感心な鼻だね、西洋にもそんな鼻は少ないさうだ、この間或る會社で、香料鑑定人を欲しいと云つて居たが、君行つては奈何だ」
主人もやけになつて駄辯を振ひ出しかゝ、
「折角の處で話の腰を折つちやいかんよ」
「何アに日は永いから緩りやり玉へ」
と反對に主人の方で落付いて了つた、

きくたびに
胸わろければ　時鳥
へどときす
とぞいふ
べかりける
宗長

新刊批評

▲黒熊自傳
探檢小僧筆記
成功雜誌社發行

探檢小僧自ら序して、自分には熊を研究する癖あり常に深山に入つて云々と言ふ、深山に入つて云々それは知らぬが、熊を研究する癖あるの一條は兎に角此書によつて十分に信ずる値がある、我輩は猫や我輩も猫とは少々目的が違ひ、珍しき熊の生活の描寫それを主にしてあるから、別に天外から降る奇想があるては無いが、筆路の輕快、叙景叙情往くとして可ならざるなく、幽溪深林宛がらに現れ、悲喜哀觀宛らに想はるゝ妙は、一氣にして百七十四頁の一卷を讀み了らしめた(定價金拾五錢)

▲日本倫理史綱
足立栗園著
大日本圖書株式會社

儒教は倫理教である、そして此書は徳川期の儒學の全體を略説してあるから、直に近世儒教史といつたが適切であらう、朱子學派、陽明學派、復古學派折衷學派と竝に爾余の學派とに大別して説述してある、一々引用書目、支那聖賢の小傳用語の註解まで添へてあつて、初學者の爲には極めて親切なものである、(定價金六十五錢)

▲偉人黒住宗忠
木山熊次郎著
内外教育評論社

黒住教の教祖黒住宗忠を傳する以外にその教理の批評に甚だ意を用ひてある、彼や如何樣な評隲を受けたにしても、唯至誠で一貫した彼の性質が、偶ま意外の經驗で神格を認め、何となく六合に充滿する一大靈氣を感得するに至つたと見る他には、左迄附すべき價値もない樣だ、が此によつて唯此價値だけでも知れることは淫祠を以て見做され居る斯教の

爲に効果は決して少くあるまい(定價金五十錢)

▲英和熟語慣用句辭典　イーストレーキ著　三省堂發行

骨子になる單語の下に普通の辭書には見えぬ熟語慣用句の一切を一括して載せたもの、極めて容易なもの迄も含まれて居るだけ、それだけ廣く讀書生を益することゝ思ふ(定價一圓十錢)

▲徵兵問答　軍人普及會編　前川文榮閣發行

問答體に徵兵令に關する緖大の事件の說明がしてある、更に入營準備、願屆書式やら改正徵兵令一年志願兵條例細則、陸軍管區表まで添えてある、(定價三十錢)

▲英語入學試驗問題集　妹屋可秀編　明治敎育社發行

明治卅二年以降の諸學校入學試驗英語問題集である、別に解答は附してないが其の方の志望者には調法なもの(定價二十五錢)

▲國文學史講話　藤岡作太郎著　開成館發行

我邦國文學者中、其造詣の深くして、其批評眼の高きこと恐らくは藤岡博士に及ぶものあらじ博士の前著「國文學全史平安朝篇」の如きは誠に學界の誇とすべき名著なりき。此篇は上は神代より下は現代に至るまでの大綱を叙述せるものにして、常に先づ一時代の文明全體を叙して次に其時代の主もなる文學者の評論に移る。人物の取捨、叙述の精粗等に於て苦心の跡頗る著く、此處にも亦博士の卓見を見るに足るものあり。文章は博士の口述せるを更らに訂正せられたるものなれば博士の筆に成れるものに比して稍や幾分の見劣りせらるゝ處なきにあらざれど、概して無難の出來といふべく、處々流麗誦すべきものもなきにあらず。此篇は博士が愛見を失はれたる紀念の出版にして世の同情を惹くことも少からじ、吾人は此種の著作に於て最も眞面目にして、最も價値あるものとして江湖に推薦するもの也。(定價金貳圓)

▲その前夜　相馬御風譯　內外出版協會發行

ツルゲネフの著「オン、セ、イーブ」を譯したるもの也。我現今の小說界に於てツルゲネフ程歡迎せらるゝものなき模樣なれども其飜譯は決して多しといふべからず。殊に彼の長篇に至ては僅かに二葉亭氏の「浮草」(ルーヂン)を除く外、未だ一の飜譯を見ず。吾人其だ之を遺憾としたりき。御風氏の飜譯、若し强いて難をいへば、字句等の末に於て些か洗鍊を欠く處なきにあらねど、概して流麗暢達の筆路、確かに好飜譯なりといふを妨げず。男主人公インサロフは少しく木偶の如しといふ批難もあるやうなれど、其女主人公エレナは女性を描くに巧みなるツルゲネフの作中に於ても最も傑出したりと稱せらるゝもの、一度卷を開けば、讀み畢らざることの早きを嘆たしむるもの、是れ實にツルゲネフの靈腕にあらずんばあらず。吾人はかゝる眞面目なる飜譯の續々出版せらるゝことを祈る。

▲新派短歌評釋　附作法　窪田空穗著　文substitute

新派歌人の代表ともいふべき與謝野、山川、增田三女史、與謝野、尾上、太田、水野諸氏の作を讀んで浮びたる感興批評等を美文體に書きなしたるもの也。評釋といへど普通いふが如き字句等の解釋よりも寧ろ全體の趣味を讀者に味得せしむるを本としたるもの也。附錄の短歌作法亦見るべし。(定價四十五錢)

▲益軒樂觀　四田敬止編　博文館發行

貝原益軒の著作中より其樂天的思想のあらはれたる文章を拔萃して一册に編したるもの也。益軒は固より大いなる哲學者にはあらず。而かも天を樂み心を平かにして一意斯道の普及に盡したる所、確かに一代の人傑といはざるべからず。此書が今日の思想界にも尙稗益する所少からざるべきを思ふ。（定價六十五錢）

▲炬火　中村春雨著　今古堂發行

「中央新聞」に掲げられて好評を博せるものなりといふ。社會問題を中心にして作せるものにて、字句には尙推敲を要すべき所なきにあらねど全體として華やかになだらかなる書き振り、新聞小說としては上の部に屬するものといふべし。只何處となく構案といひ、描寫といひなか〱に捨て難き所あり。口繪は清方の筆艶麗也。裝訂亦頗る美なるも用紙の少しくあしきを惜む。（定價壹圓）

▲春怨　小栗風葉著　今古堂發行

ツルゲネフの著「不幸の娘」を飜譯したるもの也。前半はさして面白しといふべからざるも後半には流石にツルゲネフなりと思はるゝ所少からず。（定價七十錢）

▲ワグネル物語　曾川正譯　內外出版協會發行

ウオーカー、マクスパッデンの「ストーリース、フロム、ワグネル」を飜譯したるもの也。ワグネルが一代の大文豪にして殆んど歌劇界に於ける唯一人の大立物なることは世人の熟知する所今更ら吾人の喋々を俟たじ、此篇ワグネルの歌劇の材料を物語體に書きなせるものにして、恰かもラムの「沙翁物語」と似たりワグネルが如何なる材料を取扱へたりしかを見んには極めて都合よき本也（定價六十錢）

▲巢林子評釋　藤井紫影著　有朋堂發行

巢林子の作「曾根崎心中」「冥途の飛脚」の二篇をとつて丁寧綿密なる評釋を附し、之に附錄として同子の「つれ〲草」の原文を以てせり。學者の參考となるべき節多し（定價七十錢）

▲全國學校案內　高橋都素武著　內外出版協會發行

現在（明治四十一年）に於ける全國の學校の、沿革、課目、年限等を叮嚀に記述したるもの、入學すべき學校の選擇に迷ふ人には參考となるべきこと多し（定價五十錢）

▲心身鍛錬養氣法　足立栗園著　東亞堂發行

氣力の養成に關して、理論上、將た古人の實驗上より縱橫に說述したるもの也。（定價五十五錢）

▲佛蘭西革命史　奧田竹松著

近世史の序幕は佛蘭西革命によつて開かる。歷史上の最も急激なる變化、戲曲的なる動作を見んと欲するものは必らず佛蘭西革命史を讀まざるべからず。此篇固よりカーライル、バーク等を讀めるものには甚だ慊らぬ節多きも、單に歷史的事實を知らんと欲するものには便利なる書也。（定價七十錢）

▲滑稽百談太平樂

武田櫻桃著
光村合資會社發行

笑文庫第二編として發行せられたるものにして、中には少し操り過ぎたるものもあれど槪して罪なくして可笑しき小話を集めたり。（定價四十錢）

▲大覺譜

拜鉛仙史講演
實文館發行

カントの所論の物的方面を一切排斥し盡して、萬有は皆自我の所造なりとせるフイヒテの經路を辿り、斯くて自我と大我とを結び、唯心的一元說を立し、それ以外の物その自體の世界を斥くるかと思へば、現世界と本體界なる章に於ては未知界も知界に屬するらしいが云々の語もあり、其邊の所見に朦朧の影を殘す所もある、又靈眞夜話の章を見ると我說は基督、佛陀の到達點を窮めて更にそれより數步を進めたものだとあるが、善を單に社會の上にのみ求めずして深く大我卽ち本體その者に本づける所は基督敎的の所もあり、而かも本大我といひて之を人格化せず、直に信仰を繫がんとする所は聖道門の佛說めいた所もあるが、それより數步を進めたとは如何なる點であろうか、哲學を定義して自覺にありとし、而して其處に直に信仰を繫ぐとてもいつた點であらうか、哲學の定義に就いては議論もあるがそれはさて置き、信仰を以て第二義門と解する所は宗敎的見地に於て甚だ危い所がある、要するに知と信との心理的硏究からして、今少し二つのもの丶要求の世界を明にしたらばとも思はる丶が著者自らも說いて居る如く、之は單に公衆に對しての斷片的講演である、論理的組織の方は四五年の後に示すとあるから、今後是れ許することは當を得ぬであらう、以上はその大綱と思はる丶點をずつと摘取したるの所見であるが全體からいへばその組織の廣大なる、且つ今日の進步せる知識に十分に濾操して居るので、論理の夕の細かしい切り刻みを止す限には大凡そには首肯かれる說である、他の自稱神佛の徒のそれとは選を等うするものではない、讀んで益する所は甚だ多からう（定價貳拾五錢）

▲荒野

武者小路實篤著
警醒社書店發行

その想必ずしも深からず、深からざれども淸し、その辭必ずしも調はず調はざれども麗はし、淸麗の二字が凡てを掩ふべしと思ふ、小說あり、論文あり、新體詩あり、著者の筆の頗る多方面なのを喜ぶ、挿畫に泰西の名匠の手になるもの四枚ある、甚だ賞すべきものだ（定價五十五錢）

▲朝さよめ

篠原水衣著
光榮社發行

單歌百九十八首、調べる飽きたらぬ節あるものから、敍情、敍景共に精緻に、頗る餘趣に富むもの丶あるを愛する（定價金五十錢）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄に新して且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限内ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に渉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證券を擔保に貸金の便法もあり

京都本店 京都市下京區油小路御前通角 (電話 七貳貳番)
東京支店 東京市京橋區南植町壹番地 (電話本局五壹八番)
大阪出張所 大阪市東區大川町御靈筋角 (電話東壹貳五參番)
長崎出張所 長崎市榎津町六十五番地 (電話 七貳六番)
廣島出張所 廣島市紙屋町(秦 忠兵衛方) (電話 六〇八番)

○壹册定價 金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）但本號特價欄外にあり

册數／國別	內國	外國
六册	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二册	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本鄉西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年五月廿七日印刷
明治四十一年六月一日發行
（禁轉載）

發行編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一
東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被上度候

一　金七圓五拾錢也　同　徑三寸丸　同　目方正味二十五匁付
一　金拾圓九拾錢也　同　徑三寸五分丸　同　目方正味四十匁付
一　金拾參圓貳拾錢也　同　徑四寸丸　同　目方正味五十匁付
一　金拾六圓五拾錢也　同　徑四寸五分丸　同　目方正味五十五匁付
一　金貳拾壹圓八拾錢也　同　徑五寸丸　同　目方九十匁付

三ッ組ノ部

一　金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅入匁付
一　金拾七圓貳拾錢也　同　徑三寸丸　同　同　目方正味五十五匁付
一　金貳拾壹圓八拾錢也　同　徑三寸五分丸　同　同　目方正味八十匁付
一　金參拾壹圓也　同　徑四寸丸　同　同　目方正味百卅匁付
一　金四拾圓八拾錢也　同　徑四寸五分丸　同　同　目方正味百八十匁付
一　金五拾壹圓九拾錢也　同　徑五寸丸　同　同　目正味二頁卅匁付

〔定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢〕
〔文字彫刻　一字　金拾錢〕
〔大字彫刻　一字　金七拾錢〕

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寳堂

〔電話下谷特九六五　一二四四〕


日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又ハ)コハ
振替口座七八〇七
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、
帯留、ブローチ、手釦、
紀念品一式
最新の流行品目錄郵券六錢封入御申越次第進呈す
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價